長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第７集

尾 和 谷 城 跡

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

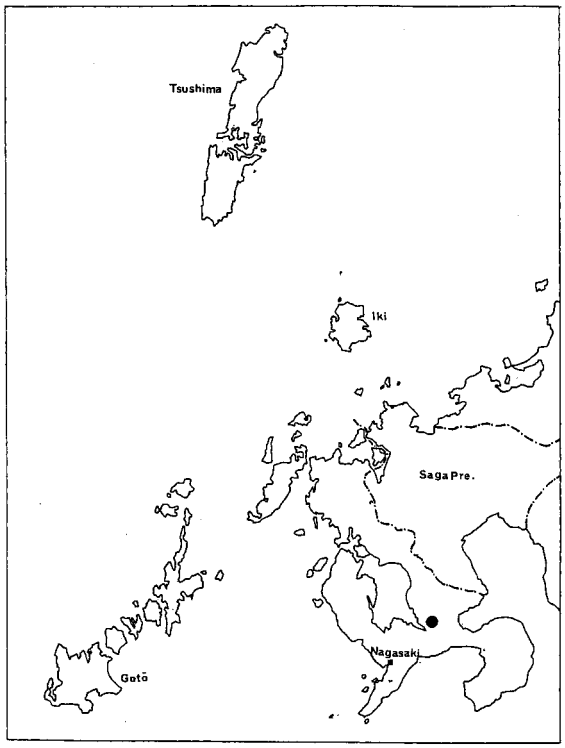
２０１２

長 崎 県 教 育 委 員 会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第７集

尾 和 谷 城 跡

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査



序

私たちは，過去の歴史と文化にいろいろな形でかかわっております。埋蔵文化財もその一つです。先人が残した文化財を損なうことなく，貴重な国民的財産として適切に保存・活用していくことが重要であり，責務であります。

県教育委員会では，これまでも各種開発事業について協議，調整を重ねて文化財保護に努めてまいりました。

本報告書は，九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設事業に伴う，「尾和谷城跡」の平成22・23年度の発掘調査における結果を収録したものです。

尾和谷城跡は諫早市北部に位置し，諫早の西郷氏支城として15世紀代に築城した山城です。出土品に，使用されていたと見られる輸入陶磁器や国産の東播系土器等が多く見られることから当時の活発な経済活動が窺い知れます。

本書を文化財保護や地域の歴史を知るうえで，活用頂ければ幸いに存じます。

平成24年３月23日

長崎県教育委員会教育長

渡　辺　敏　則

例　　言

1　本書は，九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

　調査は，長崎県教育委員会が独立行政法人　鉄道建設・運輸施設整備支援機構　鉄道建設本部九州新幹線建設局の依頼を受け，平成22年度，平成23年度に実施した。

2　報告する調査概要は下記のとおりである。

⑴　尾和谷城跡：長崎県諫早市下大渡野町

⑵　尾和谷城跡の試掘調査は，長崎県埋蔵文化財センターが実施した。本調査は，長崎県埋蔵文化財センターが担当し，発掘調査を民間の発掘調査会社に業務委託した。

　平成22年度は，発掘調査業務を株式会社島田組に委託した。平成23年度は発掘調査業務を株式会社イビソクに委託した。

⑶　尾和谷城跡の発掘調査期間

①試掘調査：平成22年10月25日～平成22年11月３日

②本 調 査：平成23年１月３日～平成23年３月25日

③本 調 査：平成23年４月18日～平成23年６月30日

3　調査時の写真は主に町田が担当し，遺物写真は川淵が担当した。

4　本書の執筆は，川淵が土層と瓦をそれ以外を町田で担当し，執筆者は本文目次に記した。

5　本文の第３部自然科学分析については株式会社パレオ・ラボに委託しその結果を掲載した。

6　本文の第４部尾和谷城跡の自然石板碑については，大石一久氏（長崎歴史文化博物館グループリーダ）からの玉稿を掲載した。

7　地元地権者の山口康司氏には，調査にご協力いただきました。記して，感謝いたします。

8　本書の総編集を町田が行った。

9　本書関係の出土遺物，図面，写真類は，現在長崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

Ⅰ　本調査に至る経緯
１．経緯……１（町田）
２．分布調査……１（〃）
３．平成22年度調査……１（〃）
４．平成23年度調査……１（〃）
５．尾和谷城跡の試掘調査概要……４（〃）

Ⅱ　地理的歴史的環境
１．地質概要……５（〃）
２．土壌概要……５（〃）
３．遺跡周辺の歴史概要……５（〃）
４．尾和谷城の概要……６（〃）

Ⅲ　調査
第１部　平成22年度調査（一次調査）
１．調査の概要……９（町田）
２．土層……９（川淵）
３．遺構……10（町田）
４．遺物（土器，陶磁器・瓦）……18（町田・川淵）
５．小結……30（町田）
第２部　平成23年度調査（二次調査）
１．調査の概要……35（町田）
２．土層……35（川淵）
３．遺構……35（町田）
４．遺物（石器，土器，陶磁器・瓦）……46（町田・川淵）
５．小結……53（町田）
第３部　自然科学分析
Ⅰ　放射性炭素年代測定……57（パレオ・ラボ）
Ⅱ　尾和谷城のプラント・オパール分析……59（パレオ・ラボ）
第４部　尾和谷城跡の自然石板碑……61（大石）

挿 図 目 次

第１図　発掘調査対象遺跡位置（１/50,000）……３
第２図　試掘調査……４
第３図　諫早表層地質……５
第４図　諫早土壌……５
第５図　尾和谷城跡周辺の山城……６

第６図　遺跡周辺の出土遺物……７
第７図　年度別調査……９
第８図　土層実測位置……９
第９図　土層……11～12
第10図　全地区の遺構配置……13
第11図　遺構配置その１……14
第12図　１号集石……15
第13図　２号石組……16
第14図　４号礎石及びピット検出断面……17
第15図　６号集石……18
第16図　８号焼土坑・９号ピット……18
第17図　遺構配置その２……19
第18図　遺構配置その３……20
第19図　３号土坑……21
第20図　土師器・土師質土器……21
第21図　瓦質土器・東播系土器……22
第22図　土師質土器……22
第23図　輸入陶磁器……23
第24図　石器……24
第25図　陶磁器……25
第26図　１号集石内出土遺物……25
第27図　平瓦・桟瓦……26
第28図　桟瓦・軒瓦・袖瓦・丸瓦……27
第29図　丸瓦……29
第30図　金属製品……30
第31図　調査区地形……36
第32図　土層その１……37～38
第33図　土層その２……39～40
第34図　土層その３……41～42
第35図　遺構配置その１……44
第36図　遺構配置……45
第37図　遺構及び遺構断面……47
第38図　石器……48
第39図　土師器・瓦質土器……49
第40図　土師器甕・土師質皿……50
第41図　輸入陶磁器・須恵器・陶器……51
第42図　滑石製石鍋……51
第43図　近世・近代の陶磁器……52
第44図　巴瓦・桟瓦……52

図 版 目 次

図版１　一次調査……32
図版２　出土遺物その１……33
図版３　出土遺物その２……34
図版４　二次調査……54
図版５　出土遺物その１……55
図版６　出土遺物その２……56

表目次

表１　九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）
　　埋蔵文化財発掘調査対象一覧……２
表２　一次・二次調査出土遺物一覧表……31
表３　平瓦・桟瓦観察表……31
表４　軒瓦・袖瓦観察表……31
表５　巴付軒瓦観察表……31
表６　丸瓦観察表……31
表７　巴瓦観察表……31
表８　桟瓦観察表……31

写 真 目 次

写真１．試掘調査……８
写真２．尾和谷城跡の自然石板碑……62

Ⅰ　本調査に至る経緯

１．経　　緯

昭和47年12月に国が九州新幹線長崎ルート[参考1]の基本計画を決定し，翌年11月には国によって長崎ルートの整備計画が決定した。

その後，情勢の変化で進展がみられなかったが，平成20年３月に国土交通省から着工の認可があり，これを受けて，平成20年４月に九州新幹線長崎ルート武雄温泉－諫早間の起工式が行われた。この新幹線長崎ルートは，レール幅の異なる新幹線と在来線の両方を走行できるフリーゲージトレイン（軌間可変電車）導入での整備が予定されている。

２．分 布 調 査

調査は，路線計画箇所における試掘調査，範囲確認調査，本調査を必要とするのか判断のため，計画路線の現地分布調査を行った。その結果，大村～諫早の間に22箇所の調査を要する箇所が認められた。

３．平成22年度調査（第１図・表１）

大村・諫早地区の試掘調査，本調査を実施した。

大村地区は，周辺の遺跡所在状況から新大村駅の建設予定箇所について試掘調査を行った。

諫早地区は，諫早市下大渡野町にある尾和谷城跡の試掘調査と本調査を実施した。

⑴　大村地区の調査担当者

長崎県埋蔵文化財センター	文化財保護主事	林　　隆広
	文化財調査員	宮武　直人

⑵　諫早地区の調査担当者

長崎県埋蔵文化財センター	係長	町田　利幸
	文化財調査員	川淵　雅行
	文化財調査員	河合　恭典（現乃村工藝社）

４．平成23年度調査（第１図・表１）

諫早地区は，諫早市下大渡野町にある尾和谷城跡の本調査を実施した。

大村地区は，竹松遺跡及び岸高遺跡の範囲確認調査を行い，本調査を竹松遺跡で実施した。

⑴　諫早地区の調査担当者

長崎県埋蔵文化財センター	係長	町田　利幸
	文化財調査員	川淵　雅行
	文化財調査員	中村雄一郎

⑵　大村地区の調査担当者

長崎県埋蔵文化財センター	文化財保護主事	川畑　敏則
	文化財保護主事	林　　隆広
	文化財調査員	宮武　直人
	文化財調査員	今西　亮太

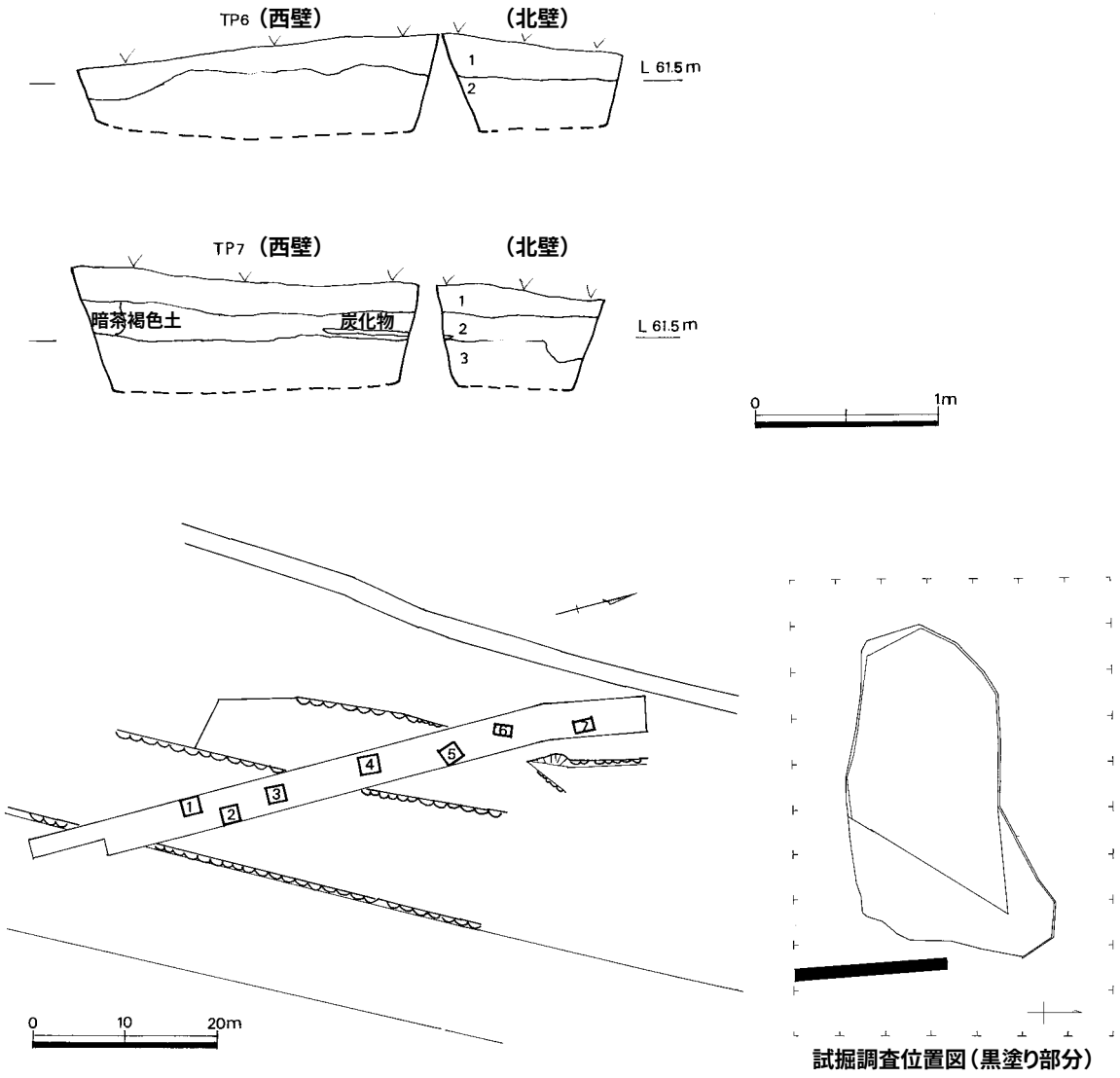
表１　九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）埋蔵文化財発掘調査対象一覧

調査年度	遺跡番号	遺跡名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	調査種別	調査担当者	委託会社
平成22年度	1	尾和谷城跡	諫早市下大渡野町	280㎡	24㎡	H22.10/25～11/３	試掘調査	町田・河合	
平成22年度		尾和谷城跡	諫早市下大渡野町	2,314㎡	720㎡	H23.１/６～３/25	本調査	町田・河合・川淵	㈱島田組
平成23年度		尾和谷城跡	諫早市下大渡野町	2,314㎡	1,594㎡	H23.４/18～６/30	本調査	町田・川淵・中村	㈱イビソク
平成23年度	2	岸高遺跡	大村市中里町221-１	552㎡	12㎡	H23.４/25～４/28	範囲確認	川畑	
平成22年度	3	（植松町）	大村市植松３丁目	840㎡	90㎡	H22.７/20～７/27	試掘調査	林・宮武	
平成23年度	4	竹松遺跡	大村市竹松町1050番地他	75,000㎡	257㎡	H23.７/４～９/８	範囲確認	川畑・宮武・今西	
平成23年度		竹松遺跡	大村市竹松町1050番地他	75,000㎡	1,500㎡	H23.11/７～H24.3/２	本調査	川畑・林・宮武・今西	(JV)埋蔵文化財サポートシステム・扇精光

第１図　発掘調査対象遺跡位置（1/50,000）

５．尾和谷城跡の試掘調査概要（第２図）

調査を実施した地点は，新幹線トンネル工事に先立ち工事用の仮設道路を設置するための箇所で遺跡に隣接する部分である。調査のための試掘坑配置は２×２ｍの試掘坑５箇所，１×２ｍの試掘坑２箇所を南東側から北西側へ設定した。７箇所の調査区からは，表土から近世陶磁器の出土が認められたが，尾和谷城に関連付けられるような遺構・遺物の検出，出土が見られなかった。したがって，工事用仮設道路の建設は支障ないと判断された。



第２図　試掘調査

【参考文献】

１：長崎新幹線着工特集〔1〕／九州新幹線長崎ルート問題：佐賀新聞の情報コミュニティサイトひびのニュース　htt://www.saga-s.co.jp/news/sinkansen.0.886076.article.html

Ⅱ　地理的歴史的環境

１．地質概要（第３図）

尾和谷城跡のある多良火山の表層地質[註1]は，本明川に深く開析され急な崖を形成している。

多良火山活動の後期に噴出した岩石は，主として普通輝石安山岩の溶岩流で，これに凝灰角礫岩が挟まれる。大部分の安山岩質岩石は，集塊岩ないし火山砕屑の上に乗っているが，多良岳東麓では，玄武岩類の上に直接乗っている箇所もある。多良火山活動の最終期のものは，溶岩円頂丘を構成している普通輝石紫蘇輝石・角閃石安山岩である。新第三紀の安山岩質岩石は，暗黒灰色で斜長石の小斑晶の目立つ安山岩で，森山安山岩と称されている。

第３図　諫早表層地質（黒丸が本遺跡）

２．土壌概要（第４図）

土壌[註2]は，玄武岩の風化物を母材とする赤色味の強い土壌で，カルシウム，マグネシウムの飽和度がやや高い。玄武岩の風化物を母材としており赤味がやや強く，土色は2.5YR～7.5YRの間にある。下層は，植質で腐植の下層への滲透は著しく悪く褐色森林土壌の発達は不良である。植生は，アカマツ，ヒノキ林がある。生長は悪く中～下程度と判断される。平坦地は林地として利用するより畑地，カンキツ園として利用されている。

第４図　諫早土壌（黒丸が本遺跡）

３．遺跡周辺の歴史概要（第６図）

遺跡の所在する長崎県諫早市[註3]は，県中央部に位置し，鉄道・高速道路・一般国道等が集中する交通の要衝の地となる場所である。市は，2005年３月１日に多良見町，飯盛町，小長井町，高来町，森山町の５町と合併し県内第３位の人口14万人になっている。

尾和谷城跡周辺の遺跡については，旧石器時代の遺跡として柿崎遺跡[註4]や雀の倉遺跡[註5]から小型のナイフ形石器をはじめとして各種の石器が出土している。縄文時代では，前期の曽畑式土器を主体とする浜田遺跡[註6]や晩期の土器と共に支石墓102基を確認した風観岳支石墓群[註7]がある。また弥生時代の遺跡では甕棺墓が出土した林ノ辻遺跡[註8]がある。山城に関しては，平松城跡，宮園城跡がある。また，尾和谷城跡の北側の大村市には，国道34号線に沿って伊勢山城跡，岸高城跡，平ノ前城跡が所在する。こ

のような中で，尾和谷城跡から直視できる場所に宮園城跡がある。報告書[註9]によると宮園城跡は空堀と帯郭，主郭，二の郭を備えており前面の鈴田川と本明川が自然の堀として備わった山城である。この宮園城は，平松城と交戦した伝承があることから大村側に属する山城と考えられ，尾和谷城跡を押さえるための戦略上の山城として機能していたとも考えられる。

４．尾和谷城[註10]の概要（第５図）

尾和谷城は，西郷石見守尚善が家臣に命じて「開」の丘陵に築城させた西郷氏[註11]の支城である。

「開」は大村との境にあり戦略上重要な位置となる場所である。しかし，当時は丘陵部では水が出ないため本明川の水源を利用して水路を設けている。これによって，城の領域での軍事的な行動ができ，常時大村側の動きを監視できる利点と耕地の開作を可能にしている。尾和谷の名称が記載されるのは，大村郷村記に有馬氏と大村氏の文明６年（1474）の中岳合戦において西郷尚善が先鋒として尾和谷を経由して大村入りをした時の記載である。さらに西郷氏と後藤氏，松浦氏の連合軍が大村純忠の居城である三城城を攻撃する所謂「三城七騎籠」の際に連合軍の侍大将として尾和谷軍兵衛が出陣し，諫早大渡野から大村萱瀬村境を回り大村に攻め込み，乾馬場郷（経塚）に陣を張っている。兵員は，後藤氏300余騎，松浦氏500余騎，西郷氏300余騎で三城城を取り囲むと記している。これに対し，大村純忠の兵は６騎と45人での戦闘と思われていたが，尾和谷軍兵衛が計略によって討ち死したことで西郷氏らの連合軍は退却している。その後，西郷氏は尾和谷軍兵衛の子（尾和谷弥三郎）を先鋒に再度大村へ攻め込むが萱瀬村山城での戦闘に敗れて，敗走途中で討たれている。これを最後に尾和谷に関する記載がなくなる。

尾和谷城跡の縄張り配置は，現在 JR 本野踏み切り上の丘陵先端部で一の郭を配し，二の郭を調査区外の西側にある馬蹄形を呈した部分に配置していたと考えられる。また，館は，「開」地区頂上の平坦部に構え，開地区から北へ約1.2㎞行った上大渡野の丘陵尾根が狭くなるノギントの字名がある地区に空堀となる部分があり，山城の領域としては，約420,000㎡が想定される。

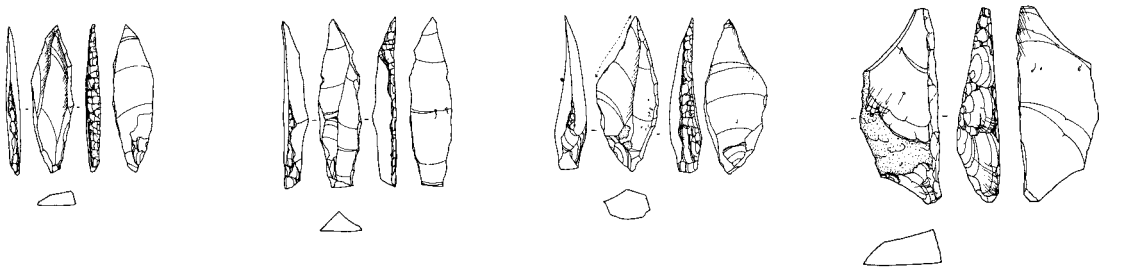
第５図　尾和谷城跡周辺の山城（1/80,000）

【註文献】

註１『諫早』「土地分類基本調査地形・表層地質・土じょう」編集発行経済企画庁総合開発局国土調査課　1971. 3

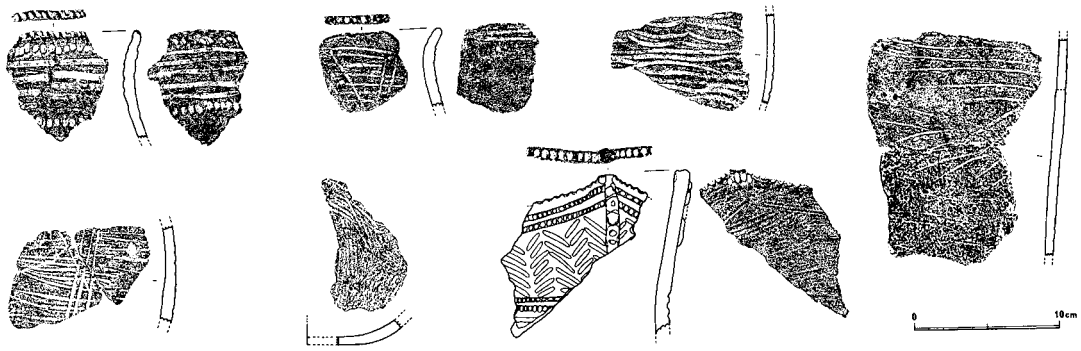
註２『諫早』「土地分類基本調査地形・表層地質・土じょう」編集発行経済企画庁総合開発局国土調査課　1971. 3

註３『諫早市ホームページ』「諫早市の

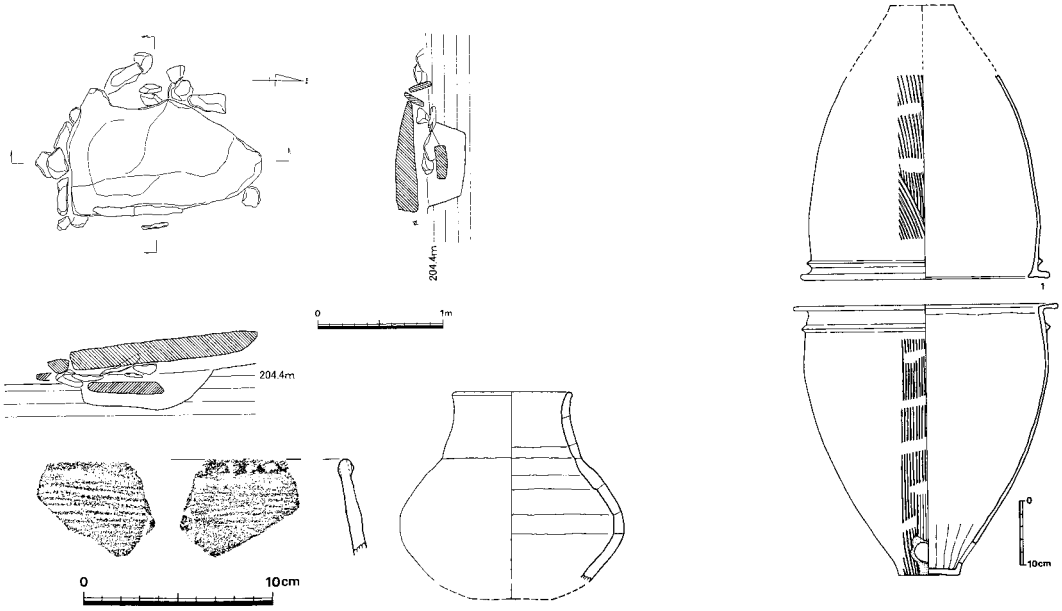


柿崎遺跡出土

雀の倉遺跡出土



浜田遺跡出土



風観岳支石墓と出土遺物　　林ノ辻遺跡出土

第６図　遺跡周辺の出土遺物

紹介」

註４『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書 第54集「柿崎遺跡」長崎県教育委員会　編集　平野，横山，福田　1981．3

註５『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書 第54集「雀の倉遺跡」長崎県教育委員会　編集　平野，福田　1981．3

註６『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書 第54集「浜田遺跡」長崎県教育委員会　編集　平野，福田　1981．3

註７『風観岳支石墓群』諫早市文化財調査報告書 第19集　諫早市教育委員会　編集　秀島　2006．3

註８『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書 第４集　諫早市教育委員会　編集　秀島　1983．3

註９『宮園城跡遺跡』諫早市埋蔵文化財調査概要報告書　諫早市教育委員会　編集　秀島　2010．3

註10『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅰ』「地名表・分布調査」長崎県教育委員会　長崎県文化財調査報告書 第206集　寺田・川淵　2010

註11『諫早市史第一巻』諫早市役所　編集　諫早市史編纂室　1955

本明川から遺跡を望む

TP６西壁

調査風景

TP７西壁

調査風景

自然石板碑

試掘調査

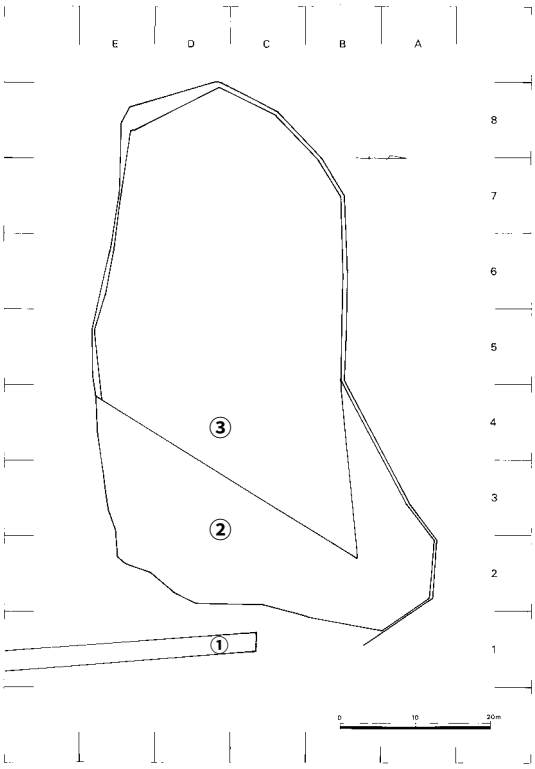
Ⅲ　調　　査

第１部　平成22年度調査（一次調査）

１．調査の概要（第７図）

遺跡は大村市と北部で接する諫早市大渡野町に所在し，標高約55m～130mに位置する。調査は，国土座標を基準に南北軸を10mごとで区切り，記号をＡ～Ｅとし，東西軸も同じく10mごとに区切り１～４と番号を付し，１Ａ～４Ｅのグリッド名称を付した。

調査工程として，調査区を設定した範囲の葉や枝類が散乱していたため葉及び枝類の収集から実施した後，航空写真の撮影を行った。次に約15㎝程度の腐葉土（１層）の掘削から精査を開始した。腐葉土の直下からは，近世陶磁器，瓦等の出土があった。２層からは，近世陶磁器，青磁，土師器，瓦質土器，黒曜石剥片等が出土している。３層は，地山の明赤褐色粘質土で安山岩の風化礫が混ざり遺物の出土がなかった。遺構は，建物基礎の礎石，炭化物を含む土坑等を９箇所で検出している。この内，中世の時代に所属する遺構として３号土坑・８号焼土坑が年代測定を行った結果いずれも，15世紀～17世紀にかけての年代であった。この年代を裏付けるように周囲から青磁碗片，石鍋片が出土している。近世の遺構として４号建物礎石がある。遺物は張り床面から釘，近世陶磁器が出土している。このほかに石組遺構を検出しているが，出土遺物が見られず時期については，判然としていない。



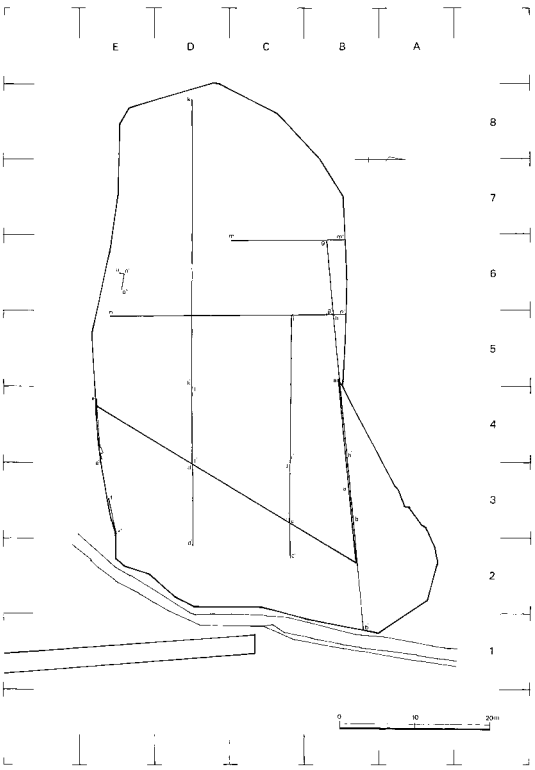
第７図　年度別調査（①平成22年度試掘調査②平成22年度本調査・③平成23年度本調査）

２．土　　層（第８図～第９図）

調査対象範囲は，標高62m～75mの急傾斜地にあたる。土層は地点によって多少異なるが，基本的に３層に大別できる。

１層　腐葉土である。腐葉土直下からは近世陶磁器，瓦などの出土が見られる。

２層　色調により４層に分層した。縄文時代，中世陶磁器，近世陶磁器の遺物を含む。



第８図　土層実測位置

２……褐色砂泥土（7.5YR4/4）ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。

２ａ…褐色砂泥土（7.5YR4/6）やや粘土質である。５㎜以下の安山岩風化礫粒を含む。

２ｂ…褐色砂泥土（7.5YR4/3）５㎝～拳大の安山岩風化礫を含む。

２ｃ…褐色砂泥土（7.5YR4/6）やや粘質である。炭化物が混じる。

３層　色調により２層に分層した。無遺物層で地山である。

３……明赤褐色粘質土（5YR5/6）安山岩風化礫を含む。

３ａ…明褐色粘質土（7.5YR5/8）安山岩風化礫を多量に含む。

３．遺　　構（第10図～第19図）

・１号集石（２Ａ区）

東西3.95m×南北3.35mを測り，礫の積み上げは，高さ最大50㎝程の堆積が認められた。礫以下は，小円礫と瓦片，陶磁器，ガラス片等の混入が見られた。掘り方の状況は，東西3.6m×南北2.1mで，土坑の立ち上がりについては，北側が急な立ち上がりをし，南側は緩やかな傾斜の立ち上がりとなっている。

・２号石組（３Ａ区）

東西1.2m×南北1.25mを測る。構造は，石棺の配置と類似しており，東側に50㎝と40㎝の石を繋ぎ，西側も同様に石を繋ぎ，南側と北側はそれぞれ30㎝大の石で小口を形成した状況を呈していた。この上に蓋石として60㎝大の礫を乗せて，棺身を覆う状況と考えられた。

下部構造は，南北1.9m×東西1.2mの楕円形を呈したプランをなしていた。上部から下部までの掘り込みは0.15m程で，石材を固定するための掘削は行っていなかった。

堆積土層は，１層に鈍い黄褐色砂質土（木の根を多く含む）で２層は，黄褐色粘質土（木の根及び風化礫を含む）であった。

上記の調査から，下部構造の掘り方は石材を組むための掘り方ではなく楕円形に浅く掘り下げを行った周りに丸味のある礫を並べただけの状態で，遺物の出土も無く，石材も丸味を持ち，土坑に石材を填め込むための掘削も行っていないことが確認できた。

このため石棺墓以外で遺構を検討した場合，石組みの西側に，長さ1.30m，幅0.45m，厚さ最大0.34mを測る石材があり，遺構に関連する石柱物と見られ，地元からの聞き取りを行うと，倒れている石柱物は以前は立っていて，てぼ神様（弘法大師様）として昔からまつりごとをしていたとのことであった。このことから，石組みの時期については判然としないが，石組みを利用した祠的な扱いをしていたことが推測された。

・３号土坑（３Ｄ区）

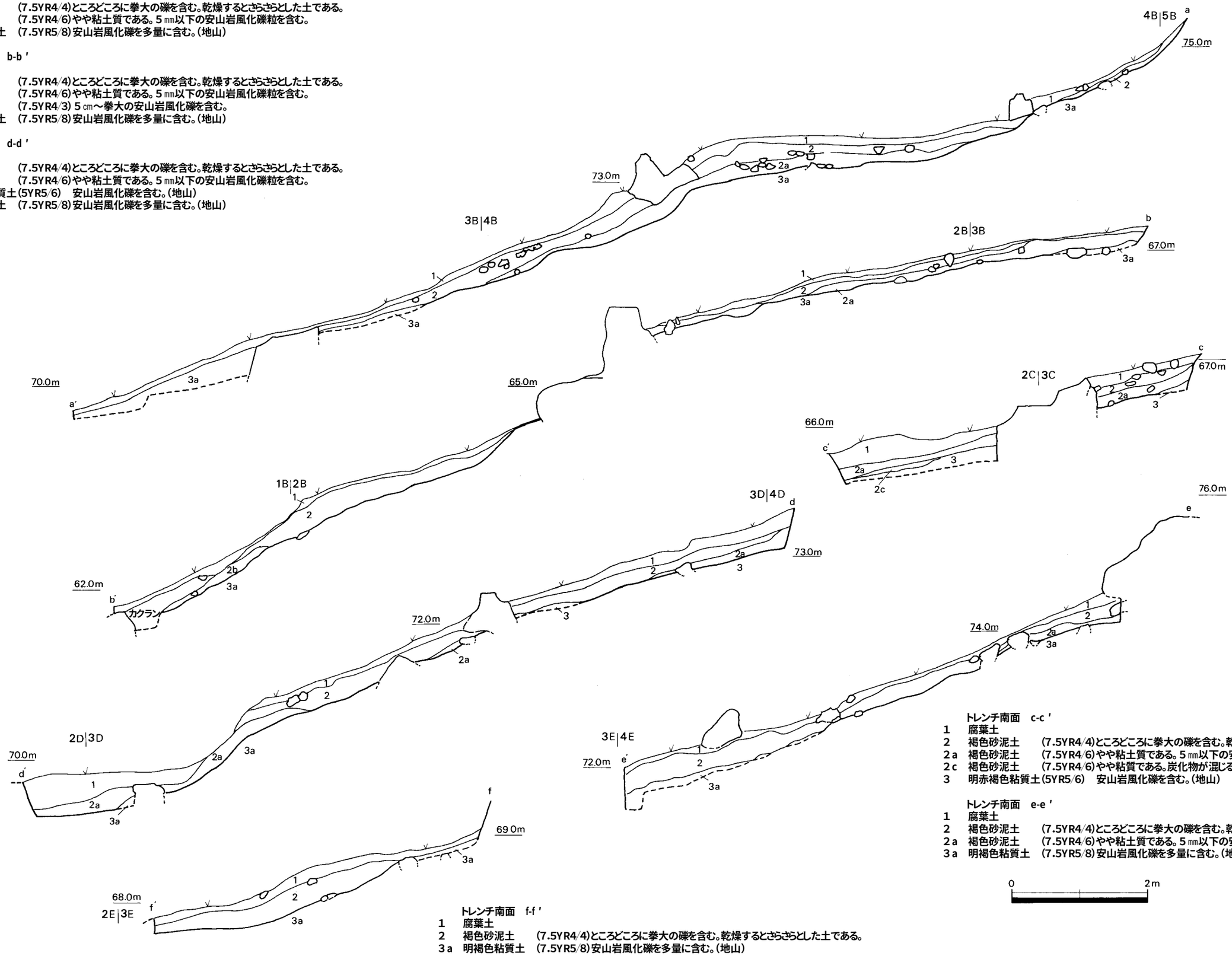
東西1.45m×南北1.45mを測る。ほぼ円形に近い形状で東側を一部切られている。炭化物が１層～２層に集中して見られる。土層の厚さは15㎝程の堆積が残存していた。

層序は１層に明褐色粘質土（炭化物を多量に含む）２層は炭化物の層。３層は，褐色粘質土（炭化物混じり）４層は鈍い褐色粘質土（炭化物少量）。年代測定の結果15世紀末～17世紀中頃の年代が得られている。

トレンチ南面　a-a ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
2a　褐色砂泥土　(7.5YR4/6)やや粘土質である。5㎜以下の安山岩風化礫粒を含む。
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

トレンチ南面　b-b ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
2a　褐色砂泥土　(7.5YR4/6)やや粘土質である。5㎜以下の安山岩風化礫粒を含む。
2b　褐色砂泥土　(7.5YR4/3) 5㎝～拳大の安山岩風化礫を含む。
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

トレンチ南面　d-d ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
2a　褐色砂泥土　(7.5YR4/6)やや粘土質である。5㎜以下の安山岩風化礫粒を含む。
3　明赤褐色粘質土(5YR5/6)　安山岩風化礫を含む。(地山)
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)



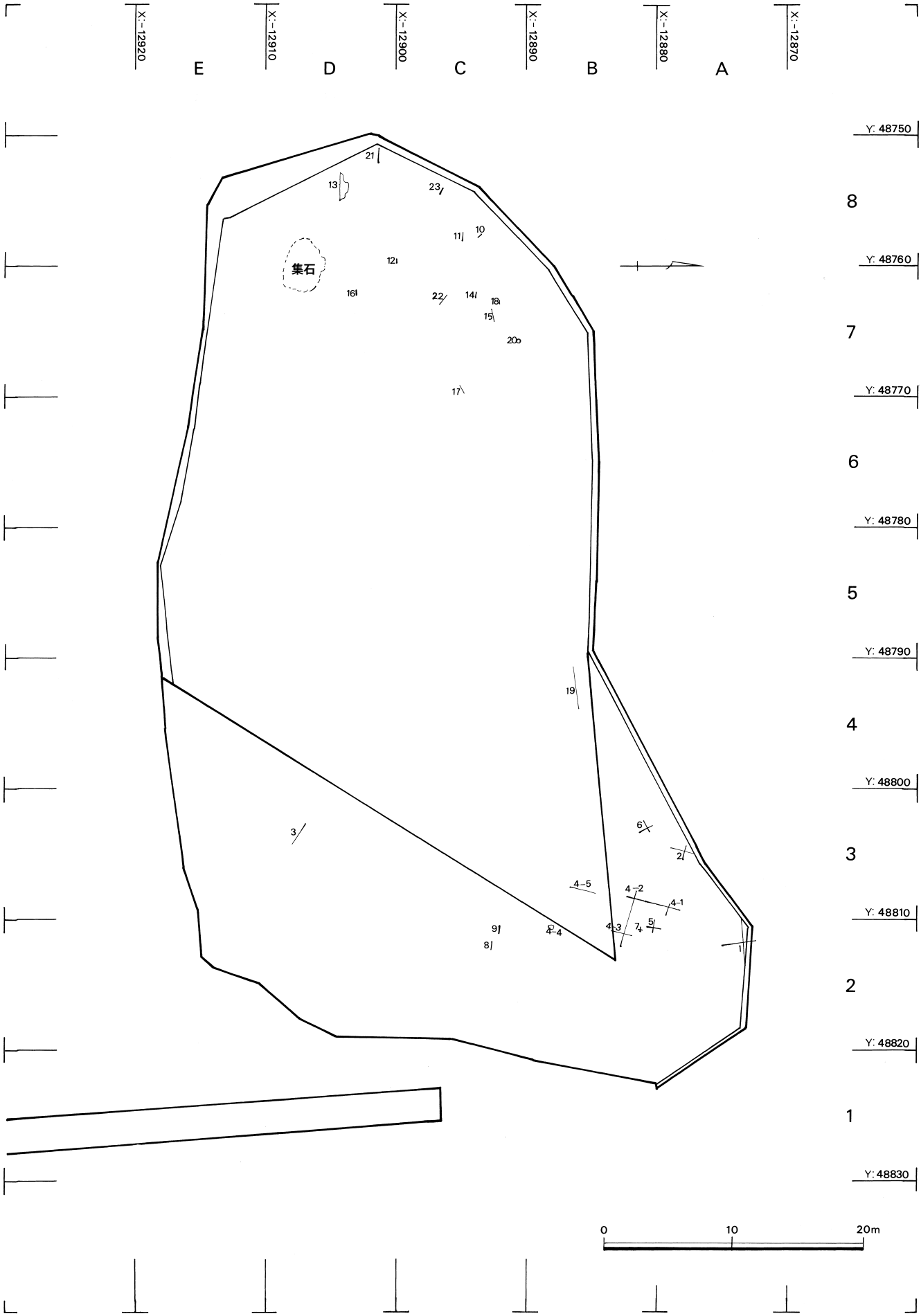
トレンチ南面　c-c ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
2a　褐色砂泥土　(7.5YR4/6)やや粘土質である。5㎜以下の安山岩風化礫粒を含む。
2c　褐色砂泥土　(7.5YR4/6)やや粘質である。炭化物が混じる。
3　明赤褐色粘質土(5YR5/6)　安山岩風化礫を含む。(地山)

トレンチ南面　e-e ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
2a　褐色砂泥土　(7.5YR4/6)やや粘土質である。5㎜以下の安山岩風化礫粒を含む。
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

0　2m

トレンチ南面　f-f ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

第9図　土層



第10図　全地区の遺構配置

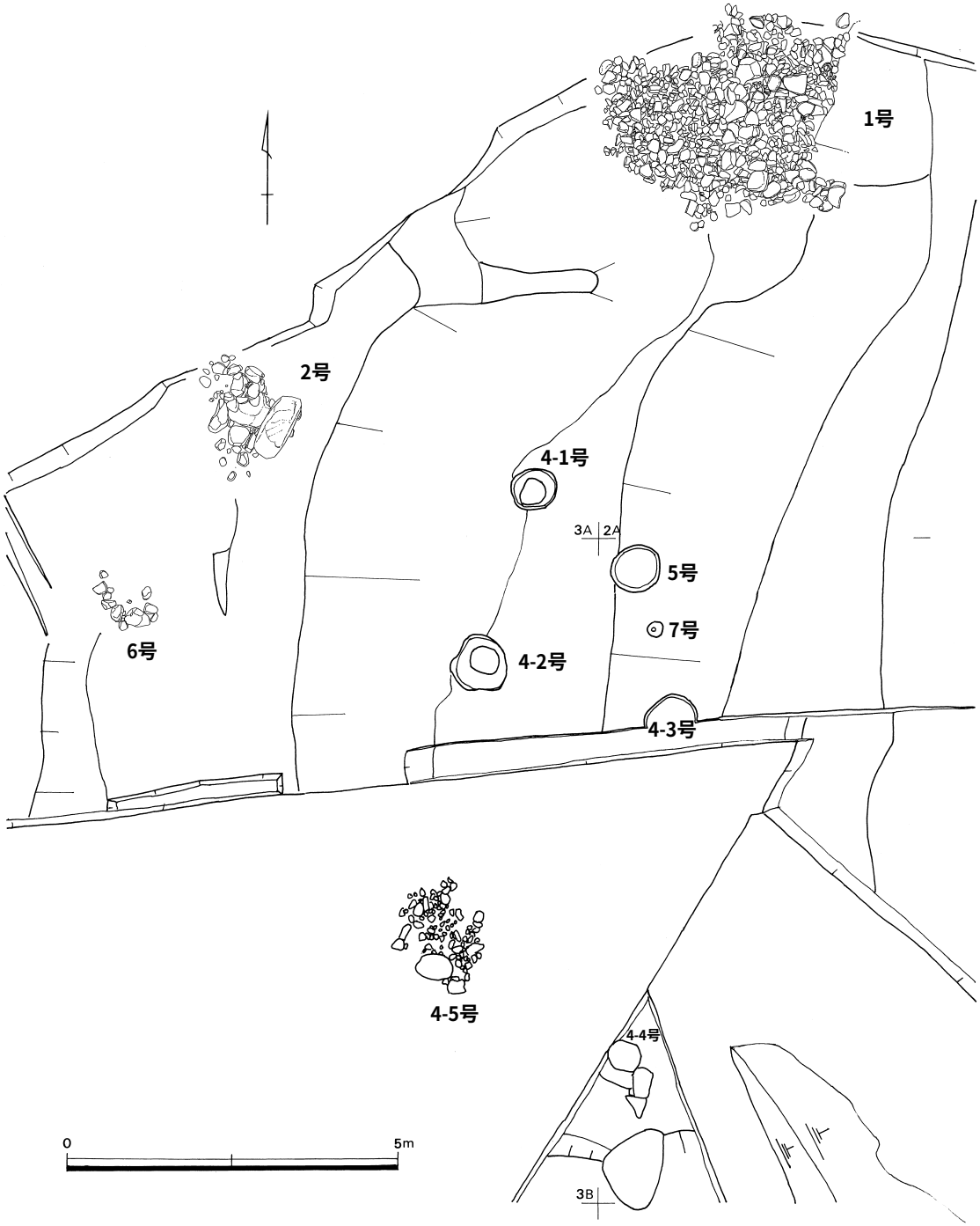
・４号礎石

礎石４基を調査で確認し，内１基は平成23年度の２次調査（４‐５）で検出したものである。

４‐１（３Ａ区）の礎石は，45㎝×35㎝×17㎝で，楕円形を呈する。４‐２（３Ｂ区）の礎石は，45㎝

礎石４基を調査で確認し，内１基は平成23年度の２次調査（４‐５）で検出したものである。

４‐１（３Ａ区）の礎石は，45㎝×35㎝×17㎝で，楕円形を呈する。４‐２（３Ｂ区）の礎石は，45㎝×40㎝×20㎝の円形。４‐４（２Ｂ区）の礎石は，50㎝×43㎝×22㎝の円形。４‐５（３Ｂ区）の礎

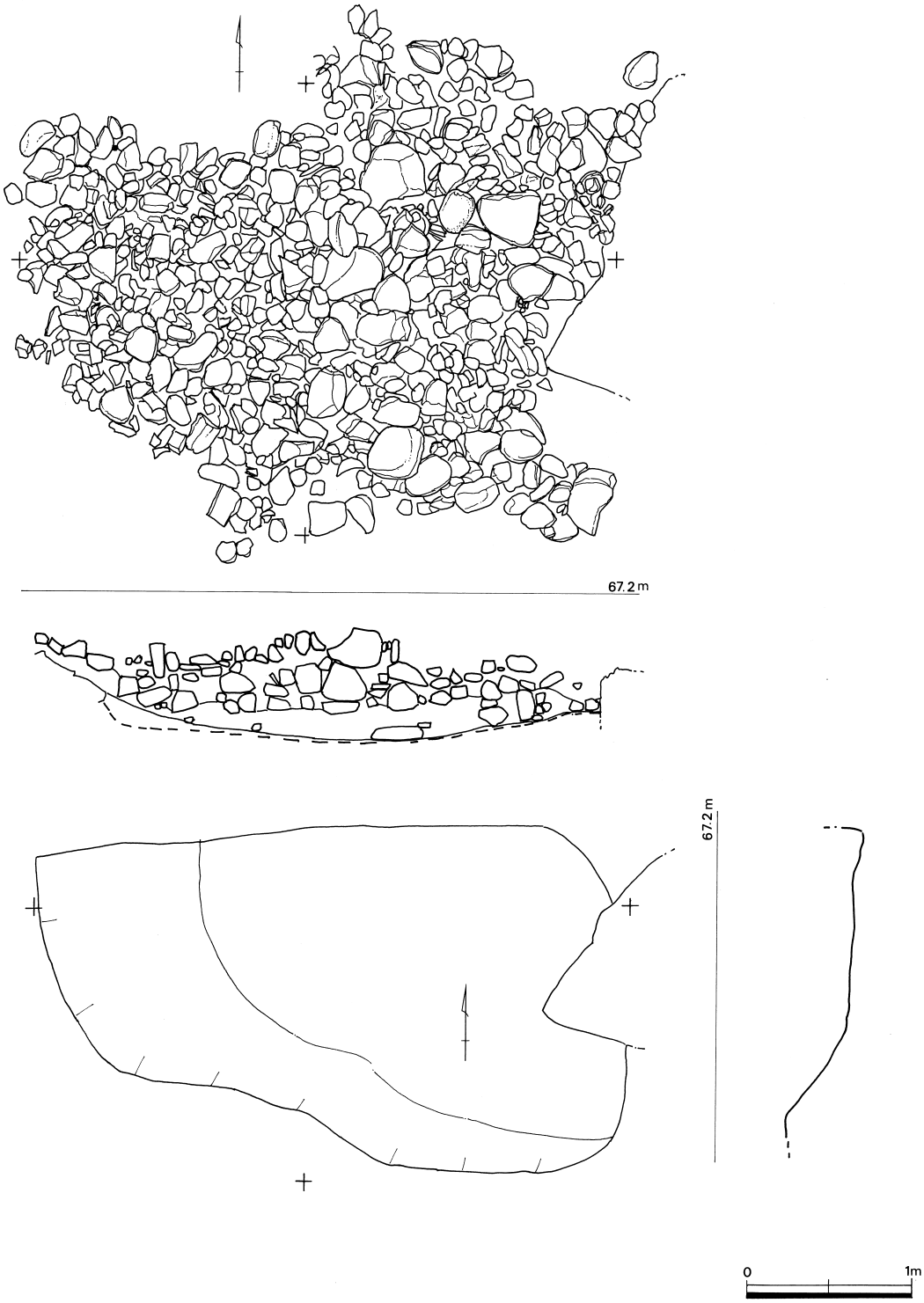


第11図　遺構配置その１（２Ａ・２Ｂ・３Ａ・３Ｂ区）

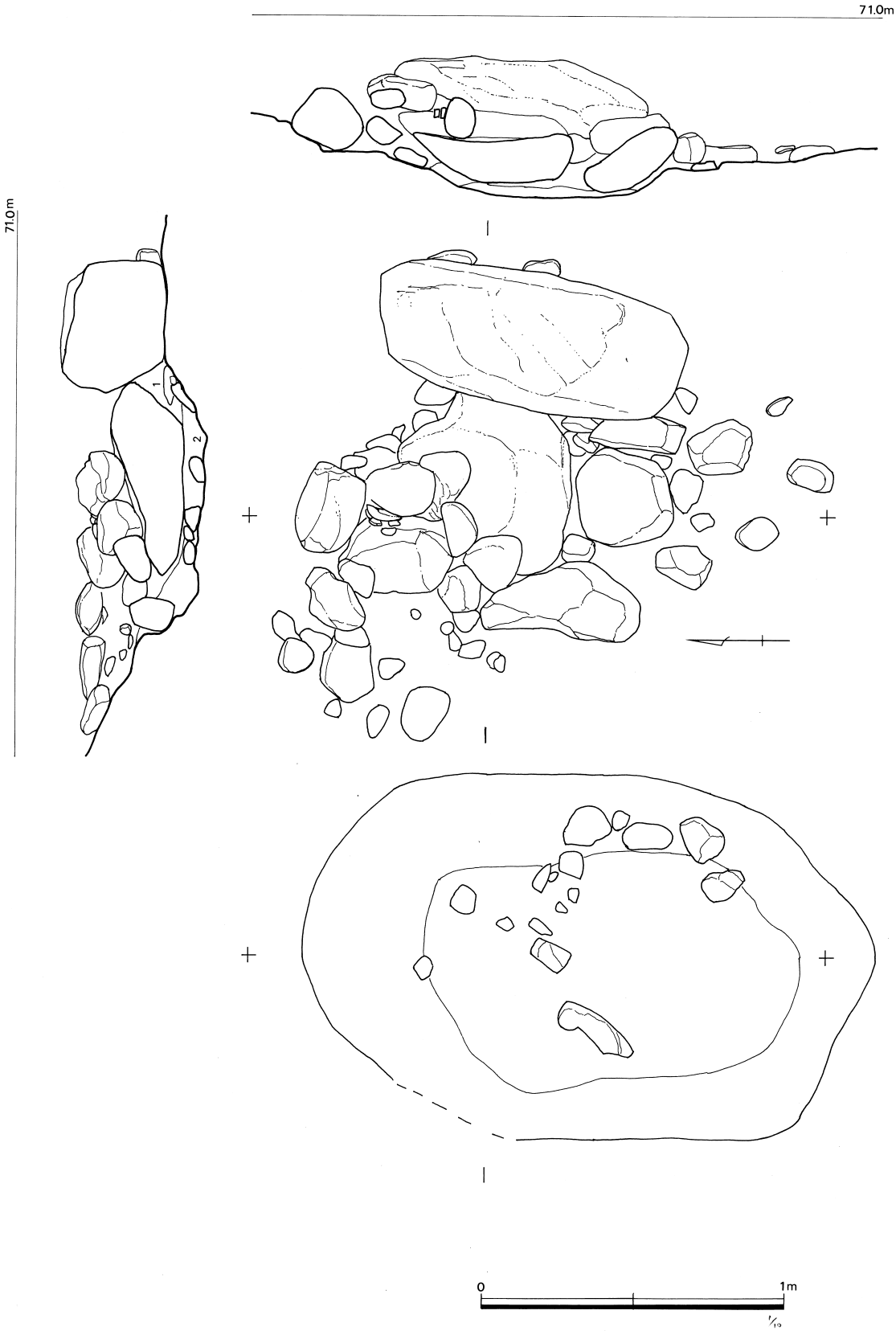
石は58㎝×35㎝×27㎝の楕円形を呈する。４-４と４-５の礎石については，現位置をから移動していると思われ，礎石整地面が確認できなかった。

土層は，４-１が１層に褐色粘質土（炭及び風化礫を含む），４-２は，１層に褐色粘質土（炭，風化礫含む）４-３は，褐色粘質土（炭，風化礫含む）

礎石４-１と礎石４-２の間の長さが2.7mを測る。さらに23年度に検出した礎石４-５から礎石４-



第12図　１号集石（２Ａ区）



第13図　2号石組（3A区）

２の間も移動していることを考慮しても約2.7m前後で，併せて5.4mの柱間となり南北３間，東西1.5間の建物規模が想定される。この礎石については，調査区外の北側に幕末から明治にかけて寺子屋があったとの聞き取りから，この寺子屋に関連する建物基礎とも考えられる。

・５号ピット（２Ｂ区）

径が最大75㎝で深さ17㎝を測る。このピットは礎石４-１・４-２の中間から西へ２m移動した箇所で検出している。充填土に褐色粘質土が堆積している（炭，風化礫を含む）。

・６号集石（３Ｂ区）

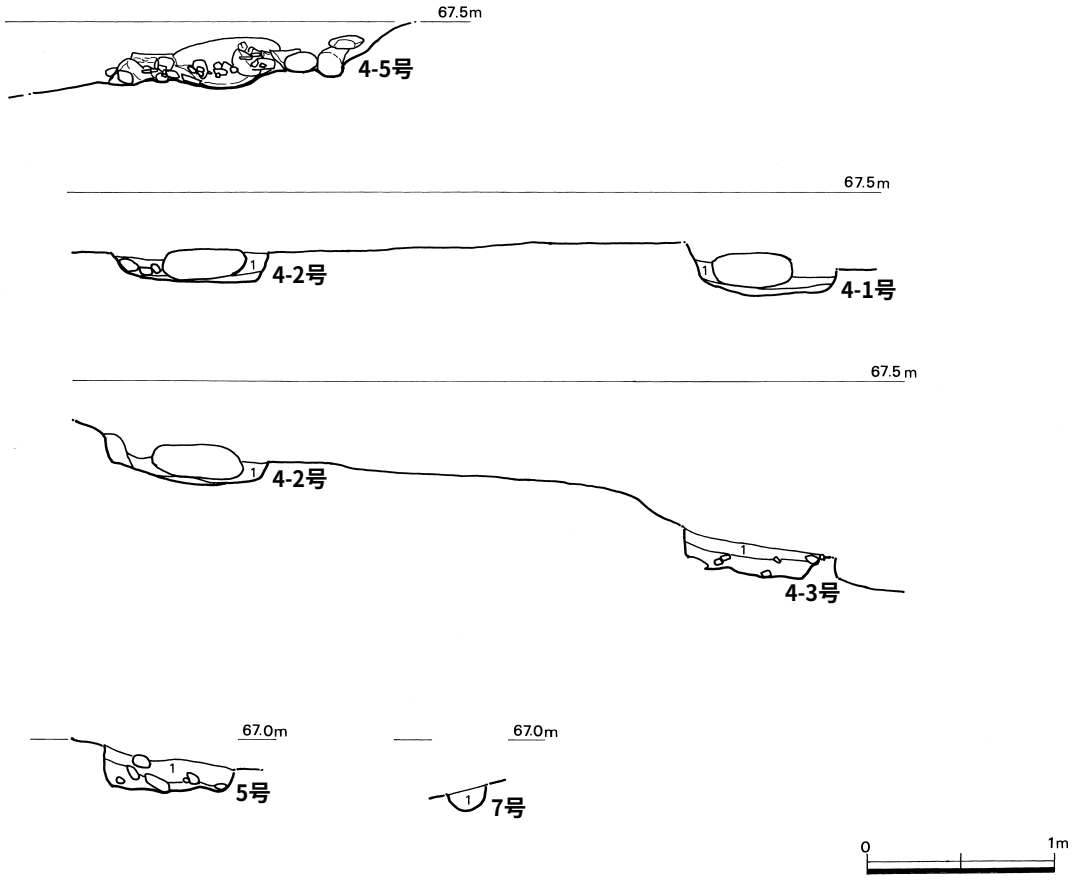
南北約１m×東西0.75㎝を測る。検出当初は，集石としての配石と思われたが，東西にある石材が，地山に食い込む状況で確認したため，この石が支えになって上から流れ込んだ石を塞き止めて出来た自然集石と判断された。

・７号ピット（２Ｂ区）

径が最大25㎝で深さ12㎝を測る。ピット内の覆土は，褐色粘質土（炭，風化礫を含む）が堆積している。

・８号焼土坑（２Ｃ区）

径最大50㎝で深さ８㎝を測る。充填土は，暗黄褐の焼土混じりの土で，炭化物が多量に混じる。年代測定では，15世紀後半～17世紀前半の年代結果が得られている。

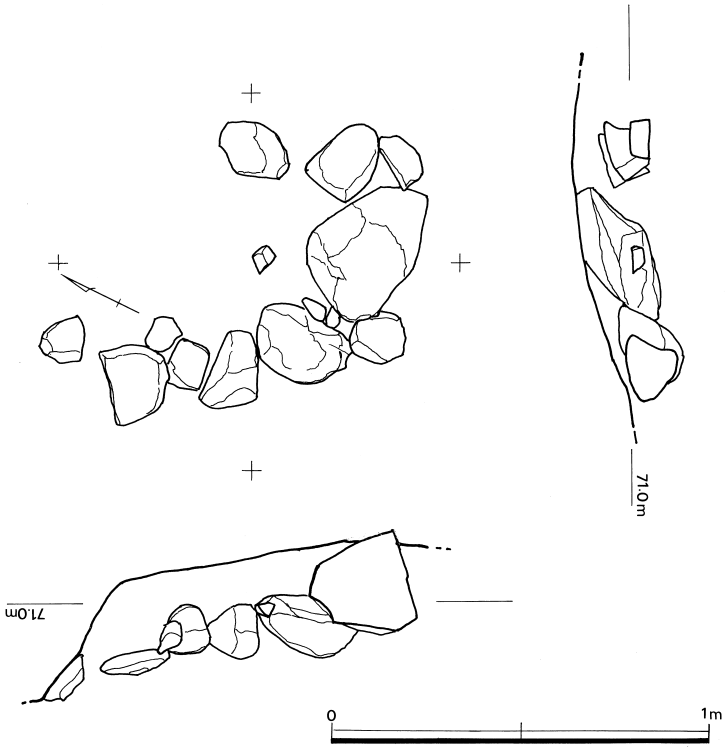


第14図　４号礎石及びピット検出断面

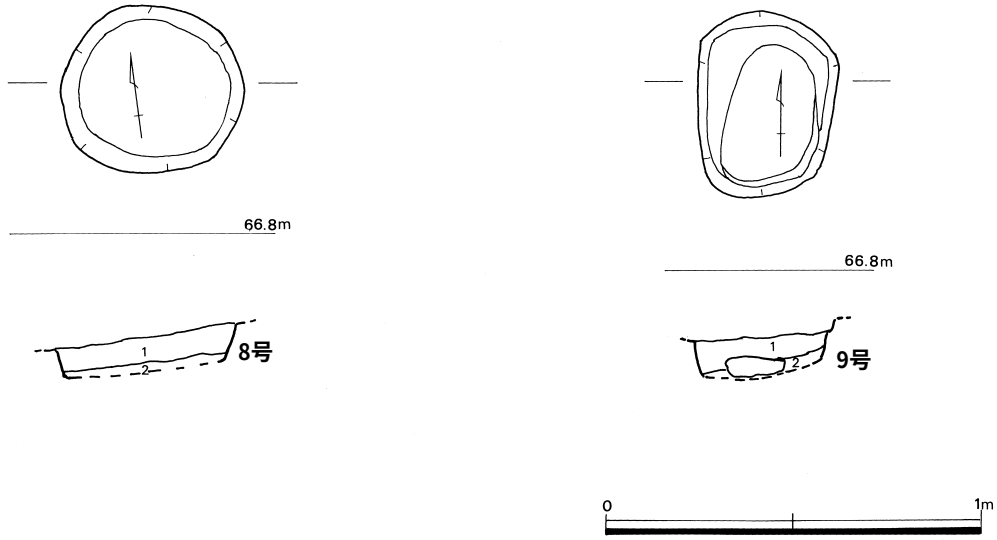
・９号ピット（２Ｃ区）

径最大50㎝で深さ７㎝を測る。８号焼土坑から１ｍ程東へ離れた箇所に浅いピットを検出し，覆土に暗黄褐色土が充填していた。炭化物の出土は見られなかった。

層序は，１層に暗黄褐色土（炭化物無し），２層に明黄褐色土(地山)となっている。



第15図　６号集石（３Ｂ区）

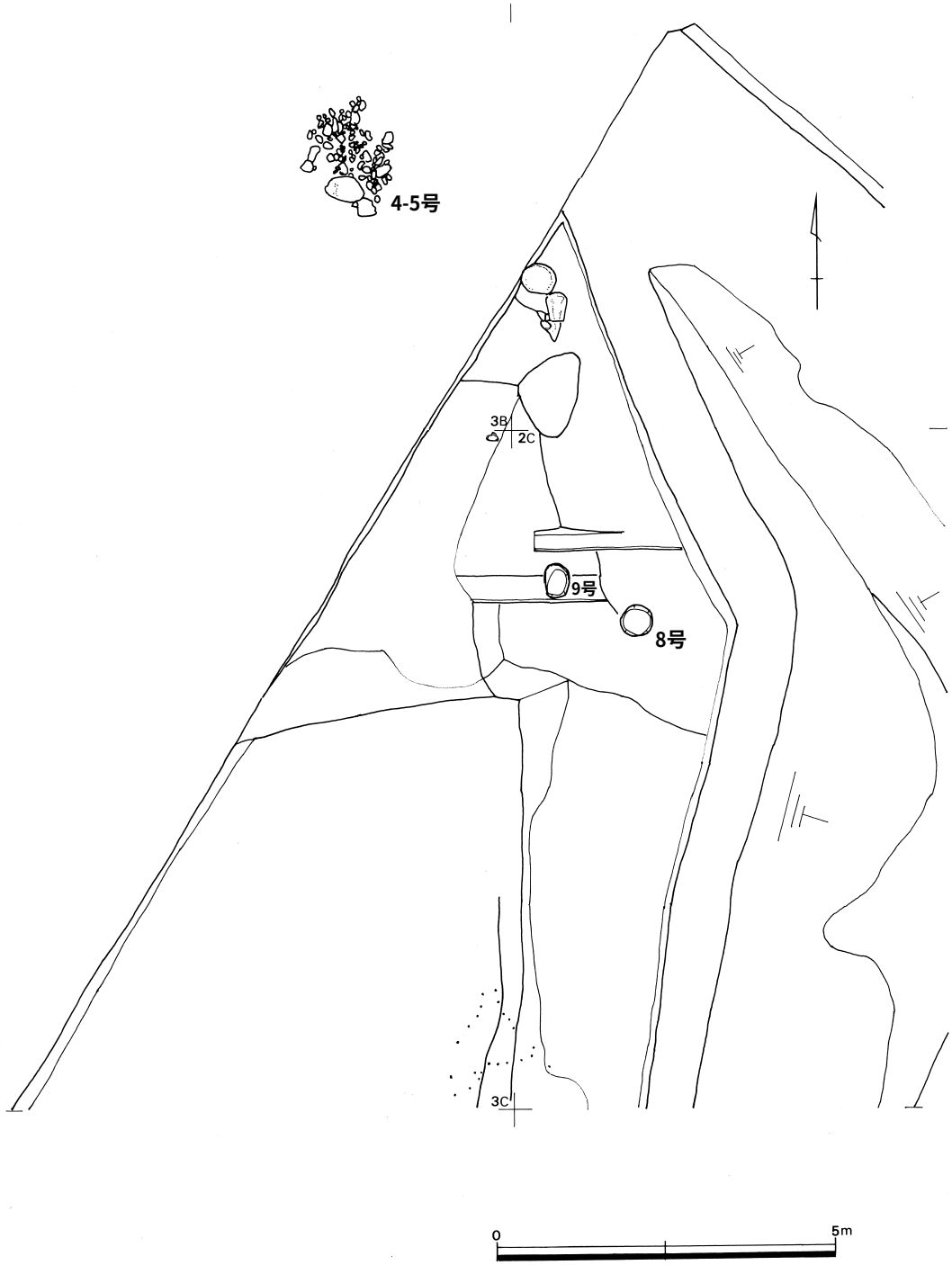


第16図　８号焼土坑・９号ピット

４．遺　　物（第20図～第30図）

土師器

1は甕形の土器片で，外面が赤褐色，内面は暗黄褐色を呈する。胎土に２㎜～４㎜の安山岩粒を多く含む。**2**は４世紀代の甕形土器片で，内湾気味の口縁端部をやや凹ませる。色調は，内外面共に暗黄褐色を呈する。**3**は内面に刷毛目調整が残る甕形土器片。胎土は赤味を帯びるが内外面は，暗黄褐色を呈する。**4**は轆轤整形による浅い凹線が体部に残る甕形土器片。色調は，内面がやや赤味を帯びた暗黄褐色，外面は黄色味が強い暗黄褐色を呈する。**5**は粘土帯を摘み出し，この部分に浅い菱形の

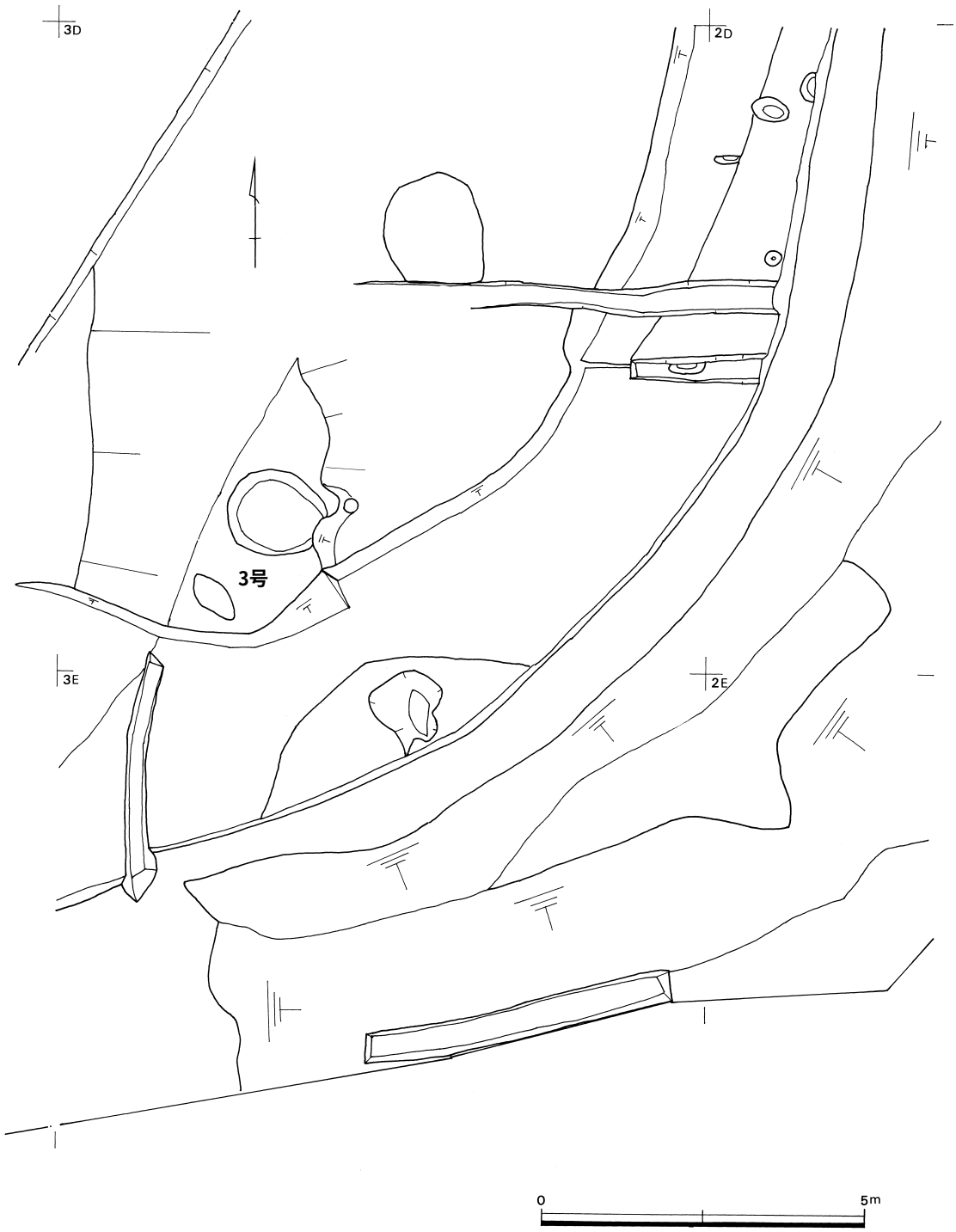


第17図　遺構配置その２（２Ｂ・２Ｃ・３Ｂ・３Ｃ区）

刻みを付けた甕形土器片。外面に細線を描いた沈線と刷毛目のナデ消し痕が残る。胎土の色調は，内面が暗黄褐色，外面は暗赤茶色を呈する。**6**は幅４㎜程の帯状となる粘土紐を貼り付けた甕形土器片。胎土の色調は，内面赤褐色，外面暗黄茶色を呈する。

土師質土器

この資料は３Ｃ区に集中して出土した遺物である。煤の付着があることから煮炊きに用いられていた土器であろう。所属時期については，付近から14世紀後半～15世紀にかけての青磁碗が出土してい



第18図　遺構配置その３（２Ｄ・２Ｅ・３Ｄ・３Ｅ区）

ることから同様の時期が考えられる。

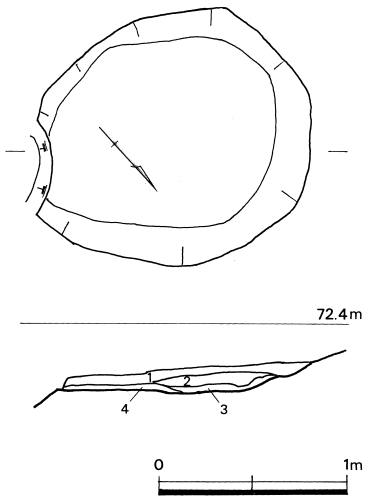
7は器の外面に煤の付着が見られる。厚さ４㎜の断面で直線的に外方へ延びる。胎土に結晶片岩の銀色をした粒子が混じる煮炊き用の鉢。**8**は７と同一個体と思われる。器面の整形が粗く，凹凸があり刷毛による調整を行っている。色調は外面の一部に煤が付着し，暗黄褐色を呈する。内面の上位に浅い沈線が４本引かれている。**9**も７・８と同一個体である。内面の屈曲部に浅い沈線を引く。外面に煤の付着がある。

瓦質土器

10は瓦質の火入れ具で胴部片。色調は，灰黄色で内面は暗黄褐色を呈する。**11**は瓦質の火入れ具で内面を指による押さえで整形した痕が残る。口縁端部は，丸味を持たせて納めている。器面に煤の付着がある。

東播系土器

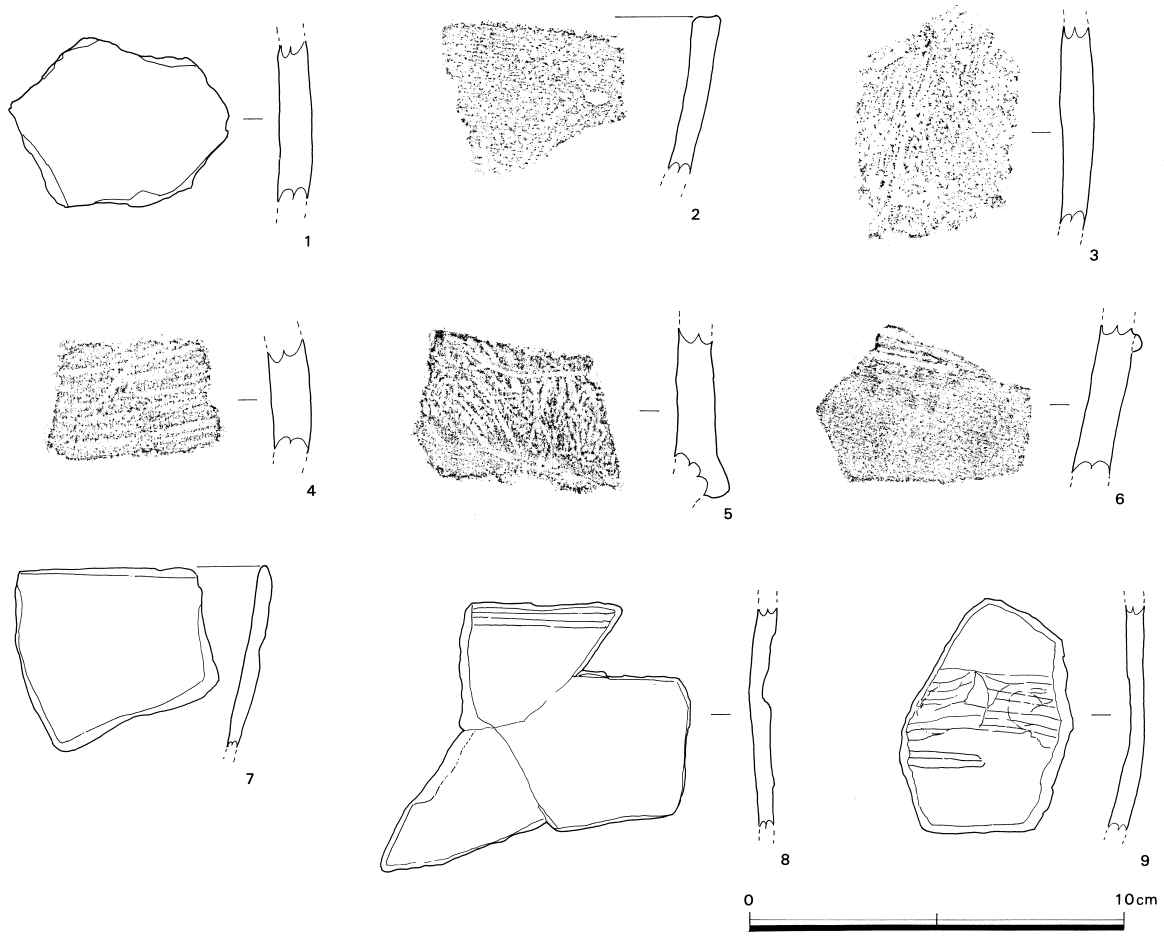
12は灰色を呈した東播系須恵器鉢。外面は水挽きの整形痕を残し，内面は指押さえの後を櫛状工具による整形を施している。



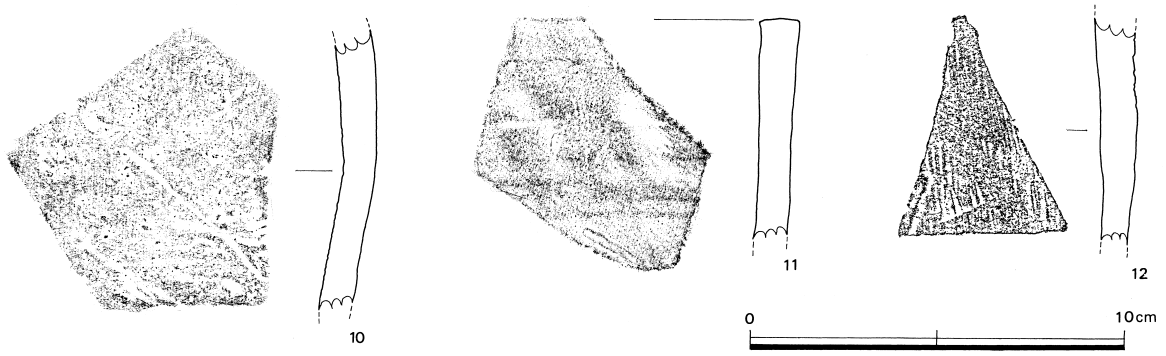
第19図　３号土坑（３Ｄ区）

土師質皿

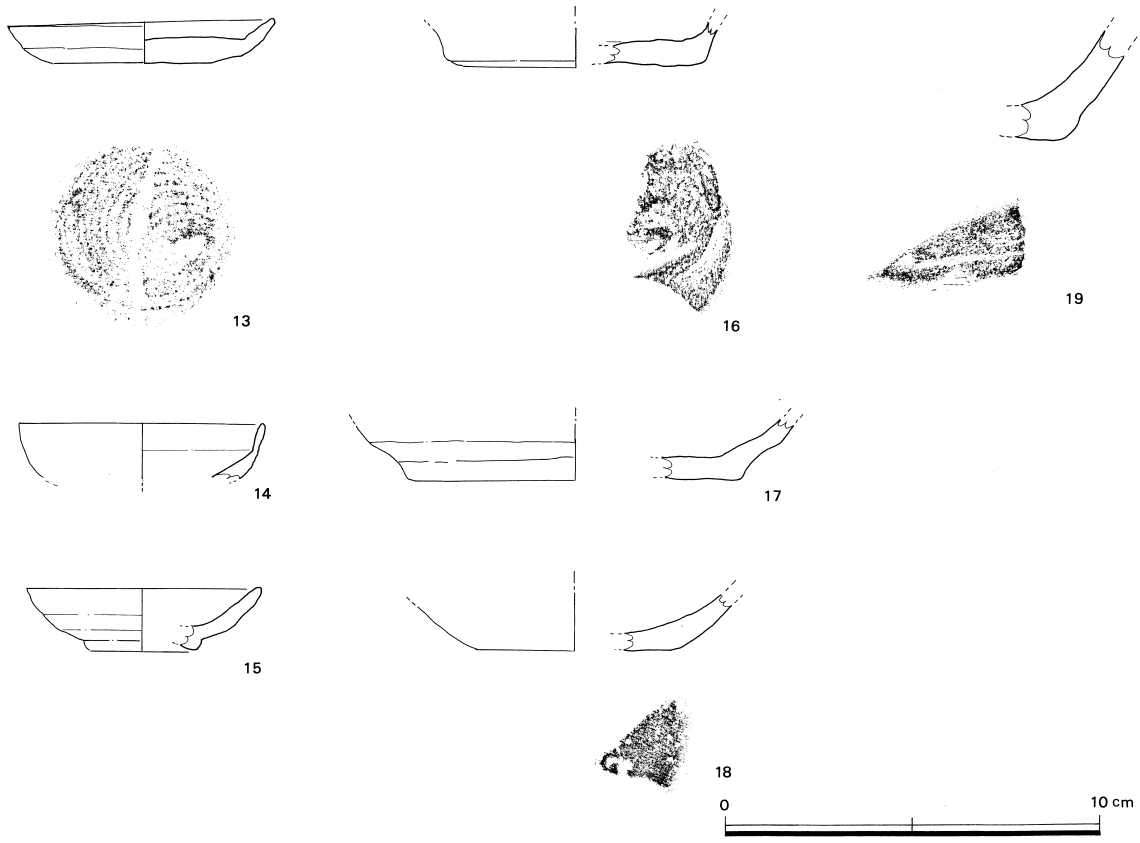
13は糸切底の皿。内底から屈曲させて口縁部へ移行し，口縁端部は丸く納める。**14**は胴部中位で屈曲して口縁部へ移行する。口縁端部は丸く納める。**15**は底部を高台状に一段高く形成し，内湾させて口縁部へ延びる。**16**は底部の切り離しが深いため，底部に切り損じの段差が付いている。底部から角張った角度で口縁部へ立ち上がる。**17**は器面の内外面共に風化により成形の形状が崩れている。内底の中央部に盛り上がりがあり，内底端で凹み胴部へ移行する。色調は内外面共に淡黄灰色を呈する。



第20図　土師器・土師質土器



第21図　瓦質土器・東播系土器



第22図　土師質土器

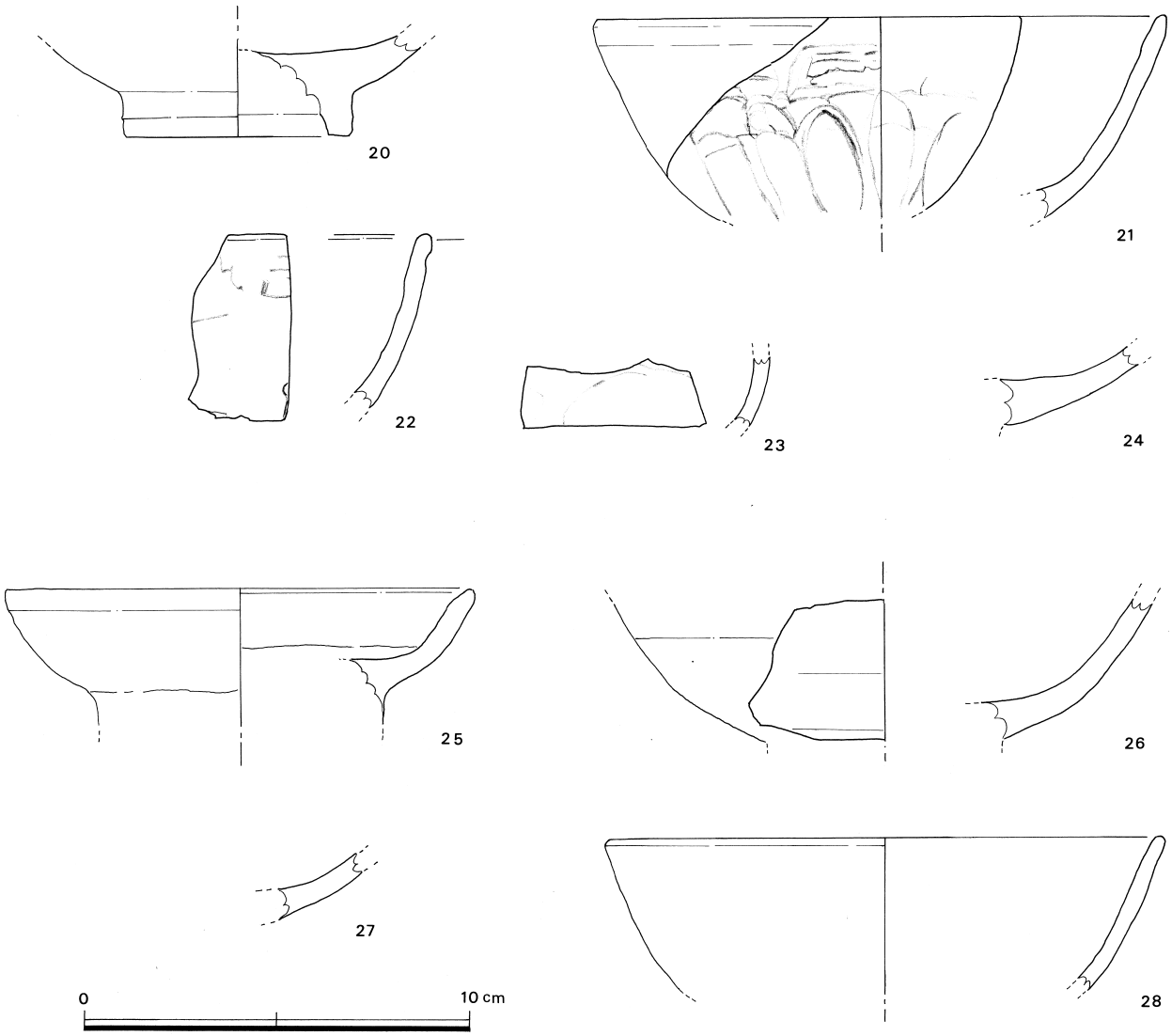
18は器面の内外面共に風化が進み全体的に丸味を帯びた形状をしている。底部からの立ち上がりの境界となる屈曲がなく外方へ延びあがる。色調は内外面共に淡黄褐色を呈する。

土師器の甕

19は断面１㎝程の厚みを持って立ち上がる。外面の風化が進み赤褐色の胎土が露出する。内面は，薄い黄褐色を呈する。

輸入陶磁器

20は青磁の高台部分。畳付けから内底部に一部釉薬が掛かるが外底は露胎のままである。器肉は，粒子の細かい粘土で灰色を呈する。**21**は体部外面に不揃いの蓮弁を片彫し，口縁下に雷文を崩した文様の片彫をしている。また，釉薬の垂下した状態が残る。内面も釉薬は全面に掛かり口唇部は，より釉薬の緑色が濃くなっている。内面は無文としている。**22**は口縁部の外面に雷文の片彫が見られる青磁碗。内外面に貫入が入り，胎土が粗く焼成時の焼斑で胴部下半は赤味を帯びている。**23**は青磁碗で蓮弁文の片彫が胴部に付けられている。**24**は青磁碗で内面に片彫の草花文が付く。**25**は青磁小碗で外面に片彫の浅い草花文が付く。内面に貫入が入り淡緑色を呈する。**26**は青磁碗で内面見込みに片彫の圏線が薄く残る。内面オリーブ色で外面は淡青緑色を呈する。27は青磁碗で灰緑色を呈し，内外面に貫入が入る。**28**は青磁碗で暗灰色の透明な釉薬が掛り，内外面に貫入が入る。口縁部で，やや屈曲する。

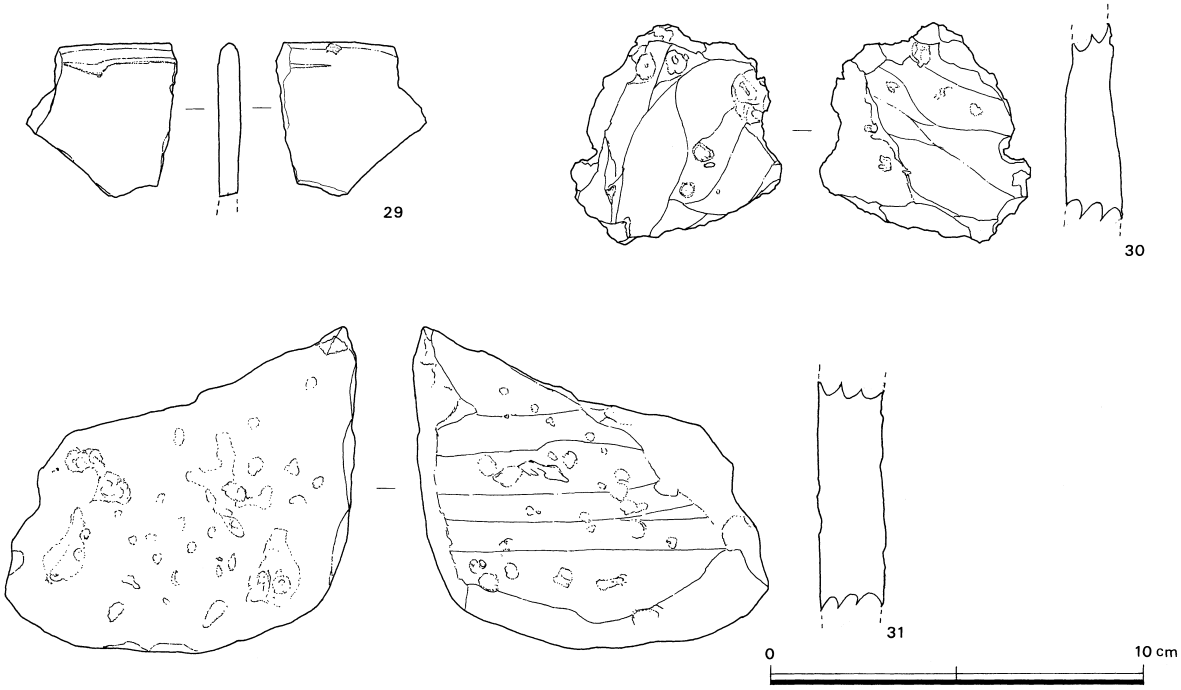


第23図　輸入陶磁器

石製品

29は砂岩製の砥石片。表裏面共に使用されていて目の詰まった上砥石である。**30**は石鍋片で外面全面に煤が付着している。質の良くない滑石素材のため５㎜程の穴が内から外に開いている。**31**も30と

同様の滑石製石鍋片で煤が付着している資料で，同一個体と考えられ，内外面に自然にできた５㎜程の穴が虫食い状態にある。内面は，磨きを良く行っている。



第24図　石器

陶磁器

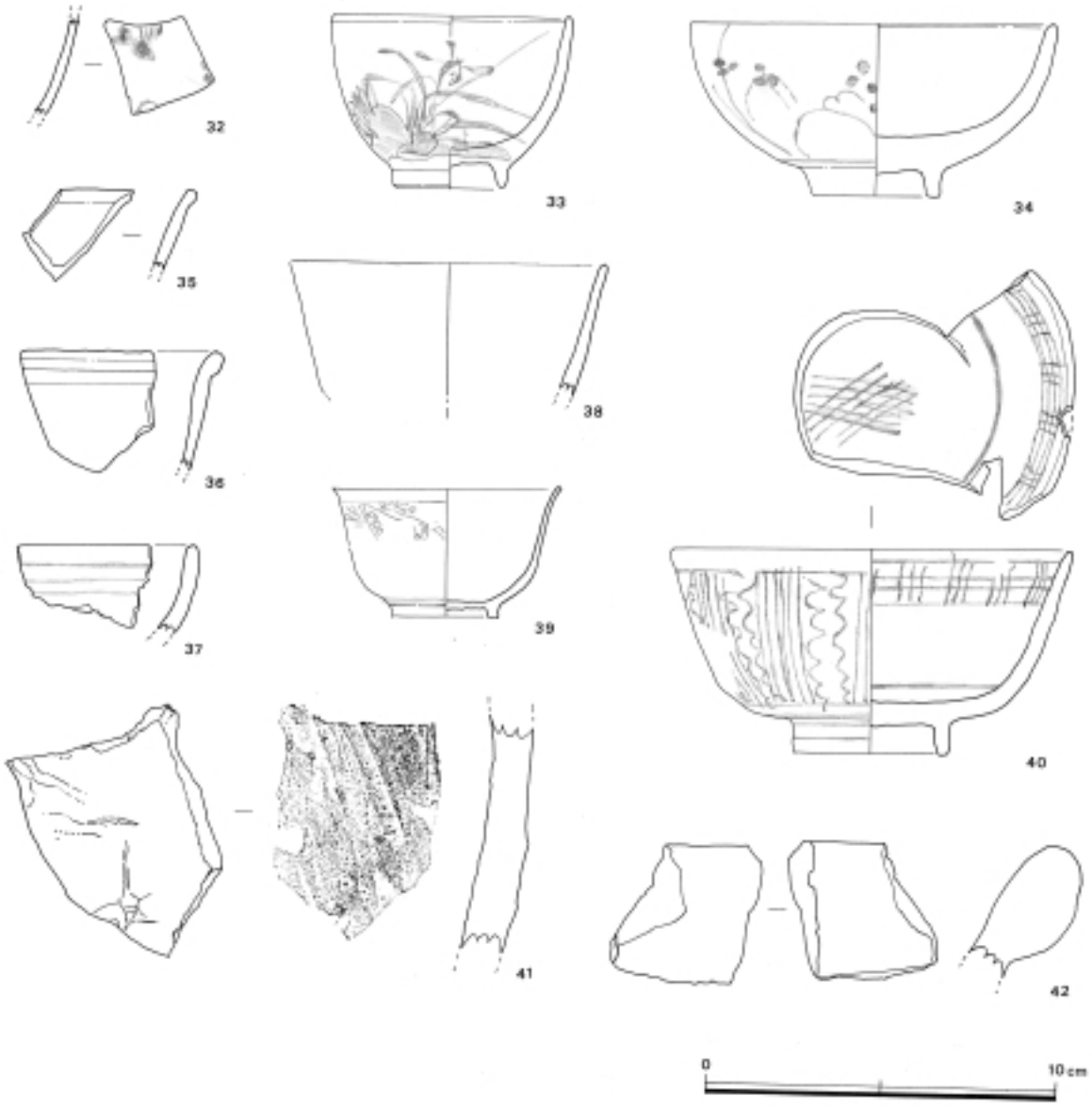
32は花文の染付片で明代の染付碗の破片と思われる。**33**は青呉須で草花文を外面に描く小碗。胎土が黄色味を持っている。色調は黄白色を呈する京風陶器。**34**は18世紀後半のくらわんか碗で，外面に草花文と体部下端に圏線及び高台に１条の圏線を描く。高台畳付は無釉としている。内底面は重ね焼をした畳付の痕が残る。**35**は陶磁器碗片で，色調は灰色で胎土は灰色に黒色粒が混じる。**36**は茶赤色の胎土に黄灰色の釉薬が厚く掛かる。口縁部を玉縁状に形成した碗。**37**は陶器碗片で内面に圏線３本を描き全面に貫入が入る近代の遺物。**38**は僅かに青呉須が残存する碗で，近代の遺物。**39**は陶磁器の猪口で，草花木の文様と圏線を描いた近代の遺物。**40**は外面によろけ鎬文を配し，内面は口縁部に格子文，見込みに斜格子文を配する碗。釉薬は，高台畳付には掛けず，それ以外全て掛けられる。色調は，灰色かかった青味色で胎土は灰白色を呈する資料で，19世紀代後半の遺物。**41**は胎土に赤味を持った唐津焼の甕片。**42**も胎土が赤味を持つ大甕の口縁部。

１号集石内出土遺物

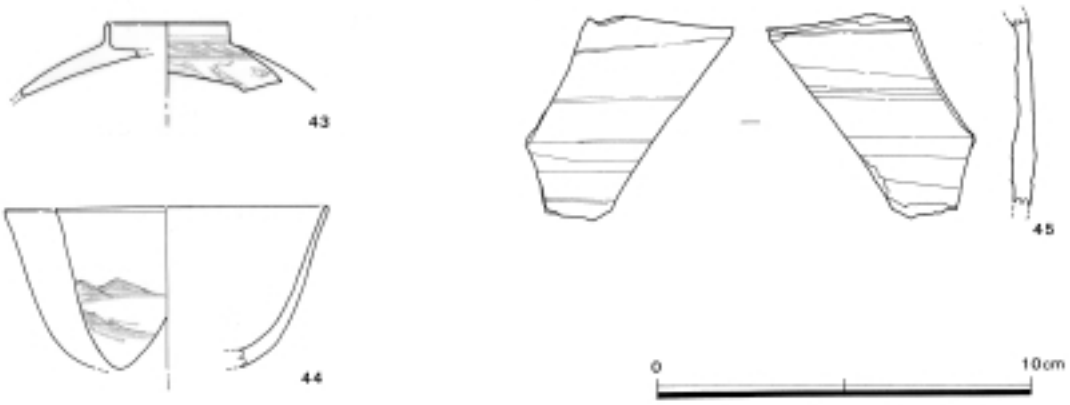
43は白色の胎土に薄い青呉須で絵付けをした陶磁器の蓋。**44**は白色の胎土に薄い青呉須で自然の風景を描いた小碗。**45**は外面に灰釉を掛け灰青色を呈する。内面は無釉とし胎土の赤色が明瞭となっている。何れも近代の遺物と思われる。

瓦（第27図～第29図，表３～表６）

出土した瓦は，平瓦，桟瓦，軒瓦，丸瓦など65点の一般的な屋根瓦が確認されている。本調査では

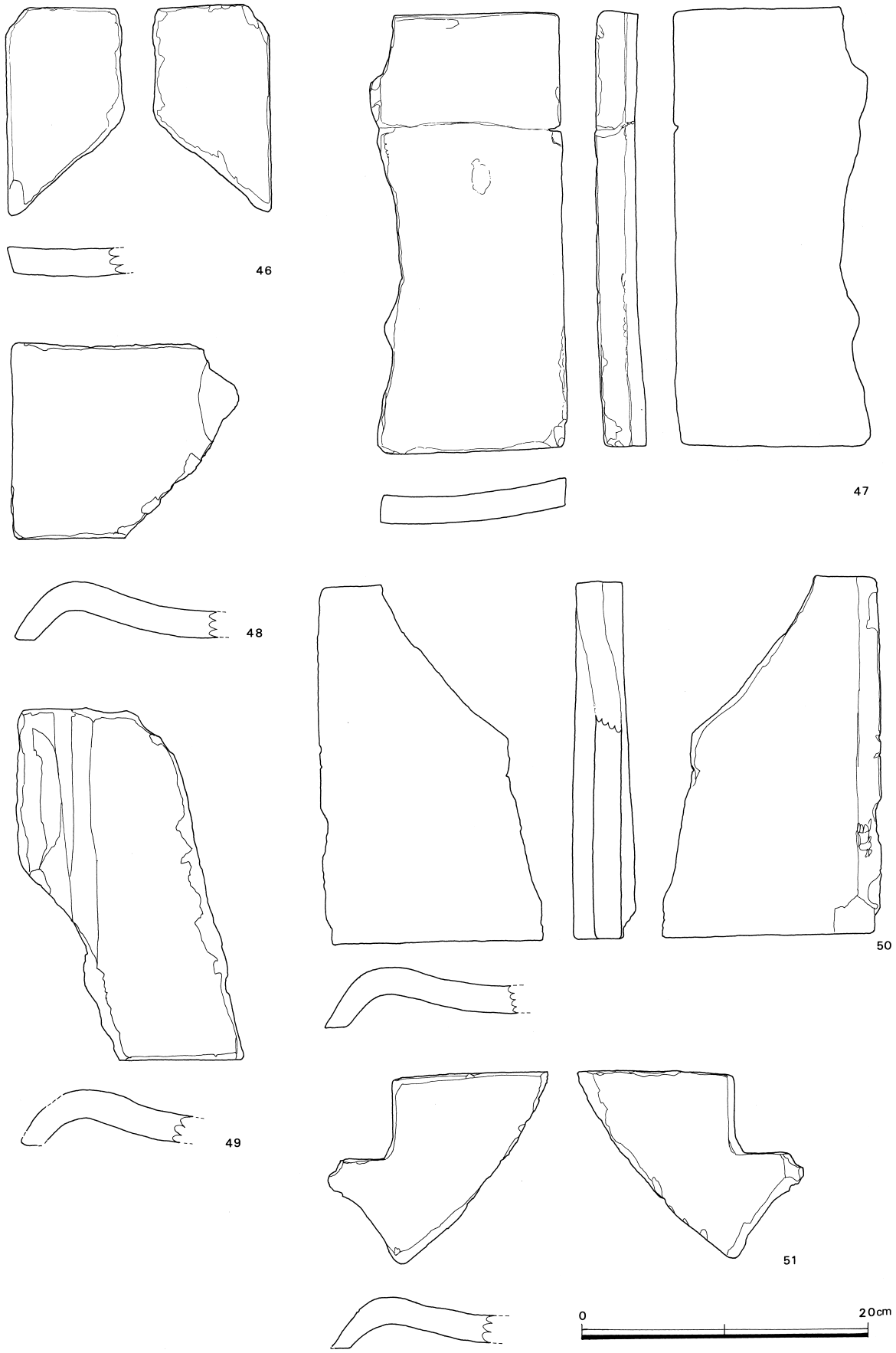


第25図　陶磁器

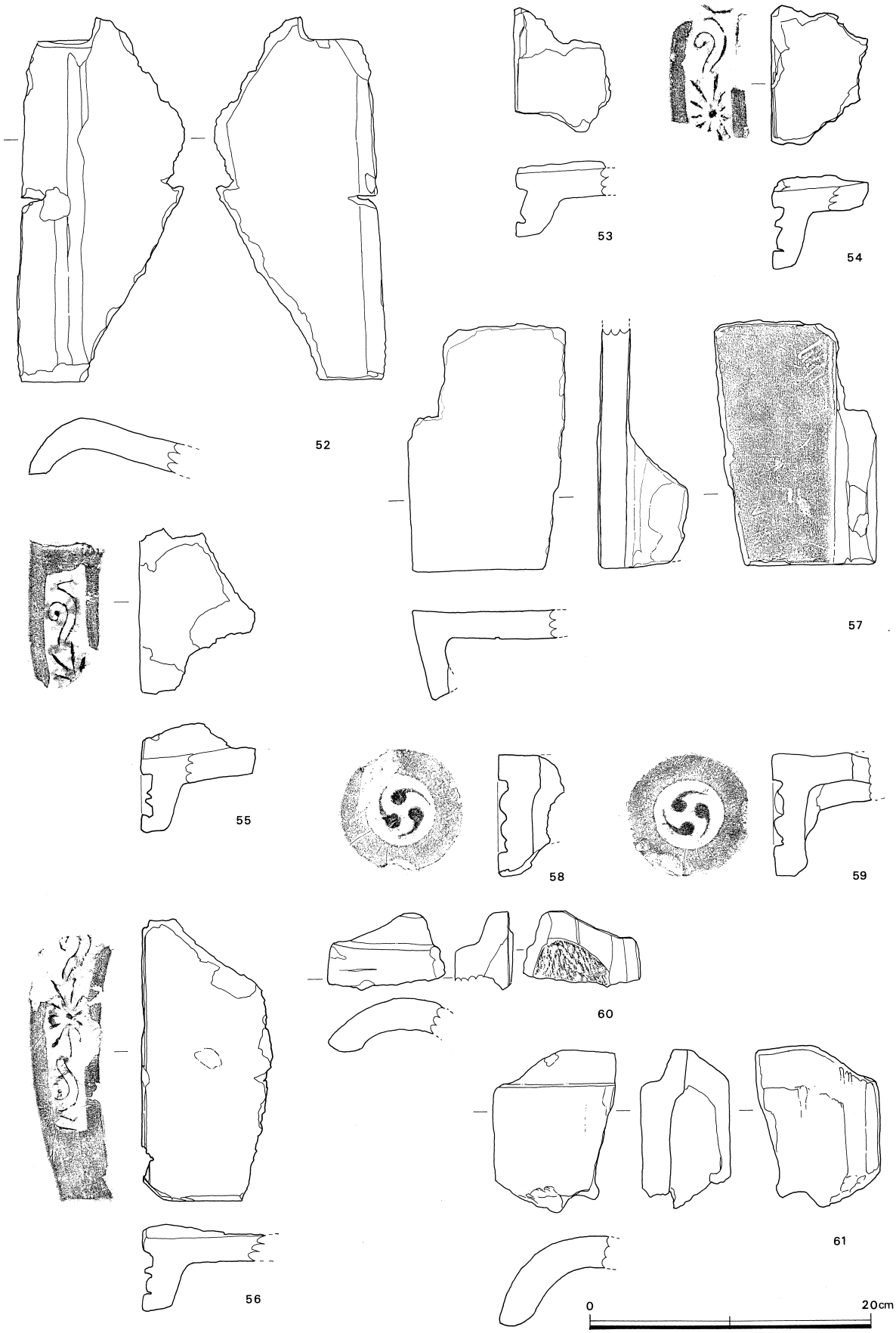


第26図　１号集石内出土遺物

２Ａ区１号集石，または，その周辺出土の内の平瓦２点，桟瓦５点，軒瓦６点，袖瓦１点，丸瓦６点を紹介する。完品での出土無し。瓦の部位・名称に関しては，『森岳城跡』－長崎県文化財調査報告書　第166集－を参照とした。



第27図　平瓦・桟瓦



第28図　桟瓦・軒瓦・袖瓦・丸瓦

平瓦

46は１層出土。燻し瓦。尻部。色調は両面共に暗灰色。焼成は良好。凹面はヘラ状工具による調整の後ナデが施されている。**47**は１号集石２層出土。燻し瓦。色調は凹面は灰色，凸面は暗灰色。焼成は良好。左側半分を欠損している。凹面と頭部側面はナデが施されている。凹面は炭素が落ち白色化もみられる。

桟瓦

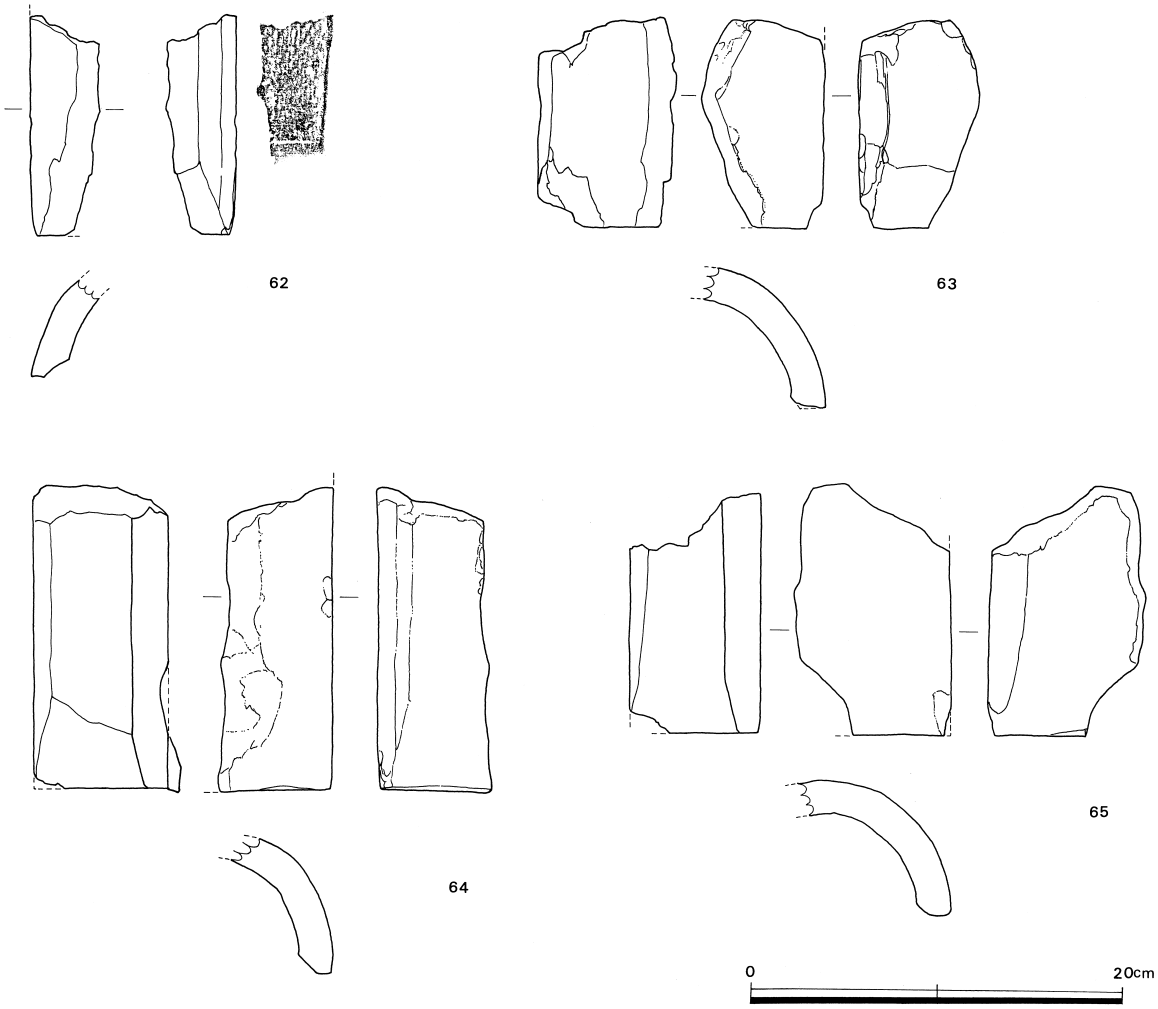
48は１層出土。燻し瓦。頭部。色調は両面共に灰色。焼成は堅緻。凹面にナデ調整が施されている。キラコの付着が確認される。**49**は１層出土。燻し瓦。色調は両面共に暗青灰色。焼成は良好。右側と左一部を欠損している。凹面にヘラ状工具による調整の後にナデが施されている。炭素が落ち白色化もみられる。キラコの付着が確認される。頭側面に「本荒巻」の刻印がある。**50**は１層出土。燻し瓦。色調は両面共に暗青灰色。焼成は良好。右側半分を欠損している。凹面はヘラ状工具による調整の後ナデが施されている。キラコの付着が確認される。頭側面に「本荒巻」の刻印がある。**51**は１層出土。燻し瓦。色調は凹面は暗灰色，凸面は灰色。焼成は堅緻。凹面はナデが施されている。キラコの付着が確認される。**52**は１層出土。燻し瓦。色調は両面共に暗灰色。焼成は堅緻。尻の切込み幅は4.7㎝。右側半分以上が欠損している。凹面はヘラ状工具による調整の後ナデが施されている。炭素が落ち白色化もみられる。

軒瓦

53は１層出土。燻し瓦。垂れ部。色調は両面共に暗灰色。焼成は堅緻。文様は唐草文が２転展開し子葉が付く。両面共にヘラ状工具によりナデ調整が施されている。接合は[註1]A。瓦当面に多量のキラコの付着が確認される。**54**は１層出土。燻し瓦。垂れ部。色調は両面共に暗灰色。焼成は堅緻。文様は中心飾りは菊文である。唐草文が２転展開し子葉が付く。両面共にヘラ状工具によりナデ調整が施されている。接合はA。瓦当面に多量のキラコの付着が確認される。**55**は１層出土。燻し瓦。垂れ部。色調は両面共に暗灰色。焼成は堅緻。文様は半分を欠損しているが中心飾りは菊文である。唐草文が２転展開し子葉が付く。両面共にナデ調整が施されている。接合はAである。瓦当面に多量にキラコの付着が確認される。**56**は１層出土。燻し瓦。垂れ部。色調は両面共に暗灰色。焼成は堅緻。文様は中心飾りは菊文である。均整唐草文を２転展開し子葉が付く。両面共にヘラ状工具によりナデ調整が施されている。接合はAである。キラコの付着が確認される。**58**は１号集石２層出土。燻し瓦。小巴部のみ。色調は両面共に灰色。焼成は良好。瓦当径8.5㎝に対し周縁幅約２㎝と幅広。右巻きの三つ巴。頭と尾は接しない。ナデ調整がされ瓦当面に多量のキラコの付着が確認される。接合はAである。**59**は１層出土。燻し瓦。小巴部のみ。色調は両面共に暗灰色。焼成は良好。瓦当径8.5㎝に対し周縁幅約２㎝。右巻きの三つ巴文。頭と尾は接しない。ナデ調整がされ瓦当面に多量のキラコの付着が確認される。接合はAである。

袖瓦

57は１層出土の燻し瓦。色調は凹面は暗灰色，凸面は灰色。焼成は堅緻。袖垂れ長は6.4㎝。両面にヘラ状工具により調整の後凹面には丁寧なナデが施されている。接合はAである。



第29図　丸瓦

丸瓦

60は１号集石出土。燻し瓦。玉縁部。色調は両面共に暗灰色。焼成は良好。凸面および玉縁部はヘラ状工具による調整が行われた後丁寧なナデが施されている。**61**は１層出土。燻し瓦。玉縁部。色調は両面共に暗灰色。焼成は良好。凸面および玉縁部はヘラ状工具による調整が行われた後丁寧なナデが施されている。凹面は布目が確認され，コビキ線[註1]はみあたらない。また，瓦端，玉縁部には面取りが施されている。**62**は１号集石。１層出土。燻し瓦。頭部。色調は両面共に暗灰色。焼成は良好。凹面頭部・端には面取りがされナデ調整が施されている。布目・コビキＢ[註1]が確認される。**63**は１層出土。燻し瓦。頭部。色調は凹面は暗灰色，凸面は灰色。焼成は良好。凸面はヘラ状工具による調整の後ナデが施されている。凹面頭部・端に面取りが施され模骨・布目・コビキＢが確認される。**64**・**65**は１層出土。燻し瓦。色調は両面共に暗灰色。焼成は良好。凸面はヘラ状工具による調整の後に丁寧なナデが施されている。凹面頭部・端に面取りが施され模骨・布目・コビキＢが確認される。

【参考文献】

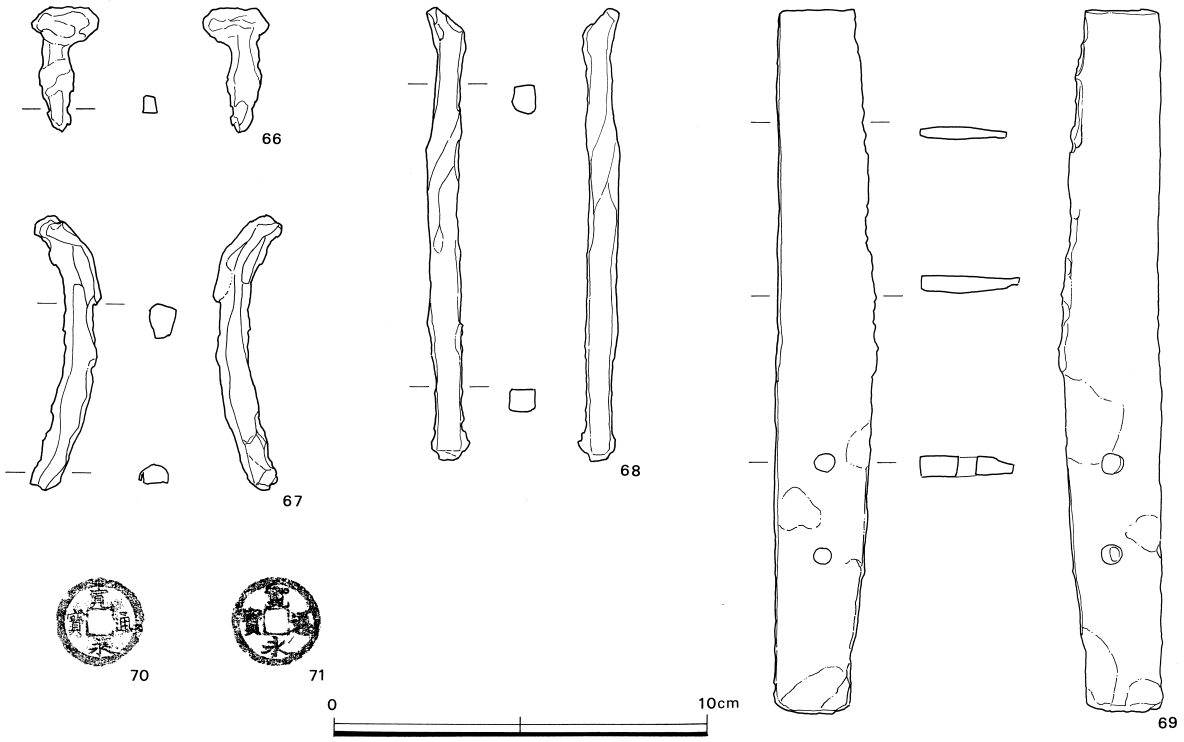
坪井利弘　1987『桟瓦屋根のデザイン』「屋根の納め方」改題・改訂版　理工学社
坪井利弘　1986『図鑑瓦屋根（改訂版)』理工学社
坪井利弘　1976『日本の瓦屋根』工学博士　玉置豊次郎監修　理工学社
秀島貞康　2004　諫早市教育委員会『尾和谷城跡』諫早市文化財調査報告書 第16集
川瀬雄一　2000　諫早市教育委員会『沖城跡』「第Ⅲ章　遺物４・瓦」諫早市文化財調査報告書 第14集

【註文献】

註１　東貴之・野澤哲郎（旧姓　竹中）2002　長崎県教育委員会『森岳城跡』「第３章調査の概要　第４節　出土遺物１・瓦」長崎県文化財調査報告書 第166集

金属製品

66は断面四角形の釘。長さ3.3㎝，厚さ0.7㎝を測る。**67**は断面四角形の釘。長さ7.2㎝，厚さ0.7㎝。**68**は断面四角形の釘。現存長で12㎝，厚さ0.7㎝。**69**は推定30～35㎝の長さの刀。種別としては小脇差の刀である。目釘穴は２個，現存長で18.4㎝，幅2.5㎝，厚さ最大で0.3㎝で無銘である。**70**は寛永通宝で，径2.4㎝，内穴0.6㎝，重さ1.9ｇを測る。**71**は寛永通宝で，2.35㎝，内穴0.6㎝，重さ3.5ｇを測る。文字は大きく潰れている。



第30図　金属製品

５．小　　結

平成22年度の調査は，新幹線工事に伴う本調査として720㎡を実施した。その結果，９基の遺構を確認している。中世の遺構として，年代測定の結果３号土坑内の炭化物から，15世紀から17世紀中頃の年代が得られ，８号焼土坑からは，15世紀後半から17世紀前半の年代が得られた。近世の遺構としては，礎石４基，石組，集石等があった。時代を設定できる資料としては，礎石を検出した面に踏固めた張床を確認し調査を実施した結果，近世陶磁器片及び断面四角形の釘が出土したことから，明治時代以前に建物基礎が設置されていたと判断された。また，３区に検出した石組遺構は聞き取りによって，地元の信仰に関わる祠と確認できたが，遺物が一切出土していないため時期については不明である。遺物は，輸入陶磁器の体部に不揃いの蓮弁を片彫し，口縁部に雷文様を片彫りした14世紀後半～15世紀代にかけての輸入された青磁碗が出土していることから，活発な交易を行っていたものと推測される。また，国産品としては，瓦質土器の火入れ具や土師質土器の煮沸道具，土師質皿等が出土している。

表２　一次・二次調査出土遺物一覧表

図版・番号	地区名	出土層位	備考	図版・番号	地区名	出土層位	備考
1	３Ｄ	Ⅰ層（腐葉土）	一次調査	27	２Ａ	Ⅰ層上	一次調査
2	２Ｃ	Ⅰ層（腐葉土）	一次調査	28	２Ｂ	Ⅱ層	一次調査
3	２Ｃ	Ⅰ層（腐葉土）	一次調査	29	２Ａ	Ⅱ層	一次調査
4	１Ｂ	Ⅱ層	一次調査	30	２Ｃ	Ⅰ層	一次調査
5	２Ｂ	Ⅱ層	一次調査	31	３Ｃ	Ⅱ層	一次調査
6	２Ａ	Ⅰ層（腐葉土）	一次調査	32	２Ａ	Ⅰ層上	一次調査
7	３Ｃ	Ⅰ層（腐葉土）	一次調査	33	Ａ	表採	一次調査
8	３Ｃ	Ⅰ層（腐葉土）	一次調査	34	２Ａ	Ⅰ層	一次調査
9	３Ｃ	Ⅰ層（腐葉土）	一次調査	35	２Ａ	Ⅱ層	一次調査
10	２Ｂ	Ⅱ層	一次調査	36	２Ｂ	Ⅱ層	一次調査
11	４Ｂ	Ⅰ層上	一次調査	37	２Ａ	Ⅰ層	一次調査
12	２Ａ	Ⅱ層下	一次調査	38	２Ａ	Ⅰ層	一次調査
13	２Ｂ	Ⅱ層上	一次調査	39	２Ａ	Ⅰ層	一次調査
14	３Ｄ	Ⅰ層（腐葉土）	一次調査	40	３Ｃ	Ⅱ層	一次調査
15	１Ａ	Ⅱ層上	一次調査	41	２Ａ	Ⅱ層	一次調査
16	２Ｂ	Ⅱ層	一次調査	42	２Ａ	Ⅱ層	一次調査
17	２Ａ	Ⅱ層	一次調査	43	２Ａ	１号集石	一次調査
18	２Ｂ	Ⅱ層	一次調査	44	２Ａ	１号集石	一次調査
19	２Ｂ	Ⅱ層	一次調査	45	２Ａ	１号集石Ⅱ層下	一次調査
20	１Ａ	Ⅱ層上	一次調査	66	２Ｂ	４号礎石張床	一次調査
21	３Ｃ	Ⅱ層上	一次調査	67	２Ａ	１号集石	一次調査
22	２Ａ	Ⅰ層上（腐葉土）	一次調査	68	２Ａ	Ⅰ層	一次調査
23	２Ａ	Ⅰ層上	一次調査	69	２Ａ	Ⅰ層上	一次調査
24	２Ａ	Ⅰ層上	一次調査	70	６Ｅ	表土	二次調査
25	２Ａ	Ⅰ層上	一次調査	71	４Ｃ	Ⅱ層上	二次調査
26	２Ａ	Ⅰ層上	一次調査				
1	６Ｃ	Ⅱ層	二次調査	16	８Ｄ	Ⅱａ層	二次調査
2	７Ｃ	Ⅱｂ層	二次調査	17	５Ｅ	Ⅰ層	二次調査
3	８Ｄ	Ⅱａ層	二次調査	18	８Ｄ	Ⅱａ層	二次調査
4	７Ｃ	Ⅱ層	二次調査	19	７Ｄ	Ⅱａ層	二次調査
5	８Ｃ	Ⅱ層	二次調査	20	７Ｄ	Ⅰ層	二次調査
6	７Ｃ	Ⅱ層	二次調査	21	５Ｃ	Ⅱ層上	二次調査
7	８Ｄ	Ⅱ層	二次調査	22	７Ｅ	Ⅱ層	二次調査
8	７Ｄ	Ⅰ層下	二次調査	23	６Ｄ	Ⅱ層	二次調査
9	４Ｂ	19号ピット	二次調査	24	７Ｄ	Ⅰ層	二次調査
10	４Ｂ	Ⅱ層上	二次調査	25	８Ｄ	Ⅱａ層	二次調査
11	７Ｄ	Ⅱ層	二次調査	26	５Ｃ	Ⅱａ層	二次調査
12	８Ｄ	Ⅱ層上	二次調査	27	５Ｄ	Ⅰ層	二次調査
13	８Ｃ	Ⅱａ層	二次調査	28	８Ｄ	Ⅱａ層	二次調査
14	８Ｄ	Ⅱ層	二次調査	29	７Ｄ	Ⅰ層	二次調査
15	８Ｄ	Ⅱ層	二次調査	30	８Ｄ	Ⅰ層	二次調査

表３　平瓦・桟瓦観察表

遺物№	地点	層位	器種	色調		焼成	胎土	調整		備考
				凹面	凸面			凹面	凸面	
46	２Ａ	１層	平瓦	暗灰色	暗灰色	良好	小礫	ナデ		燻し瓦
47	１号集石	２層	平瓦	灰色	暗灰色	良好	小礫	ナデ		燻し瓦
48	２Ａ	１層	桟瓦	灰色	灰色	堅緻	小礫	ナデ		燻し瓦 キラコ
49	２Ａ	１層	桟瓦	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	燻し瓦 キラコ 刻印
50	２Ａ	１層	桟瓦	暗青灰色	暗青灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	燻し瓦 キラコ 刻印
51	２Ａ	１層	桟瓦	暗灰色	灰色	堅緻	小礫	ナデ		燻し瓦 キラコ
52	２Ａ	１層	桟瓦	暗灰色	暗灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	燻し瓦

表４　軒瓦・袖瓦観察表

遺物№	地点	層位	器種	色調		焼成	胎土	調整		中心飾り	唐草展開	子葉	接合	備考
				凹面	凸面			凹面	凸面					
53	２Ａ	１層	軒瓦	暗灰色	暗灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	－	２転	○	Ａ	燻し瓦 キラコ
54	２Ａ	１層	軒瓦	暗灰色	暗灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	菊文	２転	○	Ａ	燻し瓦 キラコ
55	２Ａ	１層	軒瓦	暗灰色	暗灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	菊文	２転	○	Ａ	燻し瓦 キラコ
56	２Ａ	１層	軒瓦	暗灰色	暗灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ	菊文	２転	○	Ａ	燻し瓦 キラコ
57	２Ａ	１層	袖瓦	暗灰色	灰色	堅緻	小礫	ナデ	ナデ				Ａ	燻し瓦

表５　巴付軒瓦観察表

遺物№	地点	層位	器種	色調		焼成	胎土	調整		小巴文様	瓦当径(㎝)	周縁幅(㎝)	巻き	接合	備考
				凹面	凸面			凹面	凸面						
58	１号集石	２層	軒瓦	灰色	灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	三つ巴	8.5	約２	右	Ａ	燻し瓦 キラコ
59	２Ａ	１層	軒瓦	暗灰色	暗灰色	良好	小礫	ナデ	ナデ	三つ巴	8.5	約２	右	Ａ	燻し瓦 キラコ

表６　丸瓦観察表

遺物№	地点	層位	器種	色調		焼成	胎土	調整		コビキ	備考
				凹面	凸面			凹面	凸面		
60	１号集石		丸瓦	暗灰色	暗灰色	良好	小礫	ナデ・布目	ナデ	－	燻し瓦
61	２Ａ	１層	丸瓦	暗灰色	暗灰色	良好	小礫・石英	模骨・ナデ・布目	ナデ	－	燻し瓦
62	１号集石	１層	丸瓦	暗灰色	暗灰色	良好	小礫	ナデ・布目	ナデ	Ｂ	燻し瓦
63	２Ａ	１層	丸瓦	暗灰色	灰色	良好	小礫	模骨・ナデ・布目	ナデ	Ｂ	燻し瓦
64	２Ａ	１層	丸瓦	暗灰色	暗灰色	良好	小礫	模骨・ナデ・布目	ナデ	Ｂ	燻し瓦
65	２Ａ	１層	丸瓦	暗灰色	暗灰色	良好	小礫	模骨・ナデ・布目	ナデ	Ｂ	燻し瓦

表７　巴瓦観察表

遺物№	地点	層位	器種	色調		焼成	胎土	調整		文様	珠文		巴			接合	備考
				凹面	凸面			凹面	凸面		直径(㎝)	数(残存)	頭直径	巻き			
31	５Ｅ	１層	不明	灰色	灰色	良好	小礫		ナデ	三つ巴	0.8	2		右	なし		燻し瓦 キラコ

表８　桟瓦観察表

遺物№	地点	層位	器種	色調		焼成	胎土	調整		備考
				凹面	凸面			凹面	凸面	
32	４Ｃ	１層	桟瓦	暗灰色	暗灰色	堅緻	小礫	ナデ		燻し瓦 キラコ

図版１

調査風景

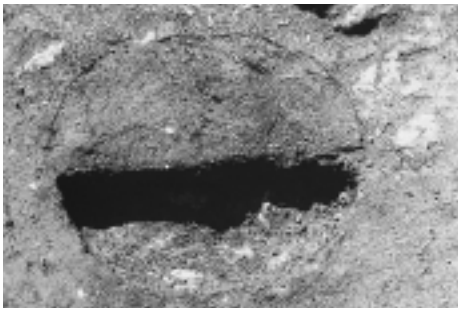
調査風景

１号

２号

３号

４号



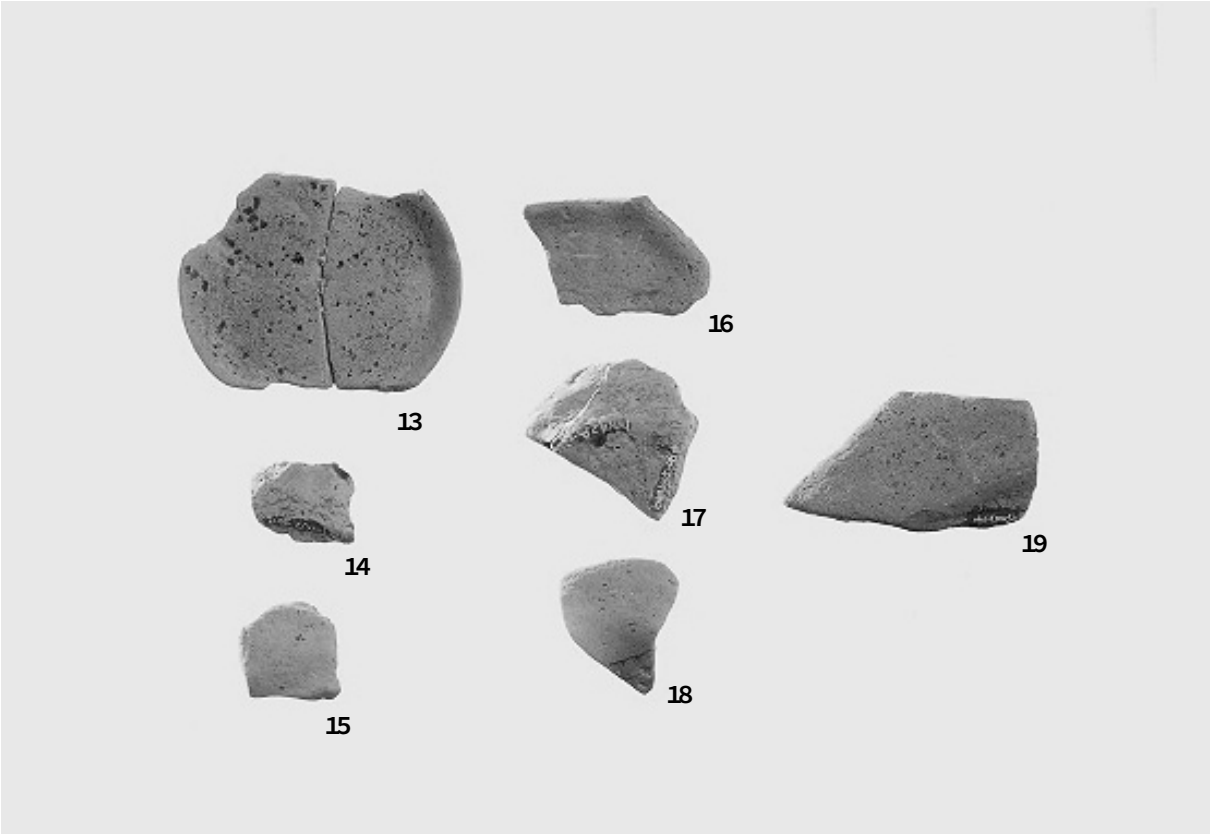
８号

９号

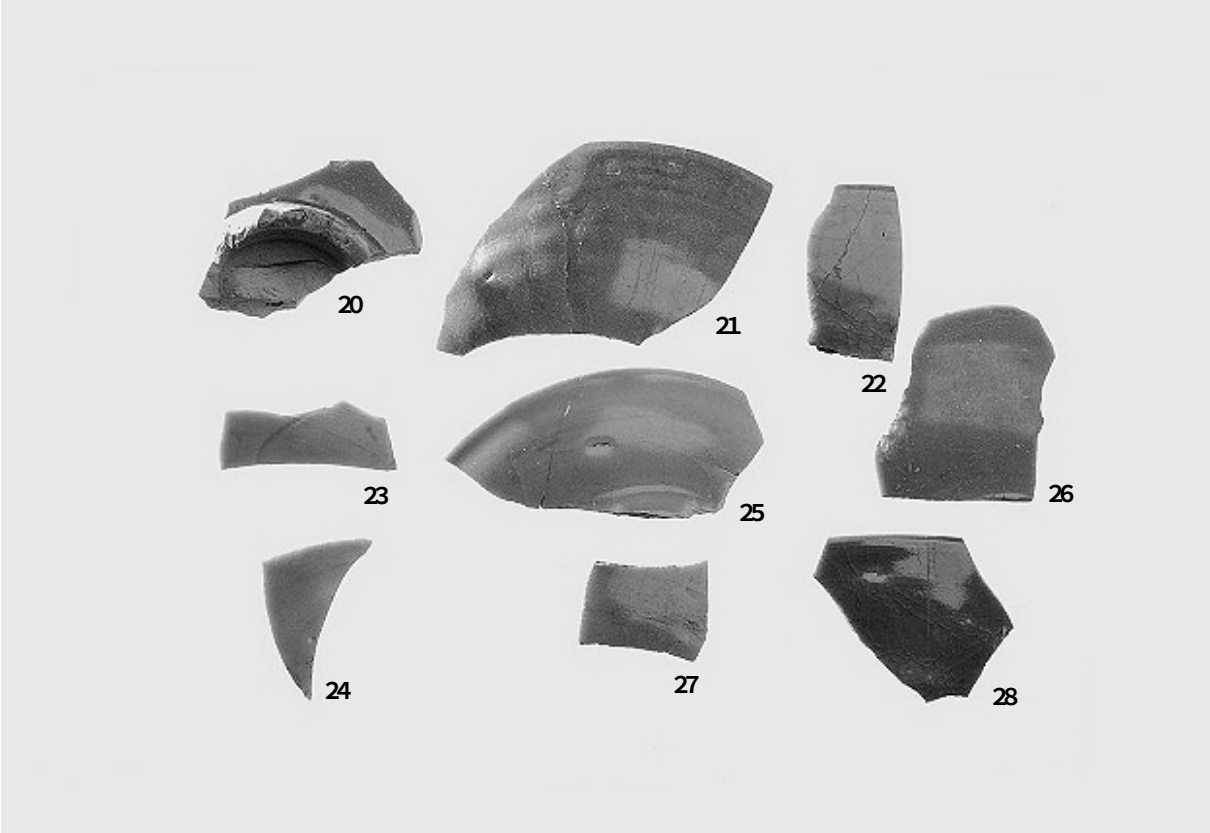
遺物出土
状況

遺物出土
状況

一次調査

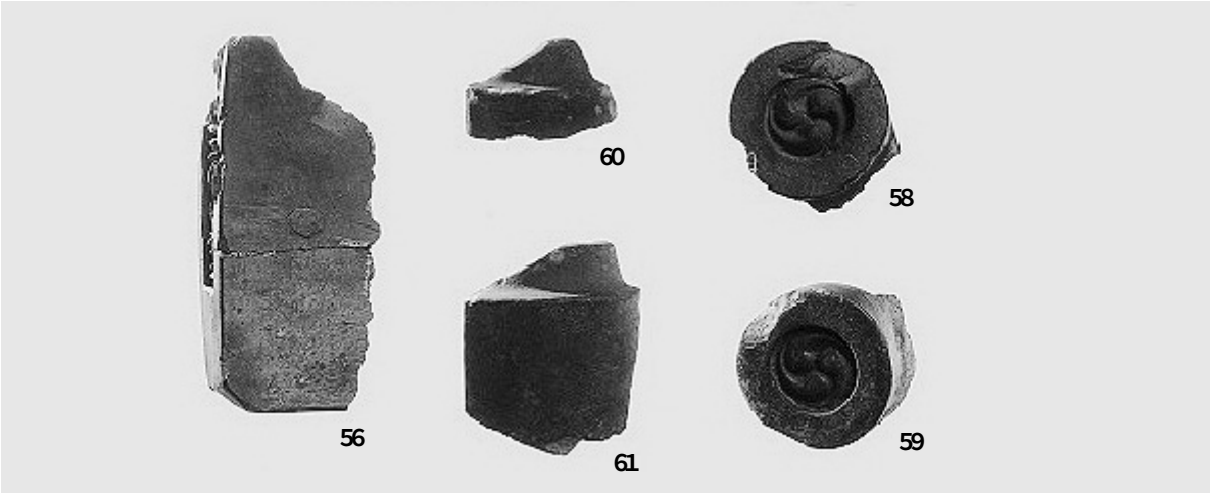


土師質皿・土師器の甕

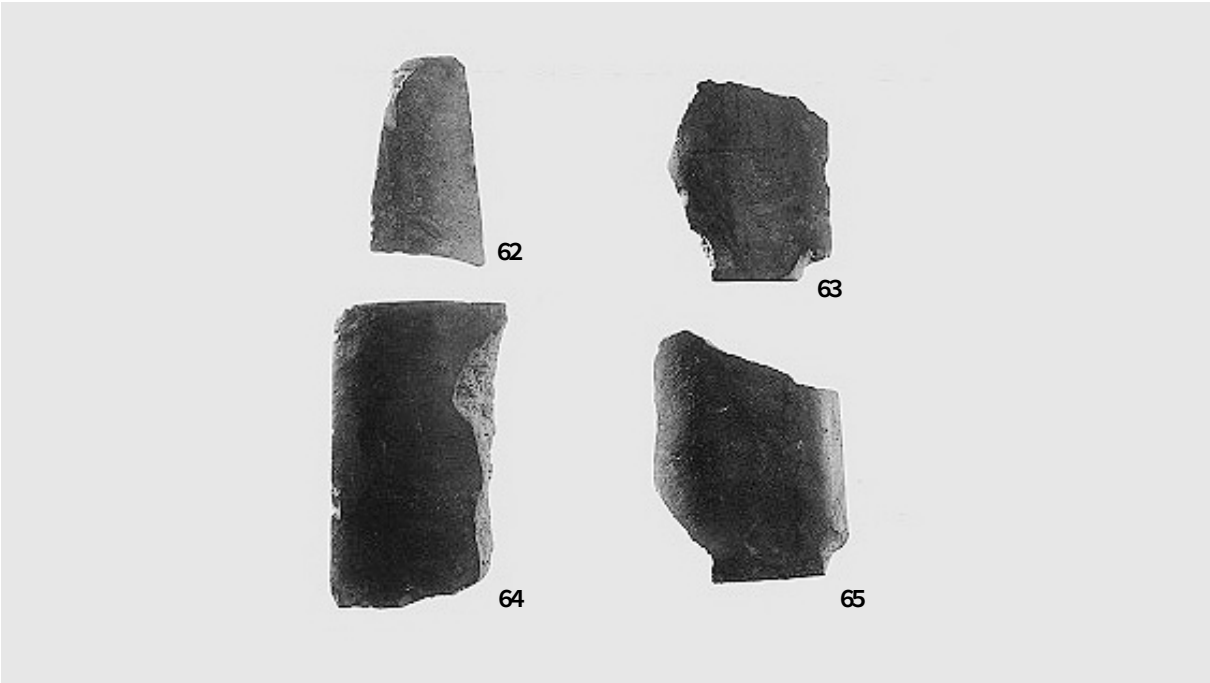


輸入陶磁器

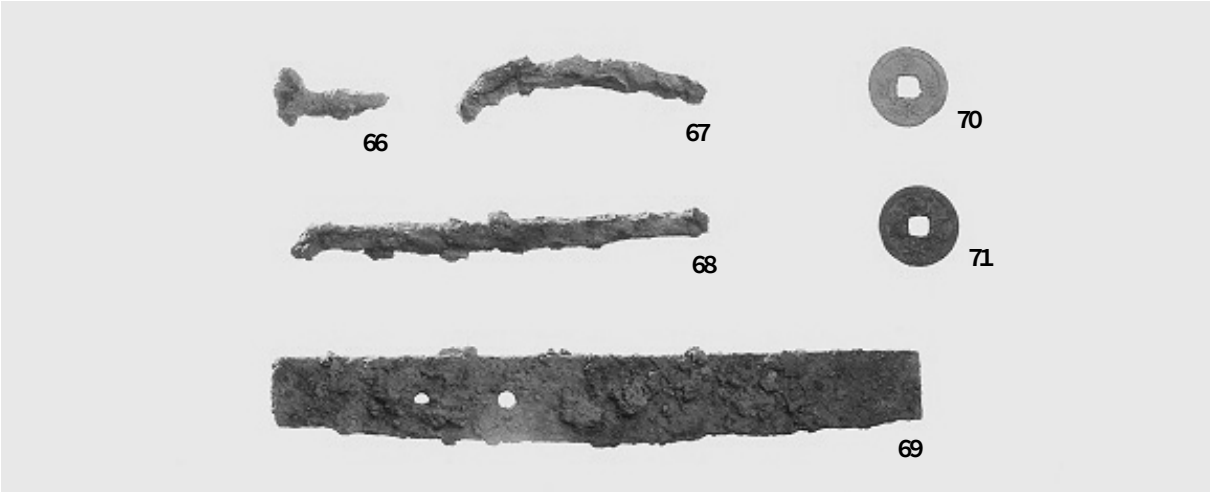
出土遺物その１



軒瓦，丸瓦



丸瓦



金属製品

出土遺物その２

第２部　平成23年度調査（二次調査）

１．調査の概要（第７図，第31図）

調査区は，平成22年度に設定したグリッド配置図に基づき，南北軸10m×東西軸10mを１グリッドと区画し，名称も前回と同様にＡ～Ｅ（南北軸）と１～８（東西軸）の記号番号を付した。

調査は，調査区を設定した範囲に照葉樹の葉や枝類が散乱していたため，葉と樹木の枝類を収集し，集積を行った。集積後に，第１回の航空写真の撮影を行った。次に腐葉土（１層）の掘削から調査を開始した。腐葉土の直下からは，近世陶磁器，瓦等の出土があった。２層に青磁，土師器，瓦質土器，黒曜石石核及び旧石器時代のナイフ形石器が出土している。３層は，地山の明赤褐色粘質土で安山岩の風化礫が混じり，遺物の出土は見られなかった。遺構は，柱穴，土坑等を15箇所で検出している。

２．土　　層（第32図～第34図）

調査対象範囲は，標高68m～90mの急傾斜地にあたる。土層は地点によって多少異なるが，基本的に３層に大別できる。

１層　土質により３層に分層した。腐葉土直下からは近世陶磁器，瓦などの出土が見られる。

１……腐葉土である。

１’…褐色粘質土（7.5YR4/6）炭化物を少量含む。

１ａ…褐色砂質土（7.5YR4/6）腐葉土が混じりフカフカしている。

２層　色調により５層に分層した。縄文時代，中世陶磁器，近世陶磁器の遺物を含む。

２……褐色砂泥土（7.5YR4/4）ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。

２ａ…褐色砂泥土（7.5YR4/6）やや粘土質である。安山岩風化礫粒を含む。

２ｂ…褐色砂泥土（7.5YR5/4）５㎝～拳大の安山岩風化礫を含む。

２ｃ…褐色砂泥土（7.5YR5/4）やや粘質である。炭化物が混じる。

３層　色調により２層に分層した。無遺物層で地山である。

３……明赤褐色粘質土（5YR5/6）安山岩風化礫を多く含む。

３ａ…明褐色粘質土（7.5YR5/8）安山岩風化礫を多量に含む。

３．遺　　構（第35図～第37図）

・10号ピット（８Ｃ区）

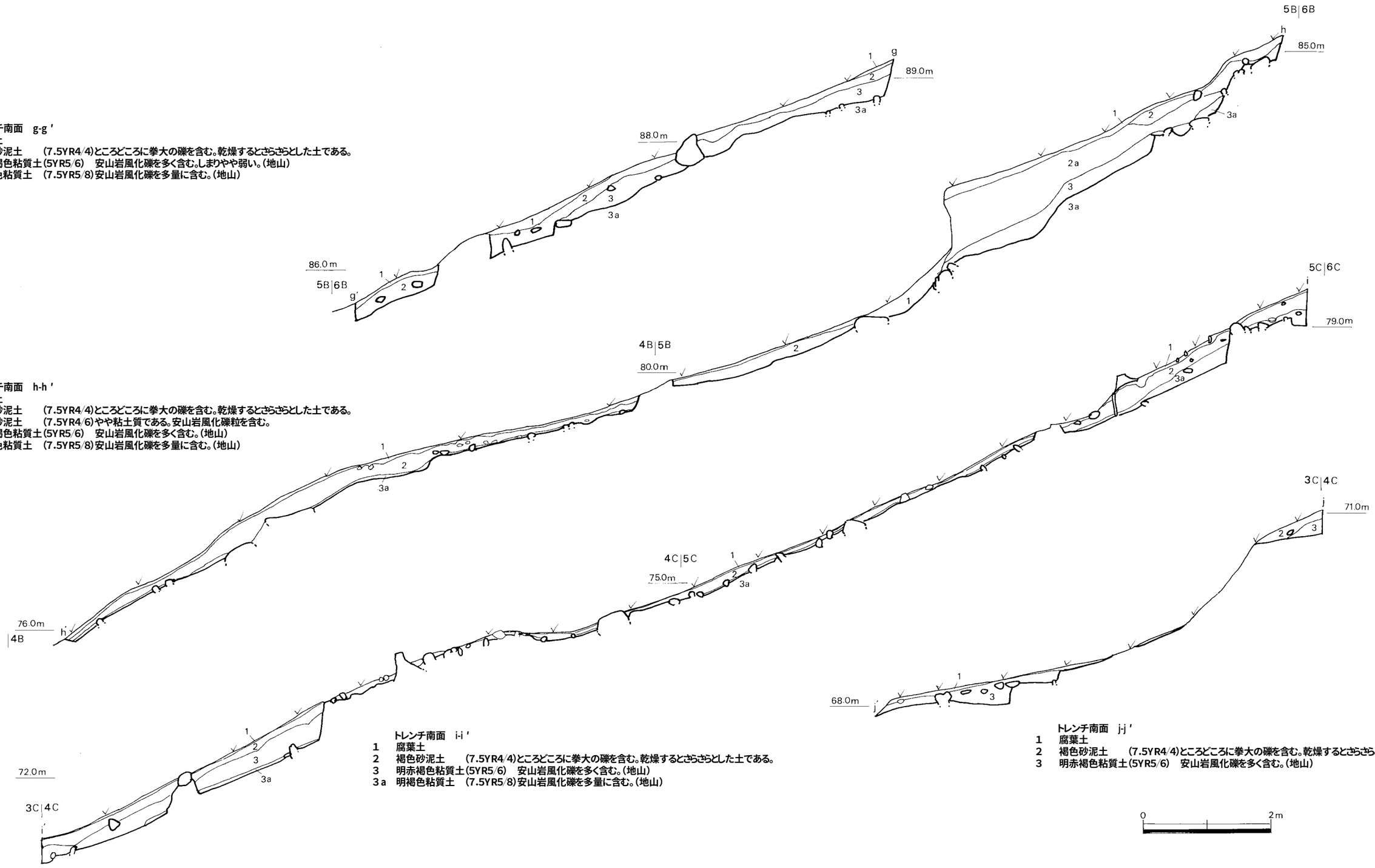
プランの大きさは，径が42㎝×23㎝×深さ25㎝を測る。堆積土の状況は，上面は暗茶黒色の腐植土が１㎝程堆積し，以下は，暗褐色土の締りのない土が充填している。

・11号ピット（８Ｃ区）

プランの大きさは，径が60㎝×54㎝×深さ30㎝を測る。堆積土の状況は，上面に暗茶黒色があり，以下は覆土に鈍い黄褐色土と１㎝以下の風化礫を含んだ土となっている。

E
D
C
B
A
8
7
6
5
4
3
2
1
90.00
85.00
85.00
80.00
80.00
75.00
75.00
70.00
70.00
65.00
65.00
0
10
20m

第31図　調査区地形



トレンチ南面　g-g ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
3　明赤褐色粘質土(5YR5/6)　安山岩風化礫を多く含む。しまりやや弱い。(地山)
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

トレンチ南面　h-h ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
2a　褐色砂泥土　　(7.5YR4/6)やや粘土質である。安山岩風化礫粒を含む。
3　明赤褐色粘質土(5YR5/6)　安山岩風化礫を多く含む。(地山)
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

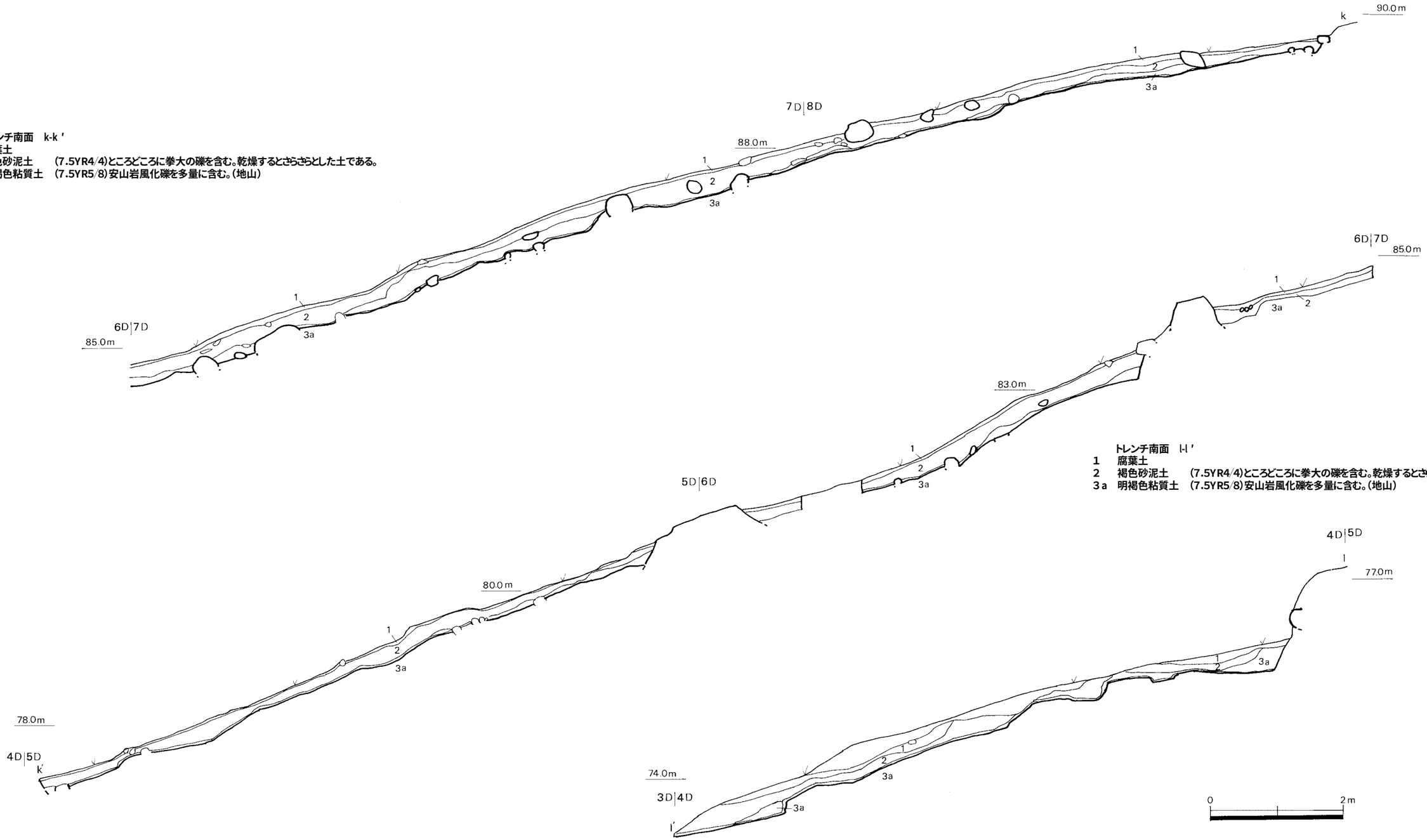
トレンチ南面　i-i ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
3　明赤褐色粘質土(5YR5/6)　安山岩風化礫を多く含む。(地山)
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

トレンチ南面　j-j ′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
3　明赤褐色粘質土(5YR5/6)　安山岩風化礫を多く含む。(地山)

0　2m

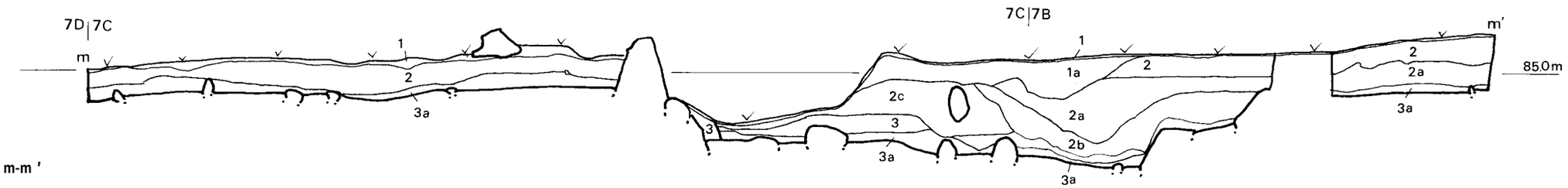
第32図　土層その１

トレンチ南面　k-k′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)



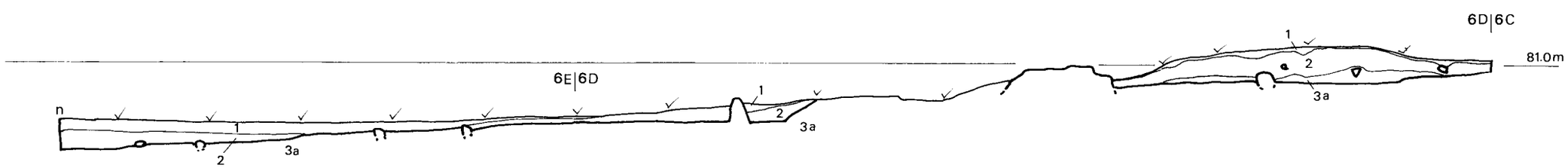
トレンチ南面　l-l′
1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

第33図　土層その2



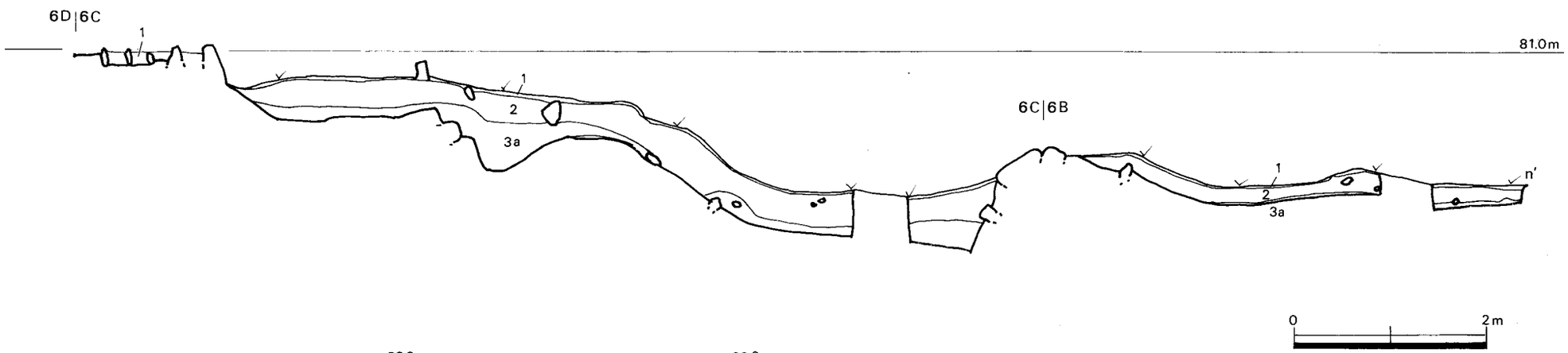
トレンチ西面　m-m′

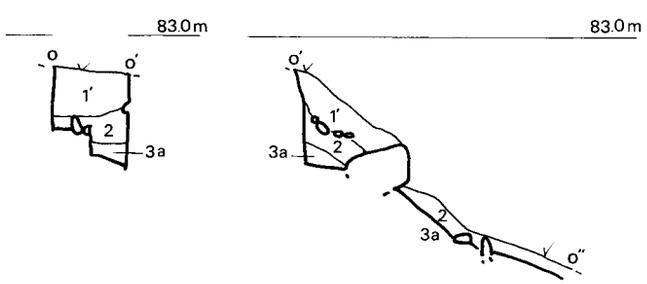
1　腐葉土
1a　褐色砂質土　(7.5YR4/6)腐葉土が混じりフカフカしている。
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
2a　褐色砂泥土　(7.5YR4/6)やや粘土質である。安山岩風化礫粒を含む。
2b　褐色砂泥土　(7.5YR4/3) 5㎝～拳大の安山岩風化礫を含む。
2c　褐色砂泥土　(7.5YR4/6)やや粘質である。炭化物が混じる。
3　明赤褐色粘質土(5YR5/6)　安山岩風化礫を多く含む。(地山)
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)



トレンチ西面　n-n′

1　腐葉土
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)





石積みトレンチ西・北面　o-o′-o″

1′　褐色粘質土　(7.5YR4/6)炭化物を少量含む。
2　褐色砂泥土　(7.5YR4/4)ところどころに拳大の礫を含む。乾燥するとさらさらとした土である。
3a　明褐色粘質土　(7.5YR5/8)安山岩風化礫を多量に含む。(地山)

第34図　土層その3

・12号ピット（８Ｃ区）

プランの大きさは，径が35㎝×37㎝×深さ33㎝を測る。黒褐色土と鈍い黄褐色土が混在する。木の根によって撹乱を受けている。

・13号ピット（８Ｄ区）

プランの大きさは，径が220㎝×140㎝×○㎝を測る。覆土に黄褐色砂質土が堆積している。

・14号ピット（７Ｃ区）

プランの大きさは，径が28㎝×33㎝×深さ23㎝を測る。上部に黒褐色土が堆積し，下部は暗褐色土が堆積している。

・15号ピット（７Ｃ区）

楕円形のプランで，その大きさは，径が76㎝×120㎝×深さ８㎝を測る。均質でボソボソとした崩れやすい褐色土が覆土となっている。

・16号ピット（７Ｄ区）

プランの大きさは，径が35㎝×38㎝×深さ10㎝を測る。均質で締りのない暗褐色土の覆土が堆積している。

・17号ピット（７Ｃ区）

プランの大きさは，径が45㎝×75㎝×深さ22㎝を測る。上部に黒褐色土が堆積し，２層に流れ込みの黒褐色土が溜まり３層に褐色土が堆積する。

・18号ピット（７Ｃ区）

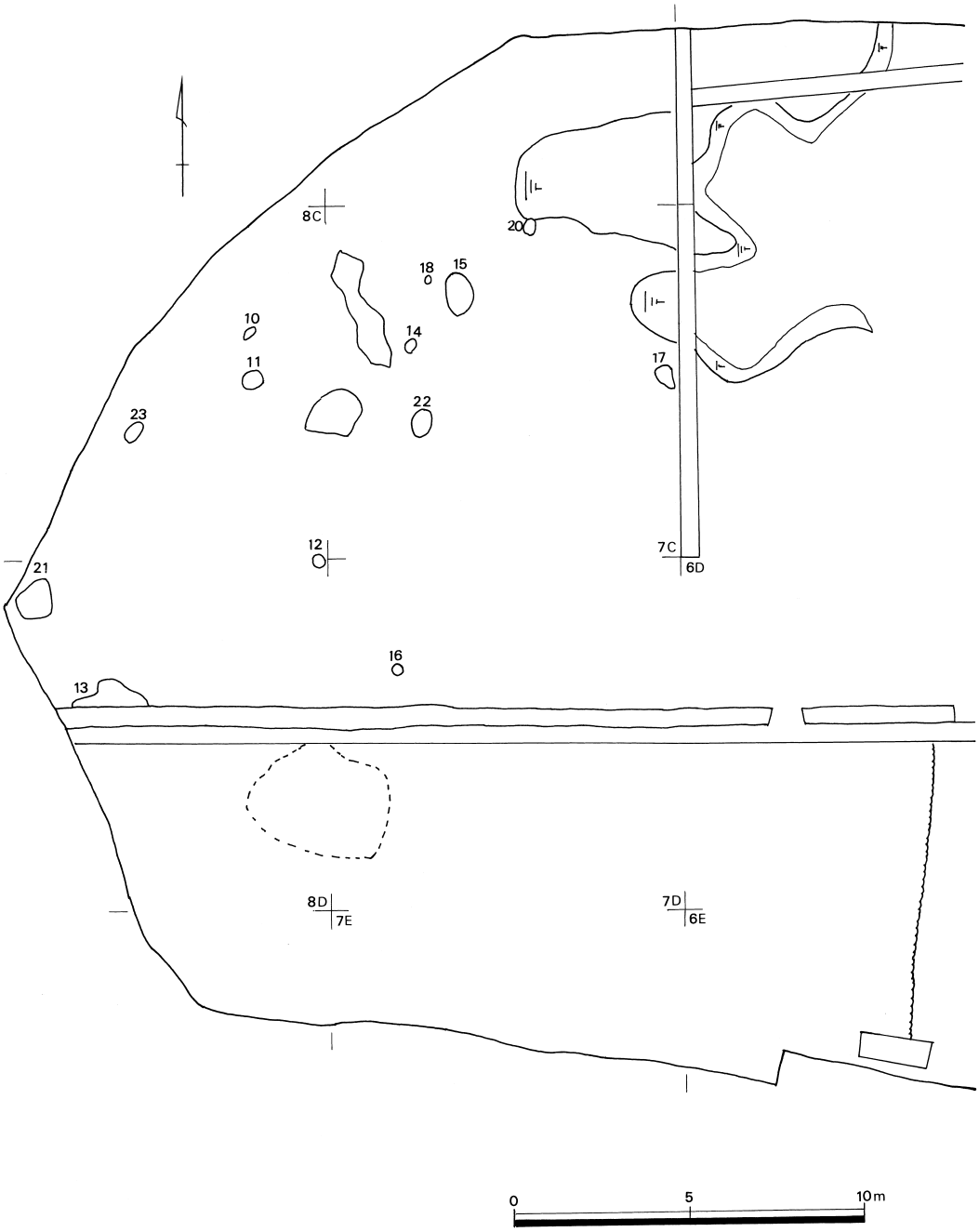
プランの大きさは，径が20㎝×30㎝×深さ６㎝を測る。上部に茶褐色土が堆積し，下部に明褐色土が堆積する。

・19号ピット（４Ｂ区）

プランの大きさは，約310㎝×190㎝の範囲に石の集中箇所を確認している。礫の流れ込みによる自然堆積と考えられる。集石を取り除くと黒褐色の腐葉土が深さ２㎝程堆積していたが，以下地山となっていた。

・20号ピット（７Ｃ区）

プランの大きさは，径が37㎝×50㎝×深さ27㎝を測る。上部に黒褐色土が堆積し，下部は鈍い黄褐色土が覆土となっている。



第35図　遺構配置その１（６Ｃ・６Ｄ・６Ｅ・７Ｃ・７Ｅ・８Ｃ・８Ｄ・８Ｅ区）

第36図　遺構配置（３Ｂ・３Ｃ・３Ｄ・４Ｂ・４Ｃ・４Ｄ・５Ｂ・５Ｃ・５Ｄ・５Ｅ区）

・21号土坑（８Ｄ区）

プランの大きさは，100㎝×110㎝×深さ12㎝を測る。覆土に黄褐色土の堆積があり，礫が多く含まれている。

・22号ピット（７Ｃ区）

プランの大きさは，60㎝×80㎝×深さ15㎝を測る。褐色土を覆土に下層は小礫が混じる。

・23号ピット（８Ｃ区）

プランの大きさは，40㎝×70㎝×深さ10㎝を測る。上層に黒褐色土が堆積し，下層に褐色土が堆積している。

・４-５号礎石（３Ｂ区）

礎石の大きさは，37㎝×50㎝×厚さ25㎝を測る。礎石の北側周辺には，10㎝代の礫が広がる。１次調査で検出した礎石と一連のものである。礎石は確認したが,礎石の配置については,本来の位置でない場所に移動しているため４-１・４-２の礎石のような礎石を整地した箇所の確認が得られなかった。

４．遺　　物（第38図～第44図）

石器

１はナイフ形石器で両側縁に剥離整形を行う。黒曜石を素材に縦長剥片の下部を剥離整形し，基部を形成する。刃部は，正面右側縁としている。**２**は幅広の黒曜石剥片。**３**は幅広の剥片を表裏面から連続して剥離を繰り返し行った石核。正面から左側縁にかけては，自然面を残す。

土師器

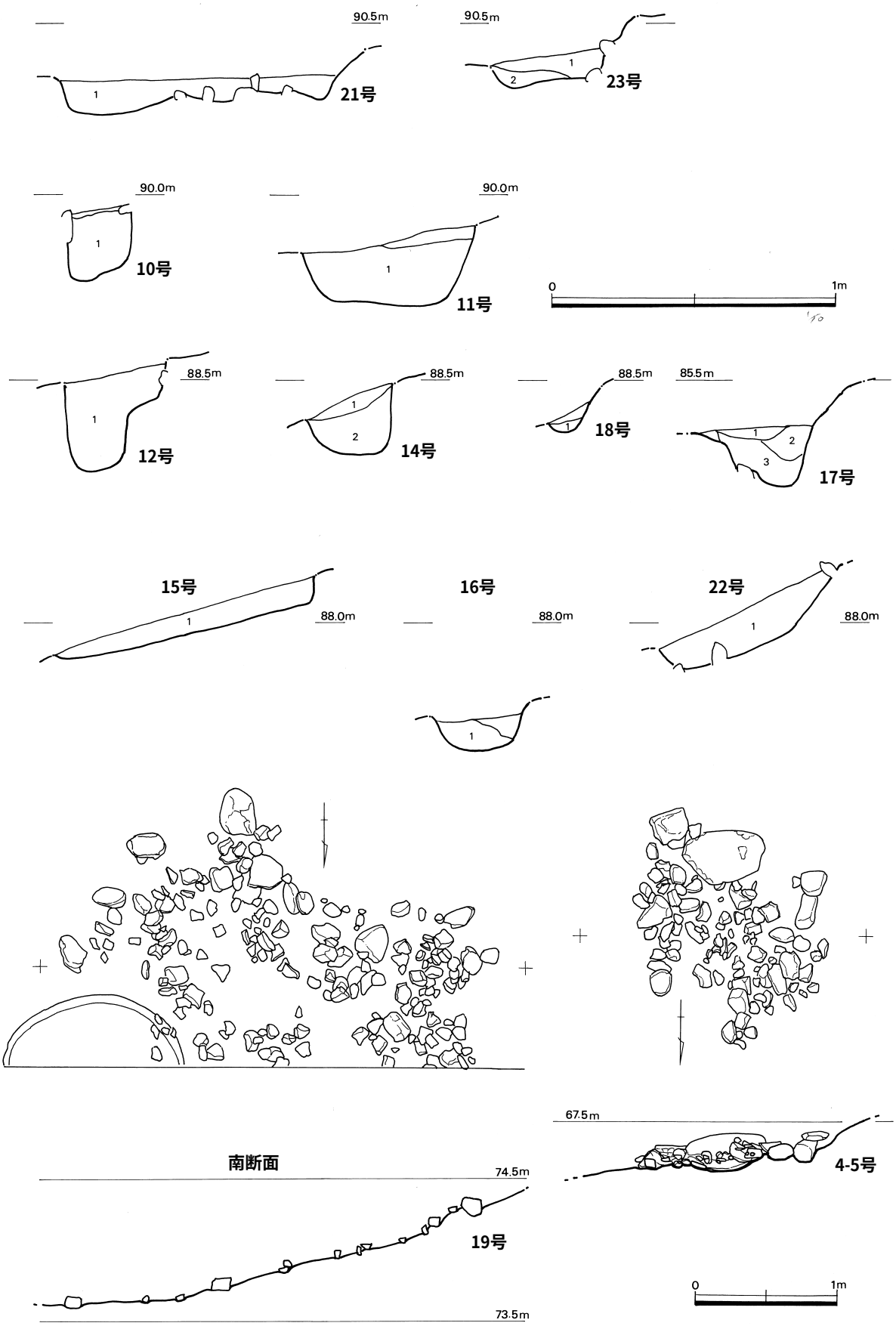
４は叩きで成形を行った甕形土器片。色調は表面が赤味を帯び内面は暗黄色を呈する。**５**は４と同一個体と思われる土師器片。表面に叩きの痕が残る。色調４と同様。**６**は玉縁状に口縁部を膨らませた甕形土器片で，色調は内外面供に暗黄色を呈する。**７**は口縁端部を摘み上げたような断面三角形状をなす。東播系の鉢を真似た在地の資料で，色調は内外面共に暗黄色を呈する。**８**は口縁部を内湾させ，口縁外面の下に１条の沈線と菊花文のスタンプを横位に連続して押印し，これを区画するために２条の沈線を巡らせた火入れ具。浅鉢Ⅲ形式で14世紀後半～15世紀後半の時期にあたる。

瓦質土器

９は瓦質の火入れ具で，内面は指による押さえが残る。**10**は外面と内面を櫛状工具で口縁部以下を横位のナデとし以下を斜位のナデで器面を整形している。口縁端は，平坦とし以下口縁部へ丸味を持たせた作りとする火入れ具。色調は，内面灰黒色，外面口縁部は黒色，胴部灰黄色を呈する。

土師器甕

11は1.2㎝～1.5㎝の厚みのある底部から直線的に延びる甕。



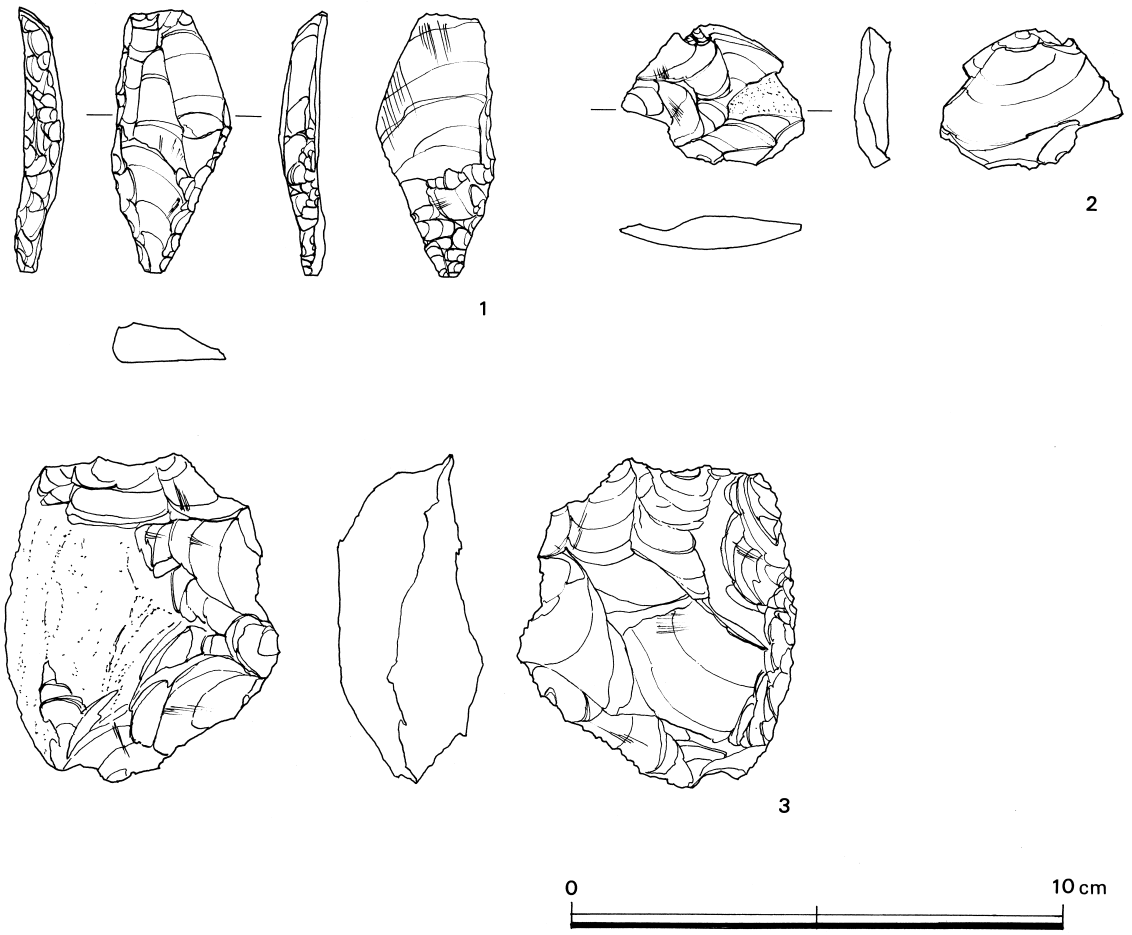
第37図　遺構及び遺構断面

土師器皿

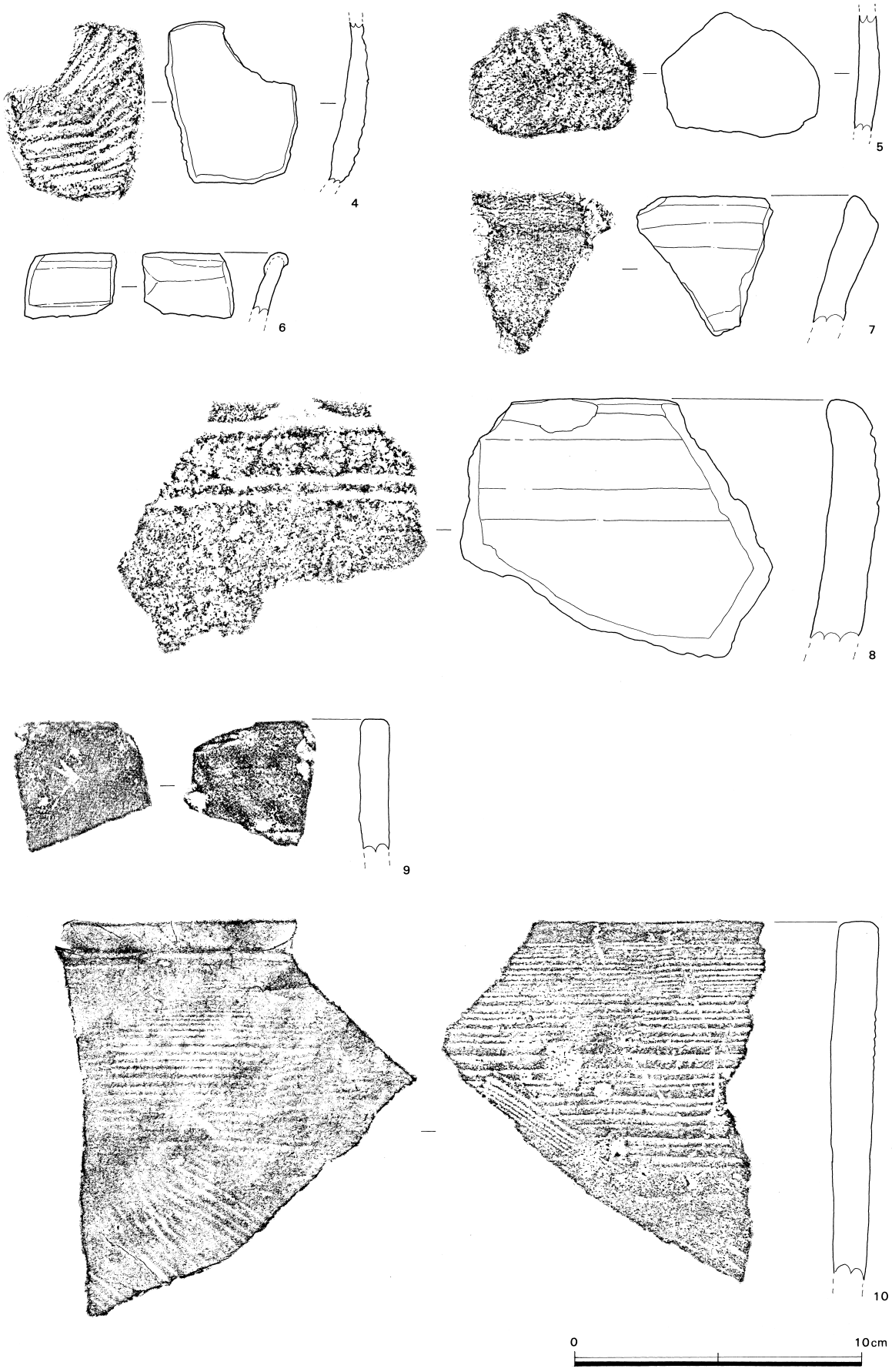
12は底部と胴部の境に段を持ち，外面が膨らみ気味に立ち上がる。色調は，内外面共に明黄褐色を呈する。底部の糸切離しについては不明。**13**は底部と胴部の境に段を持つ。底部は，糸切離しの痕が残る。色調は，内外面共に明黄褐色を呈する。**14**は全体的に器面が風化し，丸味を帯び糸切離しの痕も不明である。色調は，やや赤味のある淡黄褐色を呈する。**15**は底部と胴部の境が不明瞭な形で立ち上がる。色調は内外面共に淡黄褐色を呈する。**16**は底部から胴部の立ち上がりに0.5㎝幅の凹線が二本引かれている。色調は，内外面共に淡黄褐色を呈する。**17**は底部から胴部への立ち上がりに段差が明瞭に付き，糸切離しの痕が残る。内面の見込み中央部に盛り上がりが見られる。色調は，内外面共に赤味を帯びた淡赤黄色を呈する。**18**は土師質土器の胴部片で，胴部の下端から二段の凹線が引かれている。16の凹線幅より0.2㎜広い0.7㎜ある。色調は，淡黄褐色を呈する。

輸入陶磁器

19は玉縁の白磁碗。比較的大きな玉縁を作り，体部中位で直線的に口縁部へ延びる。体部の中位以下は，無釉としている。Ⅳ類ａ（11世紀～12世紀初頭）釉の色調は灰白色を呈している。**21**は青磁碗の胴部で色調は，青味に灰色が混ざった青灰色を呈する。**22**は高台内及び，畳付を無釉としている。内底見込み部分は，重ね焼の畳付の痕が残る。色調は，緑色気味の青色を呈する。胎土は黄灰色を呈する。



第38図　石器



第39図　土師器・瓦質土器

須恵器・陶器

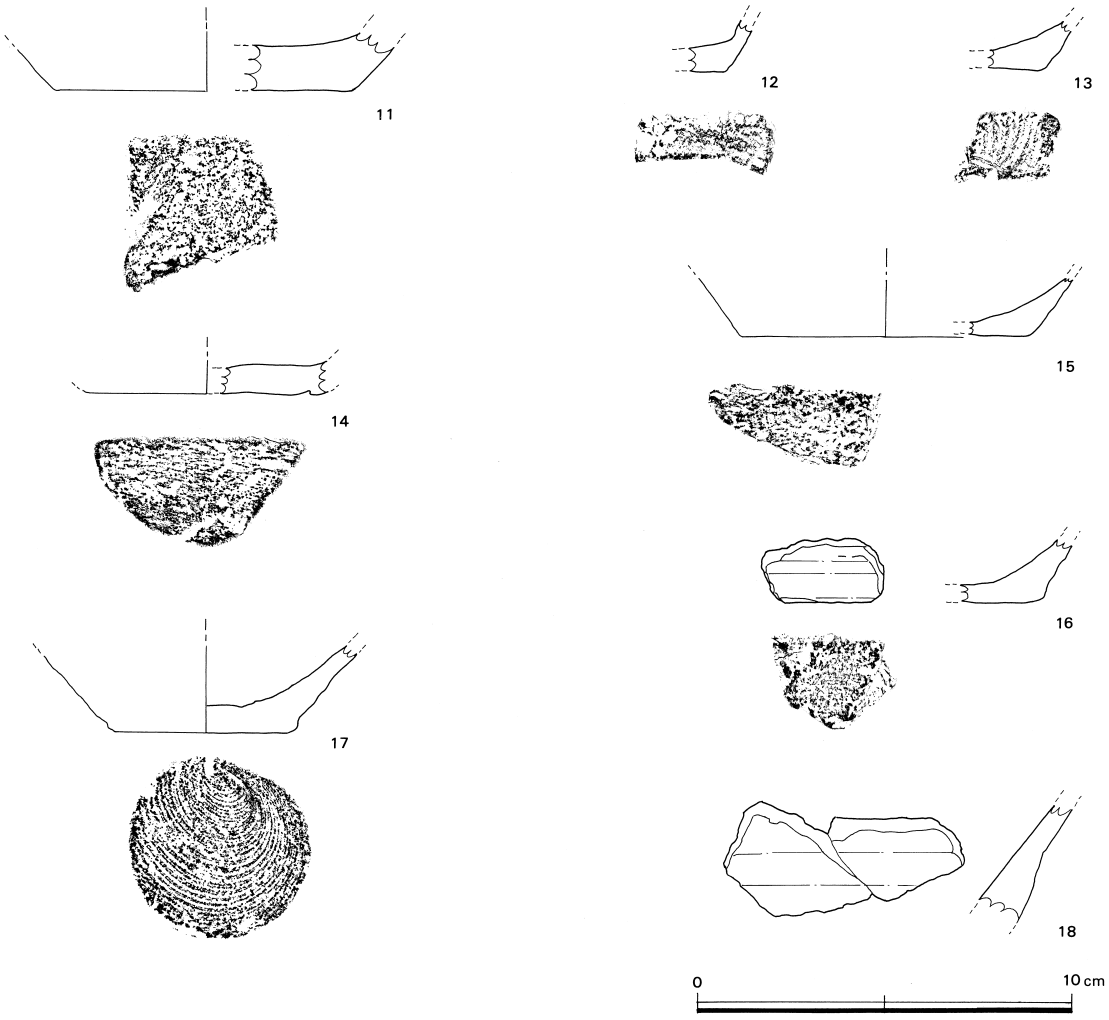
23は非常に高温で焼成されているため胎土が小豆色を呈している。内面の上部は自然釉が掛かり下部は灰色を呈している。外面は，二次的に熱を受けて剥がれ落ちた須恵器と思われる。**24**は陶器小碗で，白磁を意識したような作りをし，黄色の胎土に釉が掛かり暗黄色を呈する。口縁部は外反する。**25**は天目の陶器碗。黄色の胎土に鉄釉が掛かり内面は，茶色の下地に焦茶色の釉が飛沫し，外面は茶色の下地に黒色の釉が飛沫している。

滑石製石鍋

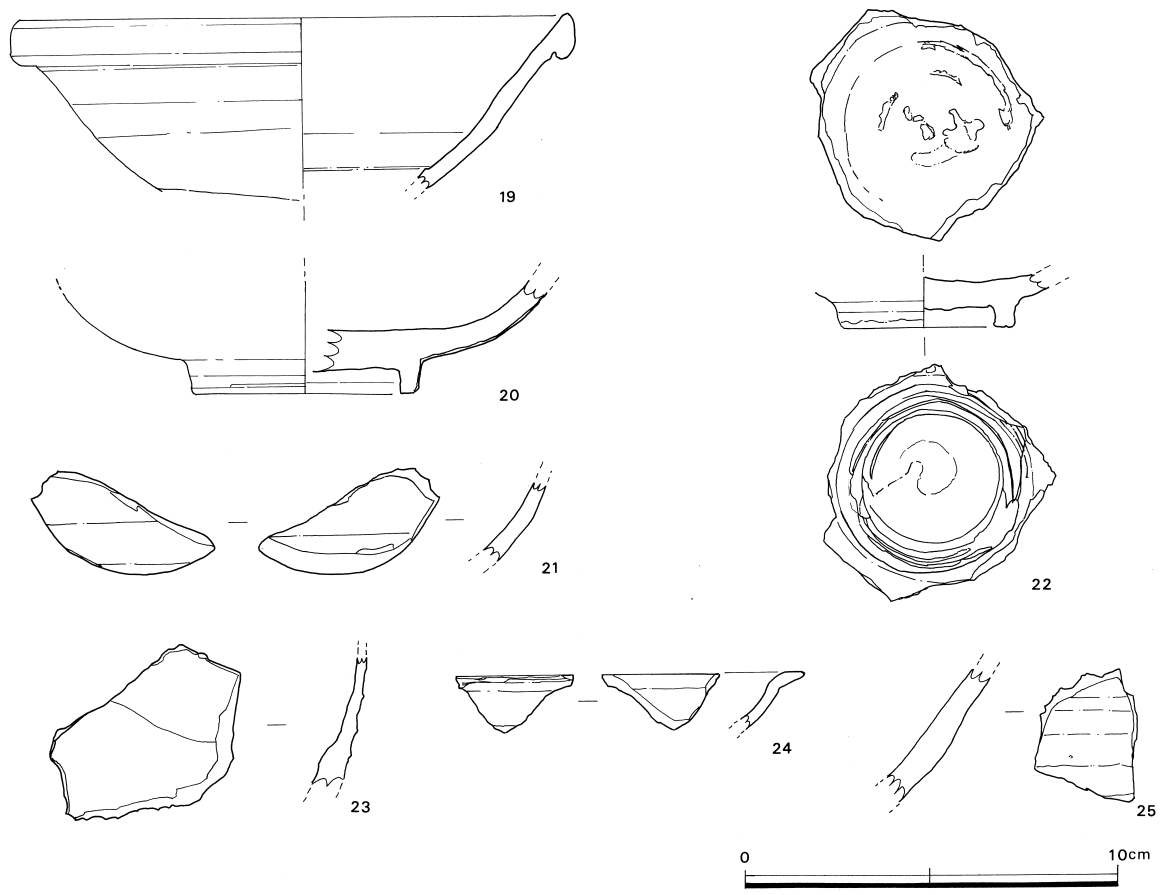
26は滑石製石鍋の胴部片。現状は，上下３段（１段の幅が1.6㎝）に成形を分割し，鑿の削り痕を0.6㎝～0.5㎝で連続して縦位の削りで横方向に行い製品としている。内面は，磨きが掛かり削り痕が見えない。表裏面共に滑石の質が良くないため自然面に穴が開いたままで使用している。

近世から近代の陶磁器

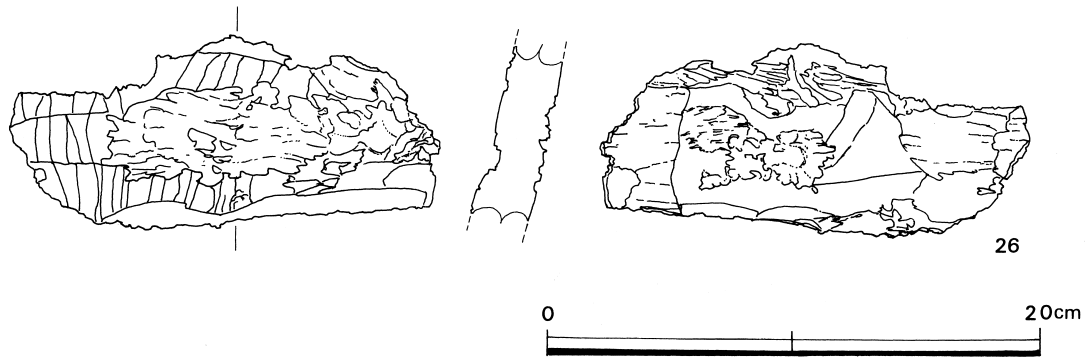
27は17世紀から18世紀にかけての瓶で，緑釉と鉄釉が掛けられた二彩手に刷毛目の唐津焼片。**28**は白色の釉薬を内外面に掛けた瀬戸碗。**29**は外面に白色の釉薬を掛け内面は，透明な釉をかけ青味がかっ



第40図　土師器甕・土師質皿



第41図　輸入陶磁器・須恵器・陶器



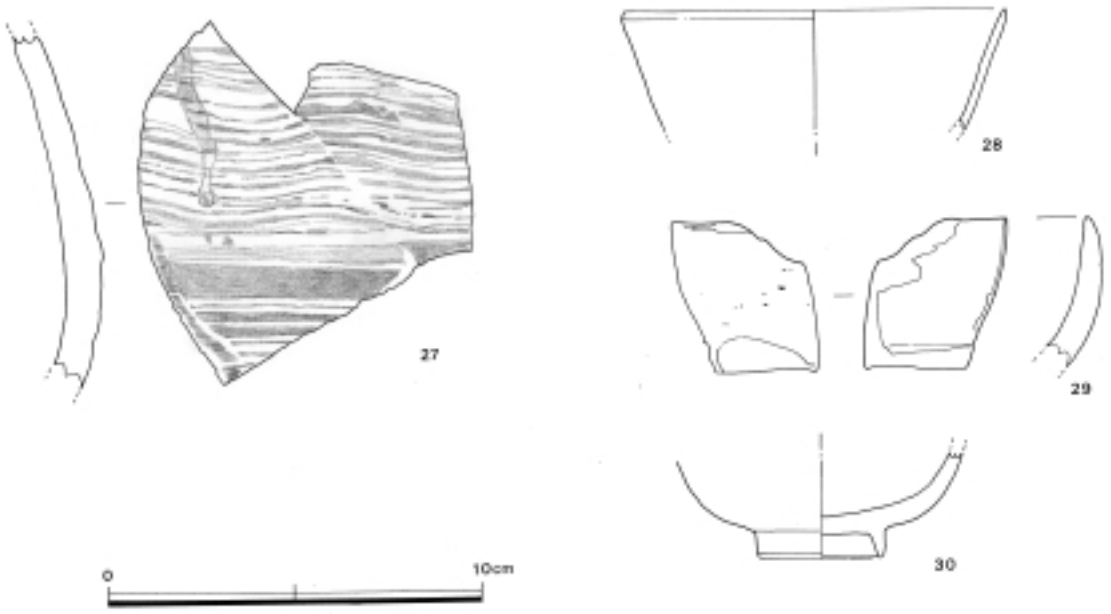
第42図　滑石製石鍋

た色調とした瀬戸碗。

30は高台無釉とした瀬戸碗。外面と高台内に白色の釉を掛け内面は透明な釉薬を全体に施釉している。

瓦（第44図，表７～表８）

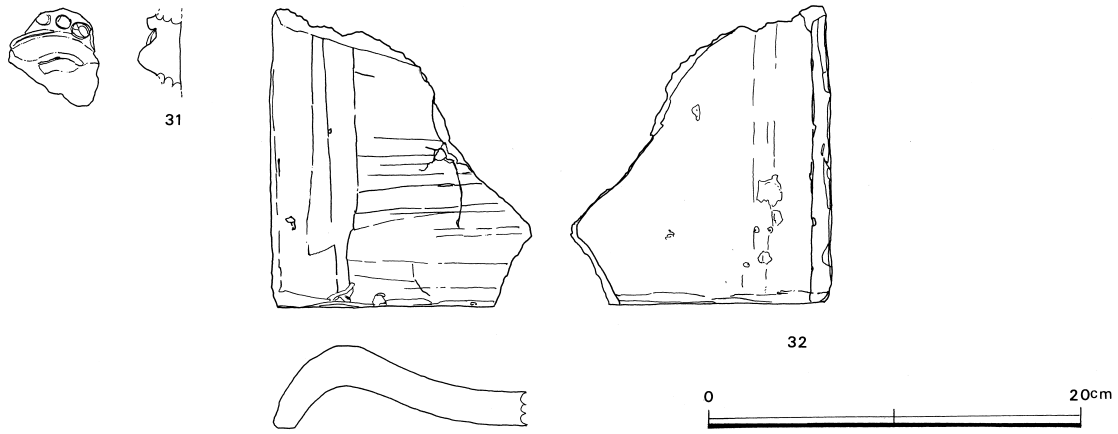
出土した瓦は，平瓦，桟瓦，軒瓦，丸瓦など21点の一般的な屋根瓦が確認されている。本調査では巴瓦１点，桟瓦１点，を紹介する。完品での出土無し。瓦の部位・名称に関しては，『森岳城跡』－長崎県文化財調査報告書　第166集－を参照とした。



第43図　近世・近代の陶磁器

巴瓦

31は５Ｅ区１層出土。燻し瓦。巴部。色調は瓦当面は灰色，背面はオリーブ黒。焼成は良好。文様は三つ巴文。右巻き。巴頭部の断面はカマボコ形で丸味があり太い，尾部は接合しない。珠文は残存２，脱落１で間隔は狭い。磨滅により不明瞭であるが微量のキラコの付着が確認される。背面にはナデ調整が確認される。



第44図　巴瓦・桟瓦

桟瓦

32は４Ｃ区１層の出土。燻し瓦。頭部。色調は両面共に暗灰色。焼成は堅緻。凹面はヘラ状工具による強めの調整が施されている。キラコの付着が確認される。

【参考文献】

坪井利弘　1987『桟瓦屋根のデザイン』「屋根の納め方」改題・改訂版　理工学社
坪井利弘　1986『図鑑瓦屋根（改訂版）』理工学社

坪井利弘　1976『日本の瓦屋根』工学博士　玉置豊次郎監修　理工学社
秀島貞康　2004　諫早市教育委員会『尾和谷城跡』諫早市文化財調査報告書 第16集「第Ⅴ章遺物」
川瀬雄一　2000　諫早市教育委員会『沖城跡』「第Ⅲ章 遺物４・瓦」諫早市文化財調査報告書 第14集
東貴之・野澤哲郎（旧姓　竹中）2002　長崎県教育委員会『森岳城跡』「第３章 調査の概要　第４節 出土遺物１・瓦」長崎県文化財調査報告書 第166集

５．小　　結

平成23年度調査は，1,594㎡を実施した。その結果16基の遺構を確認，遺物としてナイフ形石器，白磁，青磁，土師器，瓦質土器，近世陶磁器等の遺物の出土があった。

今回の調査で13基のピットを検出したが，何れからも遺物の出土は認められなかった。また，斜面でのピットの在り方については，柵列的な連続したピットではなく，掘立柱建物的な並びでもなく判然としない状況であった。

遺物は，何れも遺構に伴う資料は無く，１層（腐葉土）ないしは，２層からの出土である。調査で最も古い資料としては，縦長剝片を使用したナイフ形石器が出土している。このタイプの石器は雲仙市国見町百花台遺跡[註12]のⅥ層出土のナイフ形石器と類似した石器の製作を行っている。土器類では，叩きの成形痕がある土師器が出土している。輸入陶磁器類[註13]では，口縁部を玉縁の作りとした白磁碗[註14]が出土しており，11世紀～12世紀初頭の資料であるが，これについては，平成11年度から平成14年度にかけて実施している諫早市教育委員会[註15]の調査で，平安時代の遺物は含まれておらず出土品は14世紀中頃から15世紀後半の遺物としており伝世品の可能性が高いと思われる。

15世紀代の資料としては，菊花文のスタンプを口縁部以下に連続した土師質[註16]の火鉢，滑石製石鍋が出土している。また，近世では唐津焼[註17]の瓶，近代の瀬戸焼等が出土している。以上のような結果から，旧石器～近代の遺物の出土があり，尾和谷の調査地斜面を長期に渡り利用していることが確認できた。

【註文献】

註12　『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第92集　長崎県教育委員会　編集　田川，副島，伴　1988
註13　『貿易陶磁研究 No２』「14～16世紀の青磁椀の分類」著者　上田秀夫　1982
註14　『九州歴史資料館研究論集４』「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心にして－」横田賢次郎，森田勉
註15　『尾和谷城跡』諫早市文化財調査報告書第16集　諫早市教育委員会　編集　秀島貞康　2004. 3
註16　『概説　中世の土器・陶磁器』編集　中世土器研究会「10瓦質土器［１］奈良火鉢」立石堅志　1995
註17　『九州陶磁の編年』「陶器の編年３．火入・瓶」著者　船井向洋　2000

【参考文献】

参１　『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集「［10］九州・南西諸島」著者　山本信夫，山村神榮　1997

図版４

調査風景

調査風景

７Ｂ～５Ｂ
南壁

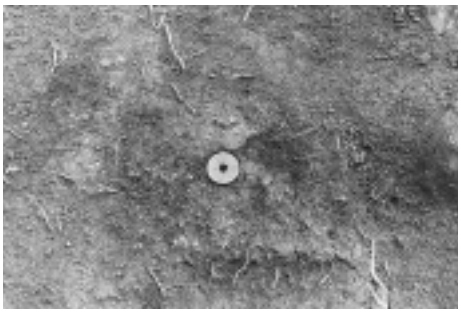
８Ｄ南壁

５Ｂ南壁

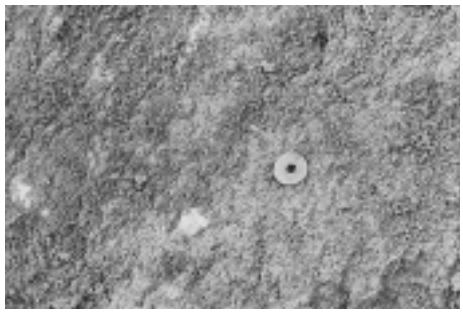
６Ｂ南壁

遺物出土
状況

遺物出土
状況

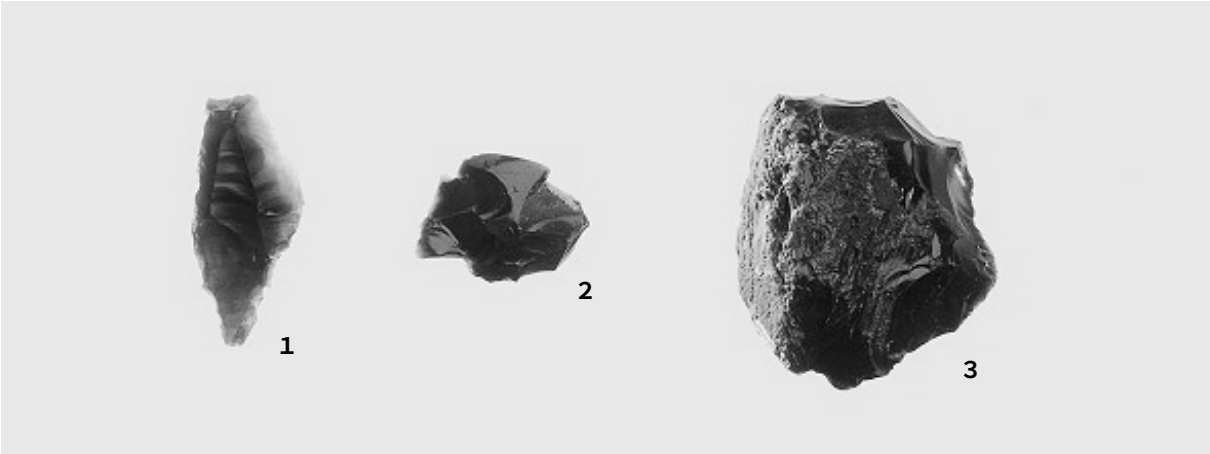


遺物出土
状況

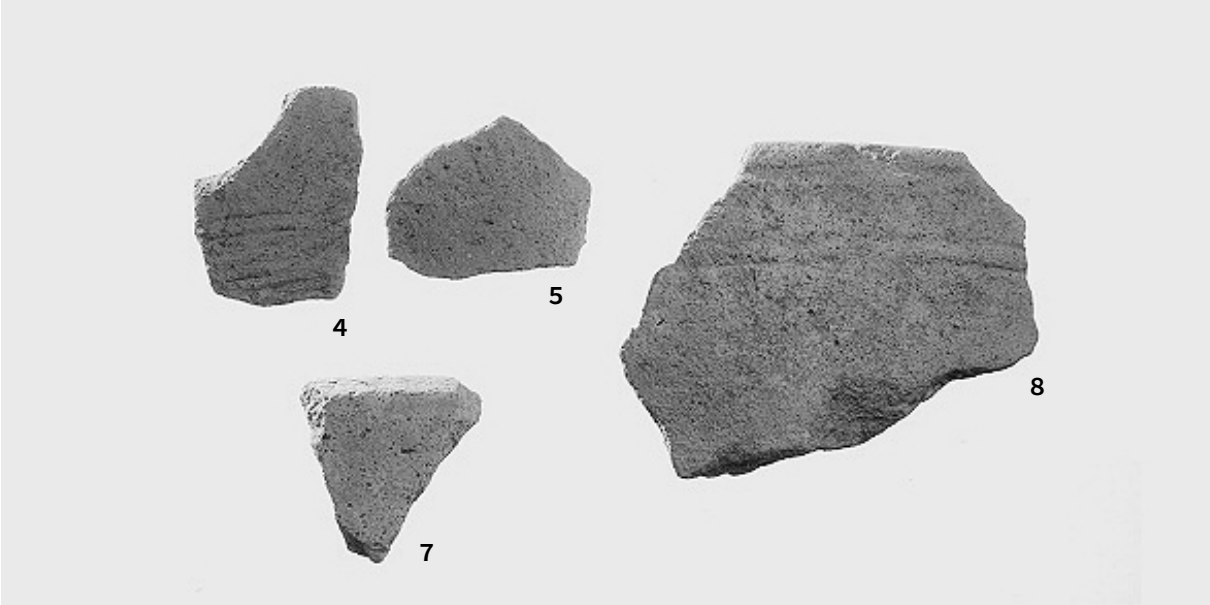


遺物出土
状況

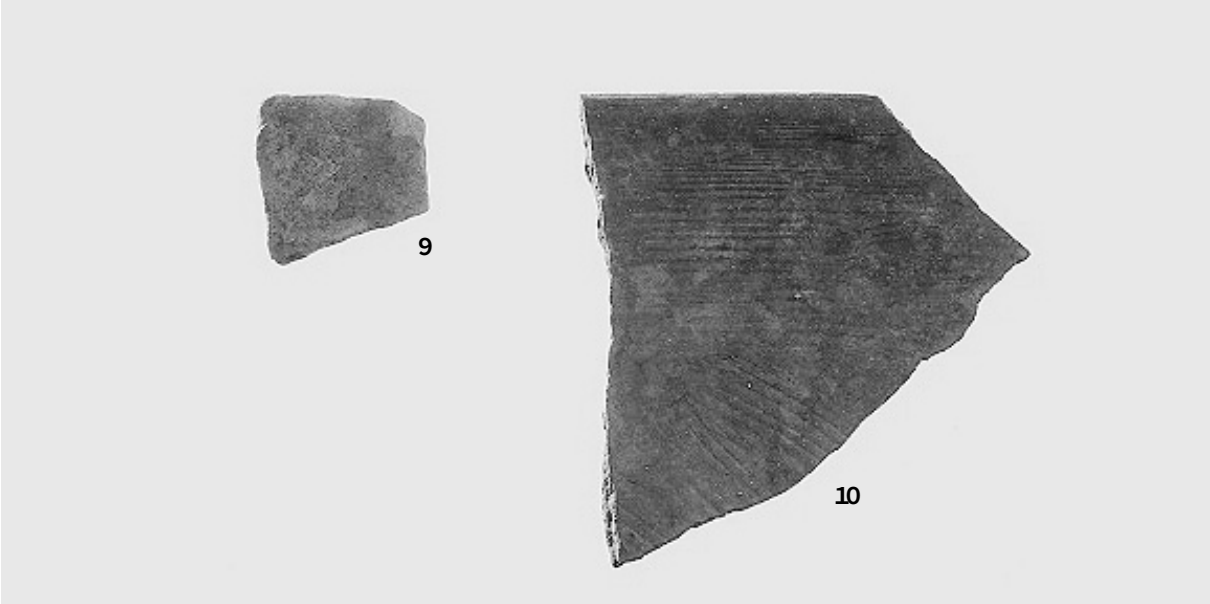
二次調査



石器

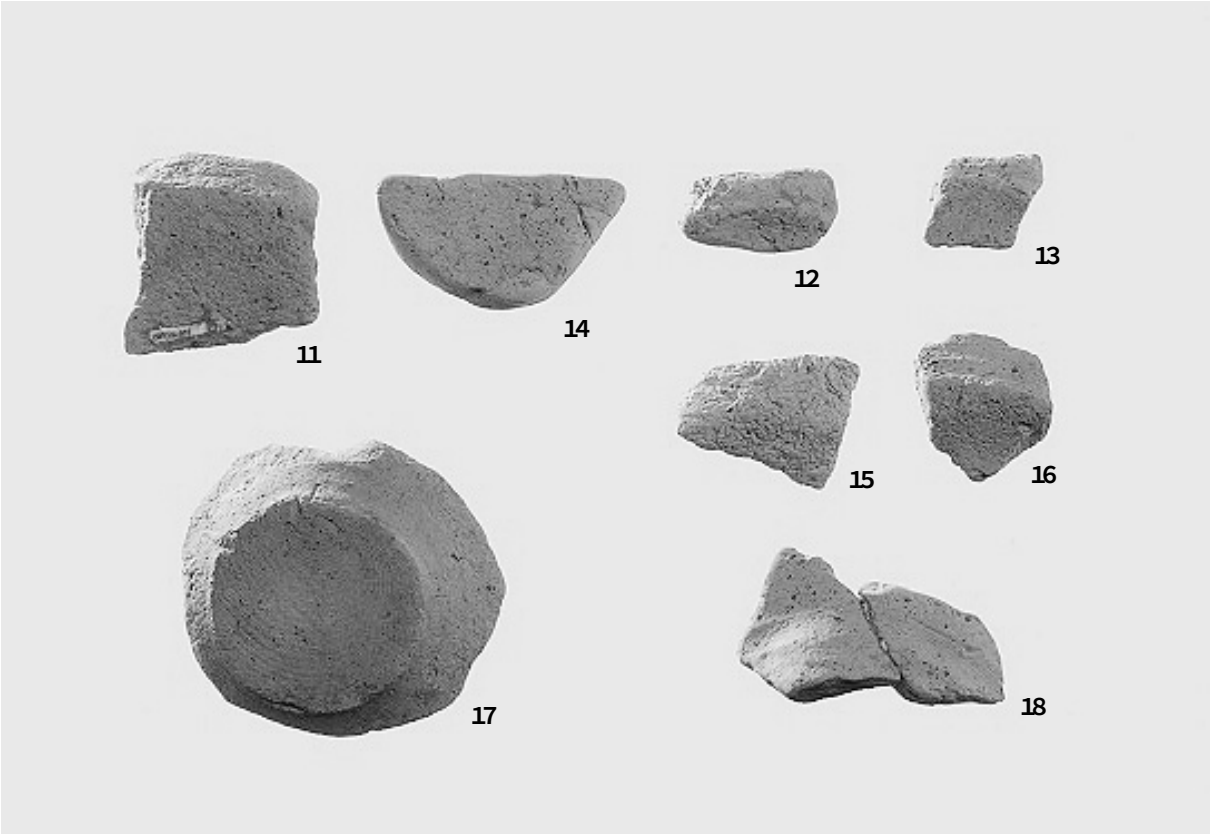


土師器

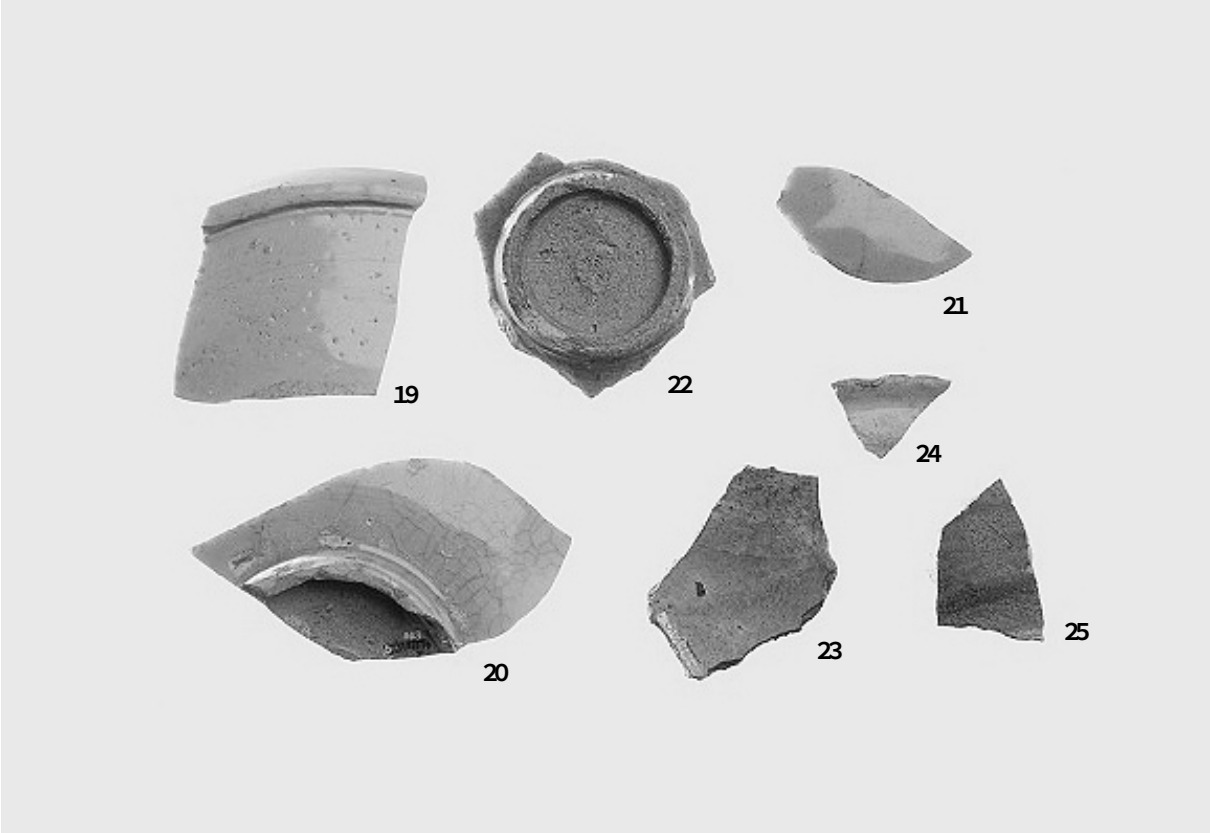


瓦質土器

出土遺物その１



土師器甕，土師質皿



輸入陶磁器，須恵器，陶器

出土遺物その２

第３部　自然科学分析
Ⅰ　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・尾嵜大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子

１．はじめに

長崎県諫早市に位置する中世の山城，尾和谷城の土坑より検出された炭化材について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。

試料は，３Ｄ区３号土坑の炭化物（１～２層）から採取された炭化材１点（PLD-19034）と２Ｃ区８号土坑の焼土（２層黄褐色土）から採取された炭化材１点（PLD-19035）の計２点で，いずれも最外年輪を含む試料である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}Ｃ年代，暦年代を算出した。

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-19034	調査区：3D区 遺構：3号土坑 層位：炭化物(1～2層)	試料の種類：炭化材(枝,径6mm) 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外-5年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-19035	調査区：2C区 遺構：8号土坑 層位：焼土(2層黄褐色土)	試料の種類：炭化材 試料の性状：最外年輪 採取位置：最外-1年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)

３．結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}Ｃ），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}Ｃ年代を，図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}Ｃ年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}Ｃ年代（yrBP）の算出には，^{14}Ｃの半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}Ｃ年代がその^{14}Ｃ年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動，および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}Ｃ年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお，１σ暦年代範

囲は，OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-19034	-27.21±0.23	323±20	325±20	1518AD(9.9%)1531AD 1537AD(45.2%)1594AD 1619AD(13.0%)1635AD	1490AD(75.9%)1603AD 1612AD(19.5%)1643AD
PLD-19035	-26.85±0.20	345±20	345±20	1490AD(27.6%)1523AD 1573AD(24.8%)1603AD 1609AD(15.8%)1629AD	1467AD(37.8%)1530AD 1540AD(57.6%)1635AD

４．考察

各試料の暦年較正結果のうち，２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

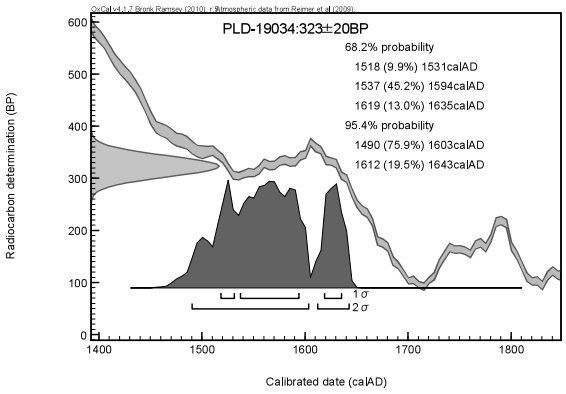
３Ｄ区３号土坑の炭化物（１～２層）から採取された炭化材（PLD-19034）は，1490-1603 cal AD（75.9%）および1612-1643 cal AD（19.5%）で，15世紀末～17世紀中頃の年代範囲を示した。一方，２Ｃ区８号土坑の焼土（２層黄褐色土）から採取された炭化材（PLD-19035）は，1467-1530 cal AD（37.8%）および1540-1635 cal AD（57.6%）で，15世紀後半～17世紀前半の年代範囲を示した。尾和谷城は，出土遺物から中世のなかでも新しい時期の山城と推定されているが，今回の試料はいずれも15世紀後半～17世紀中頃におさまる年代範囲であり，城の時期と整合的である。

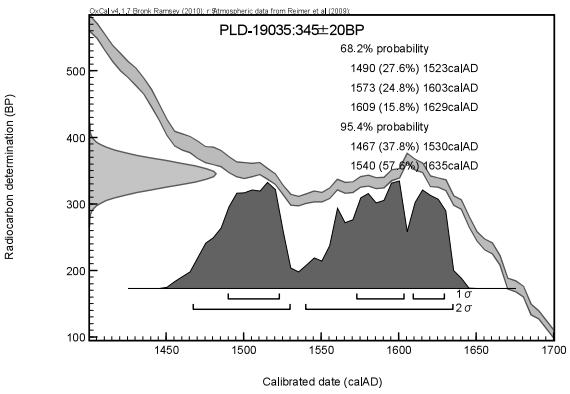
【参考文献】

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：３-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G. S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.(2009)IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.





Ⅱ　尾和谷城のプラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

１．はじめに

長崎県諫早市において，九州新幹線開通にともなう埋蔵文化財発掘調査が行われ，中世の山城である尾和谷城から土坑が検出された。尾和谷城周辺の古植生を検討する目的で，土坑から花粉分析用とプラント・オパール分析用の試料が採取されたが，花粉分析を行ったところ，試料には花粉化石が含まれていなかった。そこで，以下では試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し，遺跡周辺のイネ科植生について推定した。

２．試料と方法

分析試料は，３Ｄ区３号土坑から２点（試料№１，２），２Ｃ区８号土坑から１点（試料№３）採取された(表１)。これらの試料について，下記に示した手順に従って処理を施し，プラント・オパール分析を行った。

表１　分析試料と堆積物の特徴

試料No.	調査区	遺構	層位	堆積物の特徴
1	3D区	3号土坑	1～2層	黒色（2.5Y2/1）土
2			4層	暗褐色（10YR3/4）土
3	2C区	8号土坑	2層	黄褐色（10YR5/6）土

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定)。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり，約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30㎤加え，脱有機物処理を行う。処理後，水を加え，超音波ホモジナイザーによる試料の分散後，沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し,検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが300個に達するまで行った。

３．結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（表２），それらの分布を図１に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果，３試料からイネとネザサ節型，クマザサ属型，キビ族，ウシクサ族の機動細胞珪酸体が確認できた。イネ機動細胞珪酸体とウシクサ族機動細胞珪酸体は全ての試料から産出しており，それぞれ1,300～7,800個，6,300～26,600個である。ネザサ節型機動細胞珪酸体は試料№１で19,400個，試料№３で7,800個産出した。クマザサ属型機動細胞珪酸体は試料№１で1,200個，キビ族機動細胞珪酸体は試料№３で1,300個産出している。試料№１では連なった状態のイネ型短細胞珪酸体も確認された。

表２　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数

試料番号	イネ（個/ｇ）	ネザサ節型（個/ｇ）	クマザサ属型（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	不明（個/ｇ）
1	6,000	19,400	1,200	0	26,600	12,100
2	1,300	0	0	0	6,300	2,500
3	7,800	7,800	0	1,300	12,900	5,200

４．考察

試料№１（３Ｄ区３号土坑１～２層）と試料№３（２Ｃ区８号土坑２層）では放射性炭素年代測定が行われており，試料 No. １は２σ暦年代範囲（確率95.4%）で1490-1603 cal AD（75.9%）および1612

図１　尾和谷城におけるプラント・オパール分布図

-1643 cal AD（19.5%），試料№３は２σ暦年代範囲で1467-1530 cal AD（37.8%）および1540-1635 cal AD（57.6%）の値が得られている（放射性炭素年代測定の項参照）。どちらも15～17世紀の年代を示しており，試料№１と試料№３はほぼ同時期の堆積物と思われる。

試料№１（３Ｄ区３号土坑１～２層）と試料№３（２Ｃ区８号土坑２層）ではイネ機動細胞珪酸体の産出がある程度見られ，特に試料№１ではイネ機動細胞珪酸体と共に，連なった状態のイネ型短細胞珪酸体も確認された。よって，人為的か自然かは不明であるが，土坑内にイネの葉身や稲藁が入り込んでいた可能性が考えられる。また，両試料ではネザサ節型機動細胞珪酸体とウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。ネザサ節型のササ類（ケネザサやゴキタケなど）もウシクサ族（ススキやチガヤなど）も，林縁部や日のあたる開けたところに生育していたと考えられる。今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていないため，どのような森林が遺跡周辺に広がっていたかは不明である。しかし，九州地方の大まかな植生史を見ると，シイ属やアカガシ亜属の照葉樹林から二次林への交代開始時期は弥生時代中期～古墳時代に始まって，低地から内陸山地に向かって拡大しており（畑中ほか，1998），おそらく本遺跡周辺においても，中世には人の手が加わった二次林が分布して，その林縁部や山城の空き地などにはネザサ節型のササ類やウシクサ族が草地を形成していたと思われる。

試料№２（３Ｄ区３号土坑４層）は試料№１と試料№３のプラント・オパール組成と異なり，イネ機動細胞珪酸体とウシクサ族機動細胞珪酸体の産出数が少なく，ネザサ節型機動細胞珪酸体の産出は見られなかった。よって，試料№２は試料№１と試料№３の堆積時期と異なっている可能性が考えられる。試料№２では放射性炭素年代測定が行われておらず，花粉化石の産出も見られないため不明な点が多いが，試料№２が採取された３Ｄ区３号土坑４層の堆積時における尾和谷城周辺の植生について，プラント・オパール分析から考えられる２つの可能性を以下に記した。まず１つは，３Ｄ区３号土坑が尾和谷城の築城当時に掘られた土坑で，４層が築城当時に近い時期に堆積した層であれば，築城当時の遺跡周辺は築城にともない樹木や下草が伐採されて山が整備されたばかりで，開けた場所は存在したものの，まだネザサ節型のササ類やウシクサ族もあまり生えていなかった可能性。もう１つは，試料№２が採取された４層の堆積時期には城周辺に森林植生が発達しており，開けた場所が少なかったため，ネザサ節型のササ類やウシクサ族が生育できなかった可能性である。しかし，いずれにしても時期を経るに従い，ネザサ節型のササ類やウシクサ族などのイネ科の草本が城周辺に分布を広げていったと思われる。

なお，山城内における水田の存在は考え難いため，試料№２と試料№１あるいは試料№３に見られるイネ機動細胞珪酸体の産出数の相違が生じる原因については，稲藁が持ち込まれたなど人為的影響を反映しているか，山城周辺の水田の規模を反映している等の理由が考えられよう。

【引用文献】

畑中健一・野井英明・岩内明子（1998）九州地方の植生史．安田喜憲・三好教夫編「図説日本列島植生史」：151-161，朝倉書店．

第４部　尾和谷城跡の自然石板碑

「貴胤善富座元禅師」銘自然石板碑（写真２）

本碑は，現在，下大渡野の県道富川渓線側の溝下に遺棄された状態で立つ。本来建碑地がどこだったのか不明だが，個人に関わる供養碑（逆修？）として建碑された可能性が高い。以下，所見を記す。

１）「貴胤善富座元禅師」銘自然石板碑とその性格

本碑は，最大総高113㎝，最大厚33㎝の安山岩の板状自然石の上方に八卦文の「巽」（そ）を月輪内に彫り込む。彫出は断面観を三角形状に軽く陰刻したものであり，やや薬研彫り的な彫り込みをみせている。その下方に「貴胤善富座元禅師」と刻み，本碑の被供養者（？）の法名を陰刻している（町田採拓拓本参照）。碑面は，自然面をそのままに何の加工も加えず八卦文ならびに銘文を直接陰刻しており，後述するように本碑の製作時期を考える上で貴重な示唆を与えている。

ところで，八卦文の「巽」は，方向としては東南方向を指し，漂うもの，心迷うものの表象としての意味をもつ。「貴胤善富座元禅師」の「座元」は首座の異名であり，僧堂内での座の位置が一番元首にあたることを示している。このことから本碑は，４文字法名の「貴胤善富」なる人物に関わる供養碑または逆修碑であった可能性がある。また４文字法名と「座元禅師」の僧位から考えると，「貴胤善富座元禅師」なる人物は禅宗（曹洞禅か臨済禅かは不明）関係の僧であったように思われる。

２）八卦文彫出石造物とその製作時期

八卦文は，主に宝篋印塔塔身や五輪塔水輪，六地蔵塔などに陰刻されている。

八卦文を宝篋印塔の塔身に陰刻した事例としては，佐賀県東松浦郡北波多村立薗の瑞巌寺廃寺跡にある伝・波多三河守墓塔の宝篋印塔や県内では長崎市深堀の菩提寺（鍋島家墓地内や17代真法の墓地内）で数基確認できる。これらの宝篋印塔は，佐賀型安山岩製の馬耳型宝篋印塔であり，その形態から16世紀後半から17世紀初期ころの製作と考えられる。南島原市の日野江城跡「階段Ⅱ」で出てきた八卦文彫出の宝篋印塔塔身も，波多三河守墓塔などと同じ製作時期が考えられる。

八卦文彫出塔は，主に佐賀県側で確認される。とくに六地蔵塔の石幢竿石部分に陰刻されたもの（武雄市上西山運慶寺跡六地蔵塔，東松浦郡肥前町六地蔵塔［現在は佐賀県立博物館に移管］，長崎県では壱岐・安国寺六地蔵塔など）や，五輪塔の水輪部分に陰刻されたもの（福岡県嘉穂町麟翁寺五輪塔，佐賀県鹿島市能古見・慶長十一年銘五輪塔など）などがある。また，板状の自然石としては鹿島市七浦の慶長９年銘「道珎　妙仙」碑，同じ七浦の寛永15年銘「月盛浄江・秋屋妙船」碑などがある。

上記の事例から，八卦文彫出塔は主に16世紀後半から17世紀初期ころに製作されていることが理解されるが，この点は彫出内容からも首肯できる。とくに板状自然石を素材にした自然石板碑は，17世紀前半ころまでは基本的に自然面に直接銘文等を彫り込んだものであり，自然面の凹凸にそって陰刻する手法が用いられている。また陰刻の彫りも浅く，碑面全体に対して小振りに刻む傾向にある。

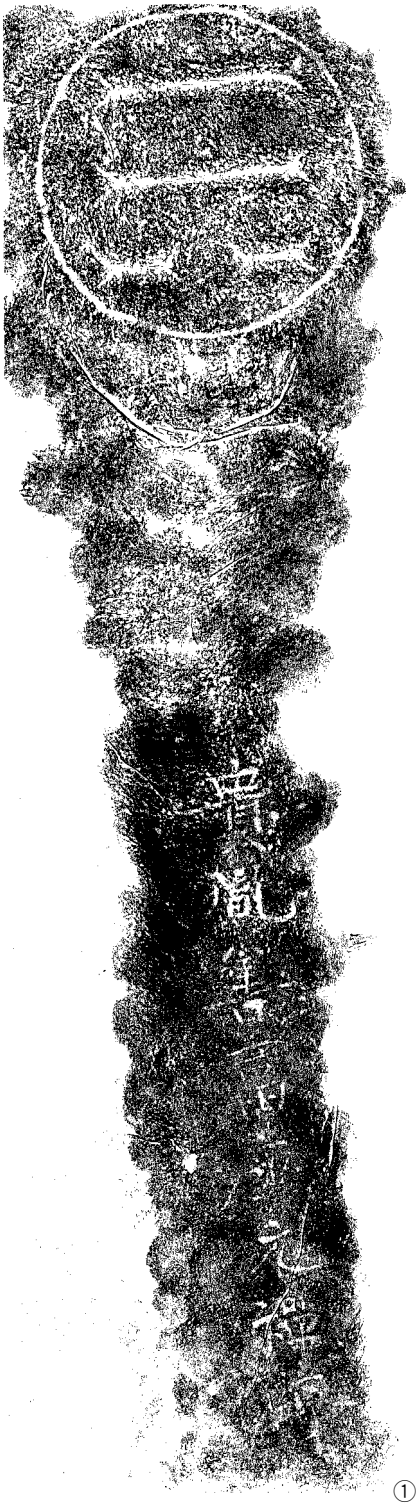
以上の各点を考慮すれば，ここで問題にしている「貴胤善富座元禅師」銘自然石板碑も，おそらく16世紀後半から17世紀前半ころに建碑されたものと思われる。

３）中世・石造物からみた本碑周辺の歴史環境

本碑周辺では，多くの中世・石造物が確認される（2004年　諫早市文化財調査報告書第16集『尾和谷城跡』参照）。年神社の拝殿背後では14世紀後半を初源に17世紀初期までの五輪塔や宝篋印塔が14基ほど確認される。また，年神社に隣接している明教寺では15世紀後半から17世紀前半ころの五輪塔が約４基確認される。さらに諫早市本明町の平松神社では1200年前後ころの滑石製宝塔宝珠，鎌倉時

代後半ころに比定される釈迦三尊種字陰刻自然石類型板碑，15世紀前半から17世紀初期にかけての五輪塔や宝篋印塔が約15基ほど確認される。

これら周辺の遺品群から考えると，本碑周辺は早くから有力な石塔造立階層が出現した地域であり，時代とともに造立階層の分化が進んだ歴史環境にあったことが想定される。本碑も，このような豊かな伝統的歴史環境の延長線上に建碑されたものと考えられる。


①

②

③

④

尾和谷城跡の自然石板碑（①拓影，②近景，③「巽」の拡大，④全景）

報告書抄録

ふりがな	おわたにじょうあと
書名	尾和谷城跡
副書名	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第７集
編著者名	町田利幸，川淵雅行
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦部町深江鶴亀触515番地１　TEL0920-45-4080
発行年月日	西暦2012年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
尾和谷城跡（おわたに）	諫早市（いさはやし） 下大渡野町（しもおおわたのまち）	42204	84-89	32度 52分 57秒	130度 １分 16秒	2010.10.25 ～ 2010.11.３	24m²	新幹線建設関連工事
						2011.１.６ ～ 2011.３.25	720m²	新幹線建設工事
						2011.４.18 ～ 2011.６.30	1,594m	新幹線建設工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾和谷城遺跡	城跡	中世 近世	焼土坑 土坑 礎石 集石 石組	輸入陶磁器 石鍋 近世陶磁器	焼土坑，土坑の炭化物について年代測定を行い15世紀後半～17世紀中頃の年代結果が得られた。

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第７集

尾 和 谷 城 跡

2012. ３．23

発行　長 崎 県 教 育 委 員 会
　　長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭 和 堂